気がついたらオリキャラ（女）になって原始時代にいたけどメス堕ちはしない主人公君　※

キサラギ職員

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルのまま。原始時代に女になっていたけど絶対にメス堕ちしない主人公が豊かな生活を目指して奮闘するお話。

※

目　次

1．じゃあまず年代を教えてくれるかな？ ―― 1
2．Genshijidai impact ―― 7
3．原始人が現代の知識をインストールしつつあるようです ―― 13
4．土器土器原始時代クラブ ―― 19
5．ぺちぺちこねこね ―― 24
6．おうちです。よろしくお願いします。 ―― 29
7．（性別を）踏みにじらせはせぬぞ ―― 33
8．いい飲み仲間だ！　ハチミツ酒を飲もう！ ―― 39
9．エルフはいないが森は焼いておこう ―― 44
10．これから毎シーズン森を焼こうぜ？ ―― 49
11．死ぬほど苦いぞ ―― 53
12．この時代では合法だよなって話 ―― 58
13．最初に畜産を考えたやつは奇才 ―― 64
14．酒！　飲まずにはいられないッ！ ―― 68
15．雑草という草は無い ―― 73
16．隕石ノシワザダタノカ ―― 78
17．ぴよぴよぴよ ―― 84
18．男女男男女男女 ―― 88
19．鉄器への道 ―― 92
20．収穫の秋 ―― 96
21．ぬいぬい ―― 101
22．最強嫁計画 ―― 106
23．ファーストキスとしてはノーカウントだ！ ―― 111
24．収穫よりもめんどくさいこと ―― 116

２５．きたぜ、ぬるりと ―――― 120
２６．一年後 ―――― 124
２７．　ねんがんの　アイアンハンマーをてにいれたぞ！ ―――― 129
２８．春待ち ―――― 134
２９．宿敵 ―――― 139
３０．デカブツ ―――― 143
３１．せふせふ！ ―――― 149
３２．※ ―――― 154
３３．宴 ―――― 159
３４．ソーマディア爆誕 ―――― 164
３５．赤ちゃんはどこからくるの ―――― 169

1．じゃあまず年代を教えてくれるかな？

「うわぁぁぁぁぁぁっ！　マンモス！　マンモスだぁぁぁぁぁ!!」

どうしてこんなことになったのか。

俺は全力疾走していた。

正直舐めていた。マンモスなんて象みたいにのろまで簡単に撒けるんだろうと思っていたわけだが、これがまあ速い。俺の全速力に余裕でついてくるのだ。というかデカい。動物園で見たことのある象の二回りはでかい。確かマンモス自体は俺の知る象と大差ない大きさだったはずだが、明らかにでかいのだ。

俺がかろうじてマンモス？の追跡を逃れられている理由は、森だからだ。木々が障害物になっていて、ちょこまかと走り回る俺のことを踏み潰せないからだ。もしなかったらぺしゃんこにされている。

「!!!!!!!!」

怒ったゾウ！

なんちて。

「ぶべぇっ!?」

コケた。濡れた葉っぱを踏んだのか思い切りこけて岩場に転がり落ちた。

「川か!?」

川だった。清らかな水が激しく流れている。岩場に入ったことでマンモスの速度が落ちた。マンモスの足で岩場を越えるのは難しいのだろう。

!!!!!!」

鼻を振り回して激しく威嚇しながらえっちらおっちらやってくる。もたもたしてはいられない。

俺はあえて危険な道を行くことにした。すなわち川の上流、滝のようになっているその真っ只中を進んでいくことだ。

確か遭難したときは川を遡ってはならないというのが鉄則らしいが、そんなことはどうでもいい。あのデカブツから逃げなければ今度こそお陀仏である。

岩に手をかけて、登る！　水が盛大に打ち付けて着ていた服がズブ濡れになるが構うものか。登る登る！

そして滝の上までたどり着くと、見下ろしてみた。マンモスが俺のことを恨めしげな眼で睨んでいるのが見える。

「ざまあ！　またな！」

俺は中指を立ててあらん限りの笑顔でマンモスを煽ると、その場を後にした。

気がついたのだが、どうやら荷物を何も持っていないらしい。携帯電話もなければ、財布も無い。家の鍵すらない。あるとすれば――。

「女ものかよ……というか」

女物のワンピースらしき服。

服はいい。体が問題なのだ。足元がみえねぇなと思ったらおっぱいがついてなさるのだ。

「うわっ……えぇ……」

髪の毛も腰まで伸びてるし、声も女のそれだ。鏡がないから顔まではわからないが、顔も女だろう。
そして、俺の手は下半身に伸びて、空中を切った。

「Ｏｈ・・・」

ないのだ。
なんということでしょう。愛用の剣が無くなっているではないか。

「お〝んなにな〝って〝る〝ぅぅぅぅぅ!!」

「寒いよぉ、おなかすいたよぉ」

一通り驚いた俺は持ち前の能天気さを発揮してとにかく歩いてみることにした。
寝て起きたらこれとかどんなバツゲームなのだろう。人里に戻りたい。
遭難したときはとにかく山を登れという話があったので、山の頂上を目指そうとしているところだ。ところが木々が分厚すぎて山頂がどっちなのかわからないのだ。やってはならないという川を遡るという方法に頼らざるを得ない。
いやそもそも、ここは日本なのか？　いつの間にかロシアの奥地にやってきたという可能性は？　だってマンモスだぜ。絶滅したはずじゃないか。ロシアには絶滅した生き物がいるという謎の確信があるので。

「煙が見えるな……」

日が沈んできてしまった。気温が下がってくる。薄手のワンピースが濡れてとにかく寒い。
煙の出ている地点まで歩いていってみると、何やら焚き火をしているではないか。焚き火の傍には棒に刺さった肉がかけられている。
この日本で、焚き火？　肉を直火で……？　ワイルドなキャンパーがいたもんだなぁ……。
緊急事態ということで、ここは頂きますか。
肉を掴んでむしゃり！　……塩が効いてないな……。すじも多いし……。
とはいえ肉である。すきっ腹に染み渡る！

「はふはふっ！　はふっ！」

俺が夢中で肉を貪っていると、草むらがガサガサと音を立てたではないか。
慌てて肉を全て口の中に収めて飲み込むと、隠れる場所を探す。見当たらない。わたわたしているうちに、その人物がにゅっと姿を見せた。

「誰だ？」

男だった。下半身を獣の皮で覆っただけの金髪青目の白人系。顔立ちはよく整っていて、男の俺（体は女になってるけどな！）からしてもイケメンである。

「……」
「……」

暫し見詰め合う俺たち。
状況からしてこの肉は彼のものだろうな。
俺が何を言うべきか考えていると、相手のほうが口を開いた。

「神様、我々をお救いください！」
「え？　え？」

俺が困惑していると、草むらからがやがやと人が出てくる。まあ予想はしてたけど下半身だけ隠して上半身はマッパだったよ！　おっぱいとか丸出しだよ！　なお子供は下半身も丸出しである。生まれたままの姿というやつだな！

どの人もみな、疲れていた。仕留めてきたのであろう猪を担いでいるものもいるし、木の実を持っているものもいる。

「なんと……あの夢は本当だったんだ！」
「白い毛皮を着ている！　確かに！」
「神様！　どうか！」
「お願いします！」

日本語じゃ無かったよ……なんというか、母国語のように意味が理解できる。何か大いなる存在が手を回しているのを感じるけど、言葉が通じるのはありがたい。

これで確信したね。異世界なのかどうかは知らんが、ここは……原始時代なんだろう。槍すら持っていないので、旧石器時代の更に前である可能性が高い。

人類の最初期は、木から下りることで始まった。二足歩行をして、獲物を追いかけて、採取をする。アフリカで生まれた矮小な哺乳類にすぎなかった人類は、地球の支配者として君臨するまでになった。俺は、どうやらその最初期の段階にいるらしい。

俺はなにやら神様扱いしてくる面々を前にどうするべきか腕を組んだ。

すると、いっせいに一段と跪いた。子供はぽかんとしていたけれど。

「え。ええええええええええええ!!??」

2．Genshijidai impact

焚き火前にて。

「……つまり要約すると、病が流行って群れがほとんど死んだ。生き残りを引き連れて移動してきたと……」

「そうなる」

俺は面々を率いていた『長』であるアキラスという美男子と話をしていた。

曰く、病が流行って群れの大勢が死んだ。

曰く、生き残った三家族と自分だけが移動することができた。

曰く、夢で白い毛皮を纏った女が自分たちを救ってくれる場面を見た。

「なるほどね～～～」

あーそーゆーことね。完全に理解したわ。

どこの誰だかは知らないけど、俺を女の姿にしてこの世界だか時代に送り込んだアホがいるらしいな？

冷静になって自分の姿を確認したんだけど、俺が作ってたゲームの女主人公の姿にソックリなのよね。設定としては魔族と人間のハーフで、不老不死。以外の設定が特に無いけど強いて言うならおっぱいとお尻は盛れるだけ盛っておきましたって感じだ。ムチムチ体型のダウナーな顔立ちをした長身女ってところか。髪の毛は黒。目の色も黒。目つきはあれだ、何か企んでいそうな怪しい目の設定にしておいたんだ。まあ過去設定がないので何も企んでないけど。

「どうか我々の群れを救ってほしい」

「ん～～～～～……わかった」

俺は隣に座っているアキラスに頷いて見せた。

というよりも選択肢が無いのだ。見知らぬ土地になんの道具も無く放り出されて生きていけるほど俺は、卓越したサバイバリストではないのだ。不老不死の設定があるなら死にはしないだろうが飢えと寒さに震えながらマンモスやらサーベルタイガー（もいるのかな？）と戦い続けるなんて真っ平ごめんである。

俺は焚き火を前に、あぐらをかいて座っていた。火を熾す技術があるなら、案外何とかなるかもなんて思いつつ。
「ふあああ……アキラス。少し寝るわ」
「その前に名前を聞いていいか？」
「ふぇ？　あぁ……ううん……」
名前ね。ファミリーネームなんて概念存在しないだろうし、ここは下の名前を呼びやすくしてっと。
「ソーマ。ソーマって呼んでくれ」
翌日。
俺は野営地の状況を確認していた。
三家族合計１５人。この時代にしてはやけに子供の数が少なく、１０人しかいなかった。と一人。持ち物は火熾しの道具と、大人の人数分の毛皮。仕留めてきたイノシシ一頭と、木の実。棍棒という名前の木の棒。あとは人数分の簡易的な差し掛け式（三角形型から片側を取っ払ったような）のシェルター。以上である！
なんとかしてくれって言われてもこれはつれーわ。というかよくぞこの装備で移動してきたなと思う。
さてと……。
「アキラス。普段狩りの時ってどうやってるんだ？」
「大勢で獲物に石を投げたり、殴ってる」
「そうか……」
簡潔な答えである。ウホウホ言いながら獲物を追いかける現代人のイメージする原始人そのものである。
人数も限られている。たったの十六人……俺も入れて十七人である。誰に何を任せるのか。何をしないのかの選択もしないといけないのだ。
俺は決断した。
「よし、まずは周辺の探索をしよう。川の場所とか、木の実がどこにあるかとかを、調べるんだ」
「別にしなくてもよくないか。獲物を探して移動すればいいわけだし」

なるほどね。定住ということをしない狩猟と採取の時代の考え方らしい疑問をアキラスが投げかけてくる。
俺の想定しているのは定住生活である。移動しながらの生活ほど難しいものはない。獲物が見つからなかった段階で詰んでしまう。定住して腰を落ち着けるべきだ。そのためには、ここが定住に適しているかを知らなくてはならない。
俺は現状の家である差し掛け式シェルターに潜り込むと、シェルター横の地面のゴミをどかし始めた。
「それは？」
「地図を作る」
「チズ？　というのは？」
「つまり、ここが今俺達がいる場所で」
俺は言いながら、小石を砂の上に置いた。そして、ここから見える山の方角に、三角の簡単な山を描き出す。
「これが山。何があったのかを描いていけば、一目瞭然だろ？」
「なるほど……これは便利だ……」
ふむん、アキラス君は頭の回転が早いらしいな。まあ群れを率いているんだから、頭の回転が遅かったらやってられないよな。
「みんな来てくれ！」
アキラスが声を張り上げると、どやどやと人が集まってきた。全員いるな。
「これを見て欲しい。神様が作ってくれた地図だ。この真ん中の石が俺たちが今いる場所。これが山だ。辺りを探索してわかったものがあったら地図に描き込んで行って欲しい！　じゃあ解散！　日が沈む前までに戻ってきてくれ！」
「おう」
「神様はここにいて」
「あ、はい」
なんか俺は行かなくてもいいらしい。参ったな……暇に……なってねぇよ！
食料はイノシシと木の実（たぶんドングリ）があるのでしばらくは

何とかなるので、まずは家をなんとかせねばなるまい。とはいっても本格的な竪穴住居を作るには、道具が不足している。まさか素手で木材を加工するとか無理難題だしな。
　ということで俺は、野営地に転がっていた石を拾うと打製石器の作成に取り掛かったのだった。
「ねえ、神様。それはなにをしているの？」
　さっそく女性の一人がやってきた。
「名前を教えてくれるか？」
「アパソスよ」
「アパソスね。俺はソーマ。これは、石器を作ろうとしてるんだ」
「セッキ？」
　アパソスが首をひねった。
　まあ言葉だけじゃわからんよなぁ……。とはいえ俺も石器を作るのは久しぶりである。中学生のときの実習で石器を作ったことがあるので完全なる素人というわけではない。
　石器は大まかに分けて打製と磨製がある。どちらが優れているというわけでもない。一番いいのは自然に石器として使える石があることであるが――――ううん、見渡してもいいものはおちていない。お、台座に使えそうな平らな岩がある。俺はそれをシェルターの前まで持ってきた。
　欲しいのは、斧である。住居を立派なものにするには木を切り倒したり、加工する必要がある。石を台座にかけて、別の岩で叩く！　叩く！　叩く！　とにかく叩いて、刃を形成していく。
「叩くたびに形が変わるのね」
「うん！　んで、大きいオノを作ろうとね！　してるの！」
「オノ？」
「木を切り倒すのに使えるぞ！　ふぅー硬い硬い」
　俺は一度手を止めると、別の石をアパソスに渡した。
「この石を別の石で叩いてみて」
「えいっ！　割れた！」
　アパソスが石に石を叩き付けると、破片がぽろりと落ちた。

剥片石器ってやつだな!!　これを木に埋め込めばナイフが作れるゾ！
「そういやいままでどうやって肉とかを捌いていたの？」
俺は疑問をぶつけてみた。石器なしにどうやってと。
「丸焼きにしてみんなで千切って食べたり……」
「ああ、そっかぁ……これからは石器で肉を細かくしたりできるようになるぞ」
「さすが神様……」
キラキラした目で見つめられて非常にくすぐったいです。
叩きつける！　叩きつける！　ふむ、刃が見えてきたな。
「そうそう、そうやって、お、うまいうまい。丁度肉の解体に使えそうなナイフができたな」
アパソスだが、案外器用なもんだ。やり始めてすぐにコツを掴んだのかカツカツと欠片を量産している。俺も頑張らなくちゃな。
しかし、簡単にできると思われた斧だが、時間がかかるな……。
「んー……あとは……ぺっぺっ！」
大体の形ができてきたので、続いて刃を研いでいく。台座に唾を吐きかけてオイル代わりにして、擦りつけながら研いでいく。
力仕事だ。何もかもが無いこの時代。ありとあらゆることに時間がかかるし、力も要るのだ。大自然の中から文明を立ち上げてきた先人たちを尊敬するぜ。
「じゃアパソス。頑丈な蔓と、これくらいの頑丈な枝を持ってきてくれるか？」
俺は斧を作る一方で、枝と蔓を要求した。
最初の製作物は斧で決まりだ。刃を枝にくくりつけて完成させよう。

結局斧を作るのに半日かかってしまった。慣れてないというのもあるし、素材が適切ではなかったというのもあるだろうけれどな。刃を鋭くするのにエラく時間がかかったんだよ。許してくれ。
戻ってきた面々からの情報を基に、地図を細かく描き込んでいく。

「……いいところだな」

決めた。ここに住もう。俺は決断した。

3．原始人が現代の知識をインストールしつつあるようです

得られた情報はこうだ。

まず方角は分からない。太陽がどっちから沈んで昇っているのかはわかるが、方角はわからん。暫定的に昇ってきた方角を東、沈んでいく方角を西にしておく。北と南は……どうやって知ればいいのかな？

近くに海があるらしい。ゴツゴツとして岩場が広がっていて、砂浜もあるらしい。貝の採取、漁が期待できる。

川はここから山の方角に行った先にあるらしい。水の確保は容易だろう。

あとは、ドングリの実をたくさんつけている森。ベリーの木。

……十分すぎるな。海が近く川も近いというのがでかい。海は貴重な塩分供給源になるし、タンパク源として優秀な貝が穫れる。川が近いのも助かる。定住するにはうってつけの場所に思える。

川に近すぎると氾濫したときに巻き込まれるし、海に近ければ津波が怖い。そうなると、両方から程ほど距離をとりつつ、高台である山にも近いここはまさにうってつけだろう。火山かもしれない？　休火山であることを祈ろう。おあつらえ向きに木がないのもいい。岩が適度に転がっているのもいい。動かせないような大きさの岩もあるけど、あれは加工すれば何かに使えるかもしれない。

俺は群れのメンバーから聞いた情報を地図に描き込むと、横でその作業を見ていたアキラスに声をかけた。

「ここに住もう」

「ここに？　ずっといたら、獲物が無くなってしまうのでは……」

「大目標を話していいか？」

「ああ」

俺は地図に四角を書き込んで、そこにVの字を書いた。

「農業をしたい」

「農業と言うと……？」
あ、わかってない顔だ。
確か縄文時代にも栗やら柿の栽培は行われていたらしいし、なんなら米の栽培も始まっていたという。とはいえ現状の彼らの水準は農耕なんてまったく思いついていない段階なんだろうな。この星が地球だとすると歴史が変わるんじゃないか？
俺は草を摘んで見せた。
「草にしろ、木にしろ、生えてくるだろ。で、木の実をつける。その木の実を大地にたくさんまいて、木の実をとれたらどうだろうか？」
「……そんなことが可能なのか？」
信じられないといった様子でアキラスが俺のことを見つめてくる。可能なんだなぁこれが。
俺は草を捨てると、腕を組んだ。
「できる。そうすれば安定的に食料を得られるようになるぞ。やってみないか？　いまだかつて誰も挑戦したことが無い取り組みになるけど……見返りは大きい」
「わかった。やろう。まず、なにをすればいい？」
「うーん、農業ってのは案外難しくて、一日二日でできるもんじゃないんだよなぁ……」
「一日？　二日？」
「つまり日が昇って落ちてくるまでのことを一日、それがふたつ合わさって二日な。まず俺が考えているのが家を作ることだ」
「家？」
あーもう。ありとあらゆる概念が未開発なせいで話がなかなか進まないぞ。
俺はアキラスが持ってきてくれたベリーを一つ摘むと口に放り込んだ。甘酸っぱくておいしい。いつになるかはわからないが、ベリーのお酒を作ってみたいね。
「そ。これ、この木で作った囲いがあるじゃない？　これをもっと大きくして、風と雨を防げるようにしたもの。その中央に焚き火ができる場所を作って、みんなで寝泊りをしよう。そのためにこれを作って

みた」
　俺は万を辞して自作の斧を掲げて見せた。刃のから少し外れたところに重りの石をくくりつけたもので、素手での伐採作業と比べたら圧倒的に早くできるぞ。
「斧っていうんだ。これを木に叩きつければ、斬ることができる。それで柱を作って、葉っぱで屋根を作ろう」
「……考えたことも無かった……今までは枯れて倒れた木を使っていたから……でもそんなに大きいものを作ると持ち運びが……定住か、定住だった」
　移動生活の癖が抜けないらしいな。
　アキラスがガシガシと頭を掻いた。
「神様。俺はとても信じられないが……でも信じるよ。その為に俺を使ってくれ」
「こき使ってやるからな、覚悟しろよ」
　俺とアキラスは笑った。

　翌日。
　俺は早速群れの男衆を集めて、斧作りに取り掛かり始めた。
　最初はみんな半信半疑だったが、俺が手ごろな木で斧の性能を実践してみせると、納得してくれた。やっぱり手が器用なやつというのはどんな集団にもいるもので、俺なんかよりもテキパキと斧を作れる人もいた。
「男衆は木を切ってもらって……で、女衆は採集……木の実を集めさせて欲しい。子供たちはどうすっかなぁ……アキラス、お前に任せてもいいかい」
「わかった。火の熾しかたを教えておく。ソーマは？」
　アキラスは俺のことを神様扱いをしてくれるけれど、ほとんど対等な立場で接してくれる。非常にありがたいね。
「最初は斧、ナイフ、あとハンマーつくりかなぁ……」
「ナイフはわかった。ハンマーってのは……？」
「うん？　石と棒を合わせて叩けるようにした道具のことだよ。もの

を砕いたりできるぞ」
「なるほど」
勘違いしちゃいけないのは、この時代の人は決して頭が悪いから原始人をやっているというわけではないということだ。発想や技術などの積み重ねがないだけで、俺たちと大差ないのだ。よって理屈さえ理解してしまえば、俺よりもうまくやれる人が出てきても不思議ではないのだ。
とりあえず、なんだかわからないままこんな世界だか時代にやってきてしまったわけだけど、なんとか生き延びよう。ほかの事は後で考えればいい。
「神様、どう固定するんですかね？」
「うん。この蔓をこうして……」
結び方がわからないものも多い。そもそも紐を結ぶという発想が無い人もいる。叩いて刃を作って、枝の先に結びつければ……斧の完成である。
人数分とまではいかないまでも数本出来上がればいい。
なぜ家を優先したかと言うと、寒さである。既に寒いのに、例えばこれから更に寒くなり雪でも降り始めたらどうだ。その前になんとか差し掛け式シェルターからの卒業をしておきたかった。
「戻ったよー！」
女衆が戻ってくる頃には、ようやく数本の斧とナイフが完成した。
女衆は大量のドングリを葉っぱに包んで帰ってきた。ふむ、籠があれば便利だな。
「名前教えてくれる？」
「アンセイカ」
「アンセイカ。ドングリってどう食べるの？」
「そのまま割って食べることが多いけど、苦くて食べられないのもあるから……」
アンセイカはドングリの一つをかみ締めて割って中身を取り出すと、俺に見せてくれた。
「砕いて水で混ぜて団子にして食べることが多いのよ」

「ふーむ。焼いたりする？」
「ええ。焼くとサクサクしておいしくなるの。みんなで作るから、できたら神様も食べてね」
こ、これが噂に聞く縄文クッキーか。丸呑みしているのではと危惧していたんだが、それはなかった。まあ肉を焼く発想があるなら団子も焼くよな。楽しみだな。
なんだかんだ言って、この原始時代は食べ物に溢れている。なにしろ人間の数が圧倒的に少ないので、ありとあらゆるところに食べ物がある。今晩は期待ができるな。
「はふっはふっはふっ」
俺は焚き火の前で焼きたてほやほやのクッキーを頂いていた。ナッツだな！　香ばしくサクサクしていて、素朴な味がする。が、苦味が強い。アク抜きをしてないのかもしれない。アクって毒だったような？　ま、まあ、大丈夫やろ。……次はアク抜きさせよう。
思ったんだが、発酵させて膨らませて焼けばパンになるのでは……？　やってみる価値はあるかもしれん。
「神様、あの斧でなにをするんだ？」
「ごめん名前教えてくれる？」
「アオセイカってんだ」
男性が声をかけてきた。セイカって言うと、クッキーを作ってくれたアンセイカと名前が似てるな。
「アンセイカとはどういう……？」
「妻だな。俺たちは族の名前を自分の名前につけるんだ」
ファミリーネームみたいなもんかね。結婚したら名前も変わるのかもしれん。
俺は、アキラスが隣にやってきたのを見つつ、地面のゴミを払った。
「話を戻すと、まず穴を掘る。掘り出した土を周囲を囲って雨が入らないようにする。斧で木を切り倒す。木を四本立てる。それで、こうして木で骨格を作って……上には穴を開けて……」
自慢じゃないが俺はそれなりに絵が描ける方だ。教科書で見たとおりの竪穴式住居を簡単に土の上に描いて見せた。

「これを家と呼ぼう。雨風凌げてとっても温かいぞ」
「おぉ……そ、そんなことが……」
アオセイカが口に手を当てて驚いている。
アキラスは驚いた素振りはないが、絵と斧を見比べていた。
今日はもう遅い。眠るとしますかね。

4．土器土器原始時代クラブ

一週間経った。収集して、食べて、寝て、収集しての繰り返し。

縄文クッキー（縄文時代ですらないが）は、ナッツのアクを抜くということをさせるようになって格段に味が向上した。モサモサとしてるけどね。

一方で肉は死ぬほど美味い。ジビエ肉がこんなにいいものだとは……。血抜きさえ知らなかったので教えたけど、いや教えたというか一緒に試行錯誤したんだけど、この時代の人、脳みそだろうがなんだろうが構わず手で解体し始めるの心底驚いたわ。

一週間もすると、三家族のみんなの名前も覚えてきたし、性格も大体つかめてくる。

土器を先に作っておくべきだったかもわからんね。こんなに家作りに時間がかかるとは思ってなかったんだ。というのも三家族が入れるでかい家を作ろうと思ったのだが、色々考えると現実的ではない作業量になってしまうので計画変更してまず一軒作ろうという話になった。

俺は草の服をカサカサ鳴らしながら土木工事に従事していた。

竪穴式住居最大の特徴は、穴である。穴を掘ることで内部の温度を保つと共に、内部空間も広げることができるのだ。問題はその穴である。木はいいよ、石斧で男衆が頑張ってくれたお陰で本数が揃ってきているのだが、穴がな……スコップが作れなかったので手で掘ってるようなものなのだ。

ふう。大体めぼしはついてきたな。

俺は岩に腰を下ろして一休みしていた。

穴は掘り終わって、柱は立てた。あとは壁と屋根を被せていくだけだ。

ちなみに柱の先端は火で炭化させてあるぞ。炭化させれば腐りにくくなるからな。

そういやこういう状況だとステータスって言うとなんか開くよな。

やってみるか。
「ステータス……おぉ……マジか……」
開きました。
名前……本名が出てると思ったんだけど『ソーマ』って出てるな。
あとは身長と体重と……スキルか。
アクティブスキル未修得……。
パッシブスキル……不老不死。
お、これは……受けているマイナス効果？　プラス効果？　これは使えるんじゃないか……？　どう使うかと言うと、例えば適当な草なんかを食えば……それがどういう類の草なのかがわかるのでは……？　医学方面は基本的な知識しかないけれど、このステータスを見る能力があれば……。
「神様、今日中には完成させような」
「おう、やろうか」
アキラスが声をかけてきたので、俺は腰を上げた。
そしてその夕方。家が完成した。
試行錯誤、ああでもないこうでもないしていたせいで大勢でかかって丸々一週間かかったが、設計が大体わかったので次は三日あればなんとかできそうだ。外装だけなら。
そう、内部がまったくの手付かずなのだ。石で囲炉裏もつくりたいし、ベッドも作りたいし……。
「できたぁぁぁぁぁ!!」
『うぉおおおおおおお!!!』
俺が大声を張り上げると、群れのみんなも大声を張り上げて喜びをあらわにした。
できた。石器すらまともに無かった原始時代に竪穴式住居。完全にオーパーツだ。
三角屋根の竪穴式住居ができてしまったぜ。
「大きさ的には全員寝るには小さすぎるから、優先的に子供を寝かせたいな。アキラス。家族ごとに一軒作ろうと思うんだけど、どうかな？」

「いいと思う。神様、あんたはどこで寝るんだ？」
「んー……どこでもいいけど、ここで寝てもいいかな？」
みんながうんうんと頷いてくれる。よかった。
俺は、建物の中を覗き込んでみた。
「中央に囲炉裏を置いて、寝床を藁で作って～って感じでいこうな」
「囲炉裏って？」
アキラスが聞いてくる。疑問を素直に聞けるのはいい子の証拠だ。
「焚き火を岩で囲んだようなもんで、そこで料理……ようは食材をおいしくすること！　ができるところを作ろう」
その夜。俺は、子供たちと一緒に寝ることになった。
「ねーかみさまーおうたうたってー」
「ねむれなーい」
「ねーかみさまー」
「ねー」
「ねー！」
俺は子供たちに抱きつかれるような格好で寝転んでいた。藁のベッドもなかなかふわふわとしていて寝心地がいいもんだな。カサカサうるさいけど。
歌はあるんだななんて思いながら、煙っぽい室内を見回してみる。早速天井には肉がぶらさがっている。焚き火の火で燻すのだ。
「そうだなぁ、じゃあ……」
ねんねんころりよ……。
俺は子供たちの頭を撫でながら自分も目を閉じた。
坊やはよい子だ　ねんねしな……。

「次は土器だな」
「土器……？」
俺はみんなが二軒目の建設に取り掛かっているのをみながら、アキラスと並んで岩に座っていた。
俺は地面の砂を取ると、指でこねてみた。パサパサとしていて粘り気が無い。だめだな。

「粘土って言う土に水を含ませて、乾燥……つまり放っておくと乾くでしょ、乾かして、火で焼いてあげると岩みたいに硬くなるんだぜ。なんでも好きな形にできるから、例えば水なんかを入れて持ち運べるようになる」
「……!? 信じられないが……」
あ、本気で疑ってる顔をしてる。
まあ石器なんて作ったことが無いですという生活だったのに急に土器なんていわれても信じられないよな。けど本当なんだぜ。俺の住んでいた現代でも、そういう土地に行って適当に地面を掘り起こすと土器が発掘できるくらいにはありふれていたんだ。
「まずは粘土、粘土だな。見たことくらいあるんじゃないかね？　水を含んでねばねばとしてる感じの土。踏んだこととかあるでしょ」
「ある。わかった。ちょっと探してくる」
言うが早いがアキラスは小走りで集落の外に出て行ってしまった。古代人は行動が早いな。
さてと。俺は自分の着ている白いワンピースを見下ろした。
「くさい」
そうなのだ。水浴びなんかはしているんだが、服がな……生臭いというか汗臭いというか……。
土器が出来れば、熱湯で洗うこともできる。それまでの辛抱かね。
俺は森に行ってみることにした。そしてワンピースを脱ぐ。
……自分で言うのもなんだが本当に胸がでかい。そして興奮しない！　男の頃だったら下半身マックスですよ。でもしない。というかついていないので。
適当な蔓を腰に巻いて、結んで、長い葉っぱを腰からぶら下げて、下半身は完成だ。雑だって？　いいんだよ、これでよ。
上半身はどうするかね。もう下半身と同じでいいや。蔓をぐるっと一周巻きつけて、そこから藁をぶら下げる。なんか透けてるけどいいや。蓑虫スタイルだ。
俺が戻ってみると、アキラスが俺のことを探していた。
「あったぞ」

手にはこんもりと土を抱えて。

5．ぺちぺちこねこね

俺は子供たちと粘土をこねていた。
ぺちぺち、こねこね……。
そういえば、この時代にしては子供の数が少ないと思ってアキラスに聞いてみたんだ。
ぺちぺち、こねこね……。
『もっといたけどほかは全員病で死んだ』
とのことだった。かなしいなぁ。
病についてだが、何故か今いるメンバーはかからなかったそうな。病気に強いのか、かかったけど発症しなかったのかは謎だけど。
で、俺は家の建設を男衆に任せて子供たちと土器を作っていた。
川の傍にたんまりと粘土があったので、それをこねている真っ最中。
「うーん、うーん」
男衆は建設、女衆は火守と収集、俺と子供は土器作り。
なんだかだんだん技術力が上がってきた気がするな。
ぺちぺ……もういいよ十分だよ。
「かみさまー、かみさまつくったー」
男の子……アキセイカ君が泥人形を見せてくる。セイカ一族の長男である。もちろん何も身に着けていないので全裸だぞ。
俺はその物体を手にとってまじまじと見つめてしまった。
「こ、これは……」
人類初の土偶なのではないか？　いやもしかするとこの星にいるほかの人類が作ってる可能性はあるんだけどな。
丸い頭に、突き出たおっぱい。くびれたお腹。
うーん、世界初の土偶がまさか俺になるとはな……面白そうだし、この土偶も乾燥させてみるか。
確か……一週間だか三日だか乾燥させればよかったはずだ。
ちなみに形状だが、凝った形状のものはナシにしている。とにかく

器、器だ。模様もつけないことにする。下手につけてひび割れたら困るのでな。実用品なんだから。
「アキ君。うまいね、それはじめて作ったの？」
「うん」
「そっかぁ」
粘土遊びは子供の十八番である。粘土はいくらでもあるので、好きに作らせておこうか。この子供たちの中から陶芸家が生まれるかもしれん。
器の作り方としては、まず底辺を作る。次に、ひも状にこねた粘土を積み上げていき、つなげる。と言ったものだ。
「こういう器を作ってみようね」
俺は出来上がったそれを子供たちに見せてみる。ようはコップである。
「こういうのも作ってみようね」
俺は今度は鍋を掲げて見せた。煮炊きするにはやはり鍋である。
ふむふむ。やはりというか、不得意が明白に見られる。アキ君が作る器は、均一な厚さでそれどころか持ち手まで付いた鍋だったりする。この子は土器担当でいいんじゃないかなと思う。
「そうそう。よく揉んで、強く押して空気を押し出してねー」
子供たちの間を歩きながら指導する。
まるで先生になった気分だ。事実上この群れの指導者になったんだから当たり前なんだけどな。
「ん……？」
俺が言わないでも男衆は勝手に作業を進めていた。まあといっても各家族の父親とアキラス合わせて４人しかいないんだけどな。
何も言っていないのに分業が始まっていた。一人が穴を掘り、一人が木を切り、一人が藁やら葉っぱやらを集め、一人が組み立てる。
よく見てみると、三軒の竪穴式住居を作ろうとしていた。おかしいな。あと二軒あれば足りるんだが。
俺が何か言いたそうな顔をしているのを見たアキラスが寄ってきた。

「なにか？」
「あ、いや家の数が多くないかな」
「ああ。神様のためにもう一軒余分に作ろうかと」
「……！」
なるほど、見れば小さい竪穴式住居が出来上がろうとしていた。あれが俺の家か……。
ちょっとうるっと来たのでそっぽを向いた。
「その、土器っていうのはどう？」
「子供たちにやらせてるよ。何日か乾かしたら焼いてみよう」
「焼くと水を入れられるようになるんだな？」
アキラスの疑いの視線に俺はウィンクで返してやった。
「もちろん」
「その片目を瞑る仕草はどんな意味が……」
好奇心旺盛っていいよな。

数日後。乾燥した土器と土偶を野焼きしてみた。
「まずは火の熱で全体をまんべんなくあたためよう」
俺の指示の下、円形にまとめられた焚き火の周囲に土器を並べる。
いきなり火にブチ込むと温度変化で割れたりするので、まずは温める。次に、燃え尽きて下火になったところへ土器を移動させて、燃料を追加して再び燃やしてやれば……。
「できたぁぁぁぁぁっ!!」
『おおおおおおっ!!』
俺は冷ました鍋を天高く掲げてみんなに見せ付けてやった。
飾りこそ無いけれど、正真正銘の鍋の完成である！　俺は早速川にみんなを連れて行くと水を汲んで見せた。
「す、すごい……いままで手で汲んだり木の実に入れたりしていたのに……」
土器は人数分用意できている。みんな思い思いに水を汲んでは感動に打ちひしがれている。
やべーな。石器時代から一気に縄文時代にランクアップだぜ。

「じゃあ早速これで湯を沸かしてみようぜ！」
俺が言うと一同キョトンである。
「ユというのは……？」
例のごとくアキラスが聞いてくる。
俺は一同を連れて村に戻りながら説明する。
「空気にもあたたかい冷たいがあるように、水にも温かい冷たいがあるのはわかると思う。水を土器の中に入れて火にかけると、温かい水ができるッ!!　そして、その中にお肉なんかを入れたりすると、おいしくなるっ!!」
人類の歴史はおいしいの追及であるとも言える。おいしくて、安全で、安いものを追い求めて地球の果てまで探求を続けてきたようなもんだ。
まずは湯を沸かしてみせよう。
湯。湯はいいぞ。人類のエネルギーの歴史は湯を沸かすことにあるようなもんだからな。
村（と呼ぶべきだろうな）に戻ってきた俺は、早速焚き火に石を置いて鍋を設置できるようにして、加熱を始めた。
数分後。ぷくぷくと小さい泡が登り始める。
「空気が生まれている!?」
「こ、これは一体……!?」
驚きを隠せないみんなを尻目に俺は徐々に温度が上がっていくお湯を見つめていた。
やがて泡がぶくぶくと立ち上るようになってきた。沸騰である。たぶん人類史上初の人工的に水を沸騰させた記念日である。
「この状態を沸騰といって、これ以上は熱くならない。っとぉ触ったらメッだよ？」
子供の一人が手を伸ばそうとしたので、俺はその手をすばやく掴んだ。
やけどは洒落にならんからな。
「触ると火傷といって、皮膚が溶けてしまう。触るときは、十分冷えてから。鍋を持つときは、例えば木の葉を間に挟むようにして、絶対に

触れないように。わかったかーい」
『はーい』
仲のいいことだな。
一通り土器の使い方をレクチャーした後は、スープ作りである。
いわゆる縄文スープは魚やら木の実やらをそのままブチ込んで煮込むだけである。とはいっても何の味付けもしないのももったいないので……海水を汲んできて貰った。海水を適量混ぜてっと。
「魚は穫ったらすぐに内臓を取ったほうがいい。こうして、んん……」
俺はみんなに魚の捌き方を簡単にレクチャーしてみせた。内臓は食べられないことも無いけど寄生虫はもちろんのこと、魚が何を食ってるのかわからないので捨てるに限るな。死体とか食ってる可能性あるんだぜ？
しかし、ナイフが石器なので悪戦苦闘する。ようやく処理が終わった。あとは、魚とナッツ類を鍋に放り込むだけでいい。
ちなみに鍋といってもみんなで使えるようなでかいやつだぞ。
「縄文風ソーマのスープ、召し上がれ!!」
完成である。スープっていいよな、ブチ込んで煮るだけなんだもんだ。
早速俺は器にスープをよそってみんなに配った。ううむ、お玉が欲しいな。お箸も欲しいし。スプーンも……。誰か手先の器用な人に、木を加工させるか。塩も欲しいし……。
「あたたかい！　おいしい！」
「この水？　お湯、味が出てる!!」
ちなみにアキラスだが、
「……」
無言でスープを啜ってるけど表情は柔らかかった。
そういや海辺にコンブらしき海草流れ着いていたよな……。
ああもうっ！　やりたいことが多すぎるぞ!!

6．おうちです。よろしくお願いします。

出来た。ついに出来た。立派な竪穴式住居が四棟も！　俺専用の家もあるぞ!!

家が出来たので、次は食と服の充実である。

「保存食ねぇ」

俺は自宅の天井からつるして燻されている肉を見た。

塩漬けにして燻したものなので、一月くらいは持ってくれるはず……はずだ。まあ多少腐っても焼けばなんとかなると思うけど。

あとは、これである。俺はアキセイカ君が作ってくれた壷からそれを取り出した。

水に晒したドングリの粉末とベリーを混ぜ合わせ、塩を加えて焼いたものだ。しっかり予熱してから焼いたのでカラカラになっている。これなら数ヶ月はいけるのではないかと思う。

なんでこんなに保存食にこだわるのかと言うと、表に出たくないからだ。

だって雪とか降ってるのに狩りとか危険すぎるでしょ。凍傷にでもなったら治療できないしな。

ドングリが転がっていたということはこれから冬になる可能性が高く、服を何とかしたい。特に体が小さく抵抗力の弱い子供たちが心配である。服とか以前に全裸なんだもん。

取り急ぎの応急策として、葉っぱの服を作ってみた。蔓を体に巻きつけて、そこから葉っぱと藁をぶら下げるタイプである。

本当なら毛皮の外套と麻の服の組み合わせをやってみたいんだが、毛皮は皮なめしの方法が思い出せないのと、麻はいまのところ探索不足なせいか見つかっていない。

皮なめしなぁ……群れの面々が纏ってるのは皮を剥いで来て水で洗った後噛んでなめしたものなのだが、不完全なせいかどんどん腐ってくる。何かに浸したらなめせたと思うんだが、その何かが思い出せない。クロムとなんだっけ？

そこで思いついたのがダウンである。鳥なら何匹も石で仕留めているし、羽毛もある。これを葉っぱの服にくくりつければいいけないだろうか。
「こういう服が作れるまでにはどれだけかかることかねぇ」
俺は壁にかかっているワンピースを見た。元の世界では当然のように見ていたそれも、今見てみるとすさまじいテクノロジーの産物であることがよくわかる。これと同じものを作れるまでにどれだけの時間がかかるやら。
さてと、俺は腰を上げた。今日も一日頑張ろう。
「おはよう、みんなおはよう」
「おはようさん」
「おはようかみさまー」
早速みんなそれぞれの作業を行っている。
男衆は薪の確保を。女衆は採集を。子供たちは道具を作らせている。
「これ難しいよ……かみさま」
レイ家の長男、アスレイ君が木をガリガリ削りながら言ってきた。お玉とか、まな板だとか、そういうこまごましたものを作らせているのだ。
ちなみにアキセイカ君は土器専門ということで研究に明け暮れているぞ。はまってしまったらしい。火の扱い方も教えているので、自分で研究して弥生式土器を作り始めるかもしれない。
「がんばってみて。ほかにもあったら便利だなって道具があったら作ってみていいからね」
『はーい』
子供は素直でいいなって。
釣りの道具も作らせていいかも分からんね。まあ石を投げて魚取るのも不便だし。
「ソーマ」
「アキラス」
アキラスがやってきた。斧を片手に持っている。

「薪集めは順調だが、どこに保管しておく？」
「家の中がいいな。雨ざらしにすると燃えなくなるから」
「なるほど。家、家か……」
「そういやアキラスはどこで眠るの？」
「ん？　神様の家」
「ふぁっ!?」
　さらっと言うけどどういうことなんだよ!!
　と思ったんだけど男女が一緒の家で眠るのが何を意味するのかという概念自体存在しない可能性が……？　いやでも俺男やし。なんて。
「イヤなら外で寝るが……」
「あぁぁぁわかったよ！　一緒に寝ようねっ!!」
「うん」
　切なそうな顔をされて断れるわけもなく。俺はアキラスと一緒の家で眠ることになったのだった。
　夜。この世界の住民は夜になると眠るものである。
　俺は焚き火をぼんやりと眺めていた。月も雲に隠れて見えない夜になると、本当に何も見えない。家の外に出たら漆黒の暗闇が広がっているような状況で、他の家から漏れ出る光がまるで波間に浮かぶ漁船のような頼りなさをみせている。
「酒飲みてぇなぁ」
「酒というのは」
「んー酒って言うのは微生物の働きでアルコールが……まぁ要するにおいしい飲み物なんだよ。木の実があれば作れると思うから作ってみようかと思ってる」
「はぁ、相変わらず俺たちには思いつかない知識を持っている。尊敬している」
「ふふ。もっと尊敬してくれていいのよ」
　キラキラした目で俺のことを見つめてくるので、顔が熱くなるのを感じた。
　酒かあ。とりあえずベリーを発酵させてみるかね。適当な壷に入

れておけばできると思う。ダメなら俺が口に含んで吐き出したもので試してみるか。蜂蜜があれば蜂蜜酒が……。
「むむむ……」
お茶も作りたいよな。お茶に関して言えばチャが無くてもその辺の草を煎じて飲めば一応茶にはなる。けどカフェイン入りの茶が飲みたい。
やることが本当に多い。まずは冬が越せるように支度をしないといけない。
「むむむむっ!?」
急に抱きつかれたので驚いた。すーっと息を吸い込む音がする。
アキラスにしがみ付かれていた。何をと思う間も無くベッドという名の藁の中に倒される。
「もう夜も遅い。寝てしまおう」
「抱きつく必要あんの……？」
「肌寒いから抱き合って寝るのは普通だぞ」
「そっかぁ」
なるほどね。一応は納得したよ。
俺は目を閉じて、そのまま眠りに落ちたのだった。

7．（性別を）踏みにじらせはせぬぞ

「これでヨシと……」

俺は村の真ん中にあるでかい岩に正の字を刻んでいた。

この世界にやってきて何日目という印だ。何しろ暦が無いので、なにもしていないと今日が何日なのかもわからなくなってしまう。とりあえず、一日の長さはあくまで体感になるが、地球と大差ないようだ。一年の周期も同じなのかもしれない。

今日やることは狩猟の道具の改良である。今までの石から、槍と弓に進歩させていこうと思う。石器作りができているのだから、槍は作れることだろう。

「さんきゅーなー」

子供たちが槍先を作っていた。石片を石で研磨して鋭く尖らせるように依頼していたんだけど、おお、結構出来上がっているじゃないの。

俺は子供の一人から受け取った先端を確認すると、あらかじめ用意していた木の棒にくくりつけ始めた。グルグルと巻きつけてしっかりと結んでみる。

「できたっ！」

「かみさまー、これ、どうやってつかうの？」

「これはね、獲物の体に突き刺したり投げつけたりするんだよ。先が鋭くなってるから、押し付けると刺さるってこと」

子供はあっと納得した顔をしてくれた。

俺は早速なので、これから狩りに出かけるであろう男衆の元に向かった。

男三人と、アキラスが話し合いをしている。どこにいくのか、取れたらどうするのかを話し合っている様子だった。

「よす。新しい道具を作ってみたから、試してもらっていい？」

「神様。その道具は……？」

ソス家、家長のザンソスさんが俺の姿を認めると、指差してきた。

俺は得意げに槍を構えて見せた。

「槍って言うんだ。これを投げつければ相手に刺さるぞ。直接刺してもいいけど。石を投げるよりも確実だと思うんだけど、使って感想を教えてくれるかい？」
「わかった。みんな行くぞ」
槍を持ったザンソスが男を引き連れて森の中に行く。
さてと、俺は村の中に戻って、各家庭を尋ねていく。頼んでいたことがあったのだ。何かと言うと、塩を作るということだ。塩は重要だ。塩を摂取しないと死んでしまうなどということは、この時代知られていない。基本的にこの時代は火は付けっぱなしである。というのも一度消してしまうともう一度つけるのに非常に労力がいるからだ。摩擦力で火種を作って木に着火するのは大仕事なのである。付けっぱなしなのであれば、いっそのこと海水でも沸かしていればいいのではないかと思ったのだ。
塩は料理にとって重要だ。海水をそのまま入れてもいいが、やはり塩の状態であるほうが使い勝手がいい。
塩田で海水を乾かして塩を得る方法と、海水を煮詰める方法があるが、気温がそこまで高くならないらしいこの辺りでは後者を採用した。
「あら神様。塩つくりは順調よ」
セイカのお宅にお邪魔すると、母のアンセイカさんが塩を作っていた。器の中の海水を煮詰めては、蒸発してきたら汲んできた海水をまた加えるを繰り返すだけの単純作業だ。
「ありがとう。塩があれば、もっと料理をおいしく出来るから、じゃんじゃん作ってくれよな」
「わかったわ。その料理っていうのも、時間あったらみんなに教えてね」
「いーよー」
セイカ、レイ、ソスの家を見て回ったが、作業がわからなくなっているということもなさそうだった。これで、料理や肉に手軽に塩を使えるようになるだろう。
俺は次に、海に向かった。岩の並ぶ海岸には無数の海藻類が漂着し

ている。
そう、うまみである……ッ!!
人間は甘味、酸味、塩味、苦味、うま味を感じることが出来る。辛味？　あれは痛さだよ。手軽に作れて、料理の質を向上させる方法は、やはり海藻類からうま味をとることだろう。難しいことはない。要するに干していつでも使えるようにして、料理するときに混ぜればいいのだ。
「よいしょー！」
コンブ（ぽい）海藻を掴んで川にもって行き、適当にブチ込む。
「ひえー！　冷たい！」
寒いので駆け足で海岸に生えている木の枝に乗せる！　以上だ。
え、それだけ？　って思うかもしれないけど、本当にこれだけである。更に大量に質のいい乾燥させた海藻を作ろうと思うと、ずらっと木製の乾燥板を並べる必要がある。そんなものに手間をかけている時間は無いので、木にぶら下げるだけで十分なのだ。
あとは、待つ！
「ふんふんふーん」
海岸をぶらぶらと探索する。貝殻がたくさん散らばっている。何かに使えないかな？
……！　カルシウム……！　焼けば良質なカルシウムが得られるのでは!?　石灰？と同じように土に混ぜれば……!?
こうしてみると、自然界というものは実に多様な資源に満ち溢れているなと思う。
俺は、貝殻でネックレスを作ることにした。綺麗な貝殻をいくつか見繕って家に持ち帰る。
「乾いた蔓を編んで……」
家が出来てから数日しか経っていないが、俺の作ったものがあちこちに置いてある。槍、ナイフ、ハンマー、瓶、お皿、服の代え、などなど。
そのなかから乾かしていた蔓を取って、数本を編みこんで一本にしていく。

それから石器で貝殻に穴を開けていく。ゴリゴリっとな。紐を通せば完成だ！
これが自分用。アキラスにも作ろう。
俺がせっせせっせと作っていると、アキラスが帰ってきた。
「どうだった？」
「よかったよ、ただ、その、取れた」
「ああー。改良が必要だなぁ……」
「威力はすさまじかった。何本かもって行きたい」
「縛り方を変えて、子供たちにもっと作ってもらうようにするさ」
アキラスが石器が取れてしまった槍を差し出してきた。固定が甘かったらしい。縛り方も研究しないとなあ。
「イノシシが取れたからみんなで食べに行くぞ」
「おう、いくいく」
今日は宴だな!!
俺は槍を地面に置くと、アキラスの後を追いかけたのだった。
この時代の宴というのは、アレだ。アレなんだ。
酒はないけど、獲物をみんなで食べて大騒ぎするんだけど。食べて騒いで、それから、それから……。
「ソーマ？」
「ひふっ」
俺がガチンコチンに固まっているととなりにアキラスが腰掛けてきた。手に持った肉をガツガツと頬張ると、手についた油をピチャピチャと舐めとる。
「宴は初めてか？」
「酒がない宴は初めてだ」
「酒ってのはどんなものなんだろうな……」
「飲める人と飲めない人がいて、飲むと気分がよくなるんだけど、飲みすぎると吐いたりする」
「……毒か？」
「毒も薬も使い方次第よ」
「クスリ？」

「体をよくするもののことかなぁ……」
村の岩の前では、盛大にイノシシが丸焼きにされている。村人たちが肉を囲んで思い思いに時間を過ごしていた。
なんかあのでかい岩が村のシンボルとなりつつある気がする。というのも俺が毎日正の字を刻んでいるのを見た村人たちが何を思ったのか神聖なるものと思っている節がある。日付を書いているのであって、別に特別な儀式をやっているわけじゃないんだがなあ。
「……」
「……」
え、なにこの空気。
俺がお湯を飲んでいる一方でアキラスは黙っている。黙らないでくれよ、頼むからなんでもいいからしゃべってくれや。
「あっ、ふーん……」
仲がよさそうに語らっていた夫婦が物陰に消えていく。
察した。
ま、まぁ、今までギリギリの放浪生活だったわけで、気が緩んだんだろうな。群れの人数が増えることは賛成しておくぞ。増えよ満ちよってやつだな!!
「……あれってさぁ」
「……」
アキラスと目が合う。
「子供作ってみるか？」
「ぶべぼっ!?　は、はぁっ!?」
おもむろに言われたので俺はお湯を噴出した。気道に入ったのか盛大にむせ返る。
アキラスが背中を擦ってくれる。
「あのね」
俺は説教することにしたが、アキラスのきょとんとした顔で考えを改める。
そもそも、恋愛して仲を深めてから子作りという発想が無いのではないか。そもそも自由恋愛で家族を作るということが一般的になっ

たのは、ごく最近のことなのだ。それまではお見合いだとか、村がそう決めたからだとかで、恋愛のほうが後についてくるということもしばしばだった。原始時代において、いきなり性行為から入るというのも何もおかしなことではないのだ。

いやね、顔はいいと思うよ。性格も決断が早くて素直でいいと思う。けど男なんやぞ、俺男だぞ、あれでも今は体は女か、ってことは性行為したら生まれてしまうのでは……？　神様神様言われてるけど設定上魔族と人間のハーフなので、普通に生まれちゃうよな？

「はぁー……だめ!!」

「そっか。なんでだめなんだ？　体調が悪いとか？」

「そういうんじゃないんだよ、その、アレだよ！　こう……!!」

俺はしょげているアキラスの肩を撫でた。

「そ、そのうちな！　そのうち！」

「そのうちがきたら子供を作ってもらえるんだな？」

「……あ、あぁいいともさ！」

言ってしまった……だって世話になってますしぃ？　大丈夫！

性行為したくなったりはせぇへんのや!!

8．いい飲み仲間だ！　ハチミツ酒を飲もう！

「かみさまーはちのすがあったー」
　ある日子供が俺にそんなことを言ってきた。
「蜂蜜酒を作ろう！」

　季節で言うと秋だ。幸いと言うか、この辺りは恵みが豊富なので、食べ物には困らない。少し歩ければ木の実があるし、ドングリはゴロゴロ転がっているし、海に行けば貝が岩場にひっついてるし、川に行けば魚が取れる。
　そんな中で、やはり物足りなさを覚えてしまうのは『酒』がないからであろう。
　酒の起源は不明だが、蜂蜜酒はその起源にもっとも近い酒の一つであろう。木の洞にあった蜂蜜に雨水が入り込み、自然に発酵して酒になったものを人が飲んで発見されたという説もあるくらいである。
　作り方はシンプルで、蜂蜜を採取し、水を入れ、待つだけである。
　そんなことで酒ができるのかよと思うのだが実際にそうだから仕方ない。酵母を入れられたら、成功率が高まるんだが。
「ううむ、俺が行くしかないか」
　当然防護服などというものはない。というかまともな服も無い。
　ミツバチの毒は弱いため、死ぬことはまず無い。が、治療方法がない原始時代である。ここは不死身の俺が身を張るしかないだろう。
　生身で行くのも怖いので、自分なりに防護服を作ってみる。頭から被れる藁の帽子。顔を藁で隠して、体も藁でグルグルにして、腰は葉っぱのスカートを……。
「……なにをやってるんだ……？　蓑虫かなにかか……？」
　服を作り終わったところでアキラスが家に戻ってきて、怪訝そうな声をかけてくれた。

「ちょっと蜂の巣襲ってくるから」
「そうか……なら俺が行った方が」
俺の不老不死設定を知らなかったっけ。というか説明しても絶対信じてくれないだろうな。
ちなみに、試しに指を石のナイフで傷つけてみたことがあるんだが、数分でかさぶたも無く治った。ということから察するに治るには治るが痛いってことだな。
とはいっても、アキラスに行かして顔面ボッコボコにさせるわけにもいかん。せっかくのイケメンが台無しになってしまうからな。それは人類にとっての損失に他ならない。
「んー、いや俺のほうがいいって。松明をこしらえてっと」
俺は松明を持ち、火をつけると外に出た。
「こっちこっち」
「行く行く。案内よろしくなー」
俺は子供の案内で蜂の巣がある場所に急行した。
森を歩く。最初この世界で目が覚めたときは足が痛くて仕方が無かったんだけど、今じゃ素足で森をダッシュできる。皮が分厚くなってるお陰なんだ。皮なめしの方法判明したらサンダル作るけどな!!
子供が立ち止まって前方を指差している。大きな木の洞のところに、ぶんぶんとミツバチが飛び交っているのが見えた。
俺は早速、松明を用意してきた別の松明に火を移した。獣の糞を乾燥させたもので、濃い煙が出るのだ。この煙で蜂の巣をいぶして、動きが鈍くなったところで巣を頂く。現代の人工の巣は。遠心分離機にかけられるようになっているが、天然の蜂の巣にそんなものはない。全部引っこ抜くと蜂へのダメージが大きいので、ある程度は残さないとな。
「離れておいてね。よいしょっと」
俺は子供を手で制すると、松明を落とさないようにしながら四つんばいで進み始めた。かっこ悪い？　うるせぇ、カッコより確実性だ。
蜂の巣に接近していくと、ゆっくりと、木の洞に松明を近づける。中に空気を吹き込むのは危ないので、その姿勢でじっと待つ。

「そろそろいいかな……？」
程度がわからん。本当に煙で蜂の動きが鈍ってるのかもわからん。
松明を子供のほうに放り投げる。地面の上に転がった松明を拾い上げるのを合図に、一気に姿勢を起こした。
「蜂蜜頂いていくぜぇぇぇぇぇっ!!」
気合だ！
俺はがばっと洞の中に手を突っ込むと、ねばねばする蜂の巣を、ミシリミシリ言わせながら壊していく。
「いでででで！　痛い！　痛い！　痛い!!　ハチがなんぼのもんじゃぁぁぁぁぁ！　死にさらせぇぇぇぇ!!」
刺されまくったけどな！　全然煙効いてないじゃないですかヤダー！
ど、どんくらいとっていいのかな？　全部取ったらまずいけどいだだ！
ばきっ、みしっ、と巣を割って引っこ抜いて頭上に掲げて、逃げるんだよぉぉぉぉ！
「とったどぉぉぉぉっ!!　逃げるぞおらぁぁぁぁ!!」
俺はドン引きしている子供の横を全力ダッシュで駆け抜けた。

「前が見えねェ」
「神様だから蜂には刺されないと期待していたことは否定しないが……あえて言わせて欲しい。言わんこっちゃない……」
刺されまくりましたとさ。おもに顔を。
顔が腫れて目が開けられないくらいにボッコボコになって帰ってきた俺を見て、アキラスは笑うでもなく看病してくれた。
蜂の巣はゲットできたよ。
「その、サケってのはどうやったらできるんだ？」
「痛い！」
アキラスが容赦なく俺の顔を水で拭ってくる。
「手加減してくれよなー、まったくー。蜂蜜に関して言うと水を入れ

るじゃろ。あとは待つだけでいい。微生物の働きで……えーっと、目には見えない小さい生物の働きでアルコール、つまり酒が勝手に出来るんだよ」
「……」
「あ、信じてないだろ。ほんとなんだって、ほんとじゃなかったら顔面ぼっこぼこになって帰ってこないでしょ」
「いや信じてるんだが、果たして、これだけの被害をこうむっても釣り合うものなのかと……」
アキラスがあきれ返った様子で言う。
せやな。単純に酒を得るためにこんなことやってるだけならな。
でもな、俺は酒が欲しいだけでこんなことをやってるわけじゃないんだぜ。
「酒を作ることに成功したなら――アルコールを蒸留して傷口の消毒が出来るようになるし、医療を大幅に向上させられるんだぜ!!」
ま、まあ、蜂蜜酒を作ってみて、アルコールが発生していることを確認した上で、ベリーとか穀物にちょっとだけ混ぜてみて――みたいな工程が発生することは否めないんだがな!
アルコールの製造に成功したならば、医療は飛躍的に向上する。まさか傷口を熱湯消毒するわけにはいかんからな。アルコールさえあれば、今構想中の傷口の縫合も安全にできる。感染症対策にはうってつけだ。
アルコールの蒸留に関してだが、古代メソポタミアで既に行われていたらしい。理屈から言えば簡単で、酒を熱すると沸点の低いアルコールが水よりも先に気化するので、気化したアルコールを別の容器に冷却して液体に戻してやるという仕組みである。アキセイカ君に蒸留器を作ってもらおうと思っている。
「ショウドク？　イリョウ？」
「つまり、死人を救えるようになるんだぜ!!」
「なるほど……ん？　傷が……ソーマ、傷が治ってきてないか……」
「ああ」

なんか前が見えるようになってきたなと思ったら、もうハチに刺された傷口が治ってきているらしい。不老不死様様である。
「治りやすいんだ。あんま気にするな」
「で、この蜂蜜をどうすれば酒になる」
「やってみるか」
俺は早速、蜂蜜酒作りに取り掛かることにしたのだった。

9．エルフはいないが森は焼いておこう

自室にて、俺は胡坐をかいて座っていた。
ゴリゴリゴリゴリ……。
俺は薬を作っていた。
ステータスが見える能力（能力といえるのかわからないが）のお陰で、草を食べるだけでどんな効果があるのかがわかるので、早速薬の製造に着手していた。漢方薬のそれに近い。
雪がちらつき始めた今日この頃。村では、せっせと冬の支度に入っていた。あるだけのベリーを毟って、ドングリをかき集めてクッキーにして、獲物のジャーキーを作り、魚を釣っては塩漬けにしてと。
俺の提案で、出来る限り冬の間は外にでないようにということにしたのだ。食料が足りなくて狩りをするのはやむをえないが。
動物の骨を使って針を作って、腱を使って簡単だが裁縫ができるようになったが、肝心の毛皮がね……どんどん腐っていくのだ。なんとかくさらないように『皮なめし』処理ができるようにならないといけないが……なんだったかなー、なにかで煮込んでたと思うんだよなー。
とにかく、ろくな服も無いのに冬うろつくのは危険性が高いとして、食料と燃料の備蓄を急がせているのだ。
俺は力仕事が余り出来る体ではないことがわかったので、能力を利用して薬を作っている。ということなのだった。
「下剤に整腸剤に熱さましっと」
草なんだが、とにかくまずい！　俺がヤギだったらおいしいのだろうけど、人間（ハーフだけど）なので、まずい。苦いのもあるし、ピリピリくるのもあるし、というか当然の如く嘔吐してしまうこともあるので。非常に辛いお仕事である。
「とにかく子供、子供なんだ。絶対にこの村で死人は出させないぞ。絶対だ」
今のところ死人は一人もでていないが、この先間違いなく死人が出る。寿命ならいいけれど、病や事故、あるいは戦いになるかもしれな

い。そんなときに薬があれば、救えるかもしれないのだ。特に死にやすい子供をなんとか守りたいのだ。
そんなこともあり、俺の部屋は今判明している薬を粉状にしたものが詰められた壷が並んでいる。
将来を見据えて、傷口の縫合ができるように細い針も作るつもりだ。糸？　髪の毛だよ。
「手軽に魔術かなにかでさらっと治療できればいいんだけどなー……」
ファンタジー世界だと謎の治療魔術やら奇跡やらがあるけど、使えればいいなって思う。
使えればどれだけ便利なことか。火をつけられるだけでだいぶ違うぞ。この世界の火熾しは往復摩擦式なんだぞ。そうだ、回転摩擦式も研究しないと……。
「やることが多い……やることが多い……！」
幸いというか、薪と食料はなんとかなりそうなので、冬は研究開発に時間をかけるべしだな。やることは山積みである。蜂蜜酒の世話もしないといけないしな！
村人の中でも、役割分担は出来てきている。男衆は狩りや力仕事。女衆は収集と家事。子供たちは道具作り。まあ全員駆り出すわけにはいかないんだけどな。火を守らないといけないので。あ、火と言えば火打ち石があれば……？
「うーん、うーん、うーん……」
「ソーマ。少し休め。神様が体調を崩すとは思わないが、神様にだって休息は必要だと思う」
「アキラスか。休んでる場合じゃないんだわこれが」
俺の対面に腰掛けていたアキラスがお茶を注いでくれた。
お茶。お茶といってもネコジャラシ？（エノコログサという名前だったはず）を焙じたものだ。本当にそうかはしらん。見た目はすごく似ているのでそう呼んでいる。
なぜこの草かと言えば――――。
「ふふふっ……春が待ち遠しいなあ」

この草を、栽培してみようと思うのだ!!　そのために腰が痛くなるまで毎日毎日毟って来たのだ。
確かネコジャラシはアワの原種だったはず。生命力もたくましく、村の傍というか村の中にも群生している程だったので、大量に取ってきて種を取り撒けば、穀物が得られるかもしれないのだ。一粒一粒が小さいので、とにかく大量に取って一気に脱穀してみようと思う。粒を解体してみたけど、籾殻を外す必要はないと思う。脱穀の道具は今考え中だ。
いかんいかん。何を見ても研究が思い浮かんできてしまう。
俺はアキラスから受け取ったネコジャラシ茶を啜った。玄米茶みたいで美味しいぞ。
「それを育てて……育ててどうするんだ？」
「ここに粒粒がついてるでしょ。これを取って粉にして水を加えて焼けば食べられるぞ。まあそのまま食ってもいいけど、どうせ食べるなら美味しいほうがいいでしょ」
アキラスが乾燥させたネコジャラシを壷からとってまじまじと見ている。栽培という概念がないので、栽培させたところでどうするんだよと思ってるんだろう。
「信じるよ。うまくいくといいな」
「春だね。とにかく春になればたくさん生えてくるから、片っ端とって……あああああっ！」
そこで気がつく。
大声を上げた俺のアキラスがぎょっとする。
「どうしたんだ？」
「畑を耕さなきゃ……」
「ハタケ？」
「木とかをどかして石とかも取った土しかないところ！」
「そんなの……この近くにあったか？　なかったと思うが……」
ううむ。根本的なことを見落としていたようだ。ネコジャラシを栽培するための場所が無い。確かに村は木のない開けたところにあるが、農業を始められるほどに場所があるわけじゃない。村の外側に

向かって森を開拓する必要がある。
　どこか違う場所を探してもいいけど、やはり畑は近い場所に限る。川も近いしね。
「森を切り開くしかない……いや、ううん」
「うん？」
「焼くか」
「はぁ!?」
　俺が唐突に不穏なことを言うと、アキラスが身を仰け反らせた。
　そうだ、ちまちまやらんでも森ごと焼いてしまえばいいんだわ。焼き畑農業だ。もっとも、無秩序的に燃やすと俺たちの村まで燃えてしまうので、計画的に燃やさないといけないわけだが。
「森を燃やしてそこに畑をつくろう」
「そ、そんなことしたら俺たちの家も燃えてしまうのでは……!?　手元から離れた火は恐ろしいんだぞ」
「大丈夫。一定区画以外には燃え広がらないように木とか草を取り除いてからやれば」
「燃え方は制御できるのか……知らなかった……」
　原始人にとって火災はまさに天災そのものだったに違い。情け容赦なく全てを焼き尽くしていく熱の壁。触れるものの命を奪い、恵みを灰に変えていくものだ。それが制御可能なものであると知り驚愕を隠せない様子だった。
「簡単に言うとね。でも俺も実践してみたことがないんだわ。燃えるものを取り除けば、火は広がらないことを利用して一定区画のみを焼く。灰がいい栄養になって作物も育ちやすくなる」
「エイヨウ？」
「なんて説明すりゃいいのかなぁ……」
　ちなみに翻訳できない単語は日本語でしゃべっている。概念自体存在しない単語ばかりなので、村の面々からすれば俺は神の言葉をしゃべっているように聞こえていることだろうな。
　アキラスがことあるごとに疑問系になるのは、俺が未知の単語を喋るせいなんだろうなと思う。

俺は手をパンと打ち合わせた。
「とにかく、やってみような」
「春が待ち遠しい。ソーマは俺たちの知らないことをたくさん知っているから、春になったら、もっと色々なことをやってくれると信じられるから」
「まだまだこき使ってやるから覚悟しておけよな」
俺とアキラスは顔を合わせて笑った。

１０．これから毎シーズン森を焼こうぜ？

事実上の村のリーダーである俺は、もちろん人員配置も担当している。

村の中でも才能がある面々は、それぞれ独自の仕事を割り振っている。

まずアキラス。アキラスはとにかく力が強く、建築から水運びまでなんでもこざれである。俺の御付みたいになってるけどな！

セイカ一族の長男、アキセイカ君。身長が小さくて、髪の毛がボサボサ。女の子みたいな顔をした土器作りの匠である。

レイ家の長男、アスレイ君。ひょろひょろとした体つきの長髪君。木工に才能があるらしくて、スプーンとかフォークなんかを作らせているところだ。

ザン家の大黒柱、父ザンソスさん。筋骨隆々の長身で、短髪。狩りの名手であり、建築をやらせたらなかなかどうしてうまかった。

これくらいかな。まだ才能があるなしの判断ができていないので、わかり次第、適切な仕事を割り振ろうと思っている。

「森を焼こうと思う」

『えええええええっ!?』

何度目かな、この反応。

俺は村中の面々を集めて、今日やる作業について説明していた。隣に控えているのはアキラス君である。なんか俺の横が定位置になりつつあるな。

俺は地面に四角形を描いて見せた。

「森の一定区画を焼く。外に燃え広がらないように、この線に当たる部位の木と草を完全に取り除くんだ。すると、火はそれ以上燃え広がらないから、この中だけ焼き尽くして自然に燃え尽きる」

『……』

一同が沈黙してしまった。森を積極的に焼こうなんて考えもしなかっただろうからな。

「神さんの言うことだから間違いはねぇんだろうが……森を焼くな

んてことは、恐ろしくて考えもつかなかったことだ。森を焼いてなにをしようってんだい？」
「農業を始めたいと思う。次の春がきたらね」
『農業？』
実はアキラス以外にはまだ説明してなかったんだよね。
俺はよっこいしょと言いながら岩の上に登った。もうこの村の中央にあるでかい岩、村のシンボルということでいいんじゃないかな。
「自然に生えている植物は、種を木の実なんかに入れて、それを他の動物に食べて貰うことで移動する。まぁ、ようは糞だね。それを、人の手で土に撒いてあげれば……木の実を収穫できる。理論上はね。毎年、毎年、あるいは一定期間ごとに、食べ物が得られるようになるよ！」
『……』
みんなが顔を見合わせてしまった。信じてくれるといいんだけど。
俺がどうだと言わんばかりに胸を張ると、みんなの表情が明るくなっていくのがわかった。
「信じられない気持ちはある。自然を操るなんてことは、神の領域だが……ほかならぬ神様がそういうなら、やってみせる。なあ、みんな」
おう、そうだそうだ、と肯定の言葉が返ってきた。
「よし、やろう！」
俺は腕を天に突き出した。

野焼き――――焼畑であるが、知識にはあっても実際にやるのは初めてである。本格的に冬になって雪でも降ってきてしまうと焼畑どころじゃないからね。空気も乾燥している今こそやりどきではないかと思う。
まず、どれくらいの区画を焼くのかを検討する。広すぎると管理できなくなるし、小さすぎると村を養えなくなる。
次に、線を引いていく。線に沿って木を切り倒して、草を取り除いていき、燃え移らないようにする。

最後に燃やす。何しろはじめてのことなので、壷に水を入れて延焼が認められたらすぐに消火にとりかかる。
「凄まじい熱だ」
俺とアキラスは、森が焼けていくのを眺めていた。
神様が森焼いていいんですかって？　科学の発展に犠牲はつきものでーす。
「農業、うまくいくといいな」
「いくさ。神様がついてるからね」
俺はそう返事をしたが、自信なんてなかった。
「農業をやるというのはいいんだが、あのへんな草だけを育てるのか？」
「お、察しがいいね。実はそれ以外にも考えていて、ベリーも育ててみようかと思ってる」
ベリーは、俺がメインの穀物として選定しているエノコログサと並ぶとは言わないが、繁殖力が高い植物だ。大量に収穫できるようになればベリーのお酒が作れるようになるかもしれない。
もう一つが、ドングリの収穫なんだが――実がとれるようになるまで下手すれば何十年はかかる。ちゃんと成長してくれるとも限らない。選択肢からは外すべきだろうと思う。
「あとはドングリかな。一から育てるんじゃなくて、自然に生えているドングリの木の周りの木を取り除いて、たくさんドングリを作れるようにしてあげるんだ」
だが、何もしないとは言ってない。ようは今ある木が全力でドングリを作れるようにしてあげればいいのだ。肥料に関しては色々試す必要があるとしても、周りの木を取り除けばそれだけ栄養の奪い合う相手がいなくなってたくさんドングリを作れるようになるはずだ。多分縄文時代のドングリ栽培も似たようなもんだったと思う。
アキラスが俺の顔を見てぽつりと呟く。
「……ソーマはなんでも知ってるんだな……」
「なんでも知ってるわけじゃなくて、君たちより進んでるだけで知ってることしか知らないぞ」

神様ですらないしね。単純に幾億万の人類が築き上げてきた知識の、ほんの一握りを知ってるだけの人間だ。不老不死ではあるけど……。というかアキラスは薄々ながら気がついてるんじゃないかなと思う。

「そろそろかな」

森の一定区画に放った火が徐々に消えつつあった。燃えるものがなくなってきたのだろう。

俺はみんなを引き連れて火の消えた森に入ることにした。こんがり焼けた木はもちろん伐採していく。木材としては使えないだろうが、焚き火に突っ込めばまだ燃やせるだろう。いい感じに乾燥していて、冬に使えそうだ。

「使えそうなものは回収していくぞー!!」

俺が号令をかけると、村人たちが散開してものを運び出していく。といっても倒木やらなんだけどな。

「えっさ、ほいさ！　えっさ、ほいさ！」

俺も倒木運びに手を貸していく。村まで運ぶぞ！

倒木を運び終わったら、続いて木を切り倒していく。こんがり焼けた木は石斧でも十分切り倒せる。で切り倒したら木の根っこも抜いて、石と雑草を取り除いてって、やることが多い！

「これは……終わらんな」

「仕方ないね……」

結局夕方になっても終わらず、俺とアキラスは灰塗れで地べたに座り込むことになった。

「一日で終わるもんじゃないと覚悟はしていたからね、道具も準備できてなかったわけで」

スコップとか用意したかったんだけど上手く作れないのだよ。石器の彫刻刀みたいなものはあってもノコギリがないので。

「地道にやるしかないね」

俺はそういうと、みんなを集めて村に戻ることにした。

11．死ぬほど苦いぞ

寒い。とにかく寒い。

冬が来てしまった。雪は降っていないが気温が急激に低下してきており、ぺらっぺらの葉っぱと藁の服では寒さを凌ぐことができない。焚き火から離れるのも億劫なくらいだ。

例のダウンだが、子供には全員着せられたんだが大人の分は無理でしたね、ええ。投石で鳥を仕留めるのには限界があったよ。

「形としては出来上がってるんだがなあ」

で、鳥を仕留める武器を作った。弓である。動物の腱を脂で伸ばして整えたものを、弓形の木の枝にはめ込んで作った。矢も枝を削って直線にしたものの後ろに鳥の羽をつけて、先端には鏃をはめたものを作ってみた。

それはいいんだが、とにかくあたらない。俺も弓は未経験で、群れの誰一人弓なんて武器使ったことがないからな。的が大きいイノシシとかならまだしも、鳥相手には当たらない。習熟が必要だな。

そんなわけで、俺たち大人は寒さに震えながら生臭い毛皮をかぶって焚き火に当たっているのである。幸い、焼畑したことで得られた膨大な薪があるので、冬は余裕で越せる。食料も保存食で賄える。

「家がなかったら凍死していたな……」

俺のことを後ろから抱きしめる格好のアキラスがぽつりと呟いた。

いやね、最初は恥ずかしくて拒否してたんだけど、寒さが尋常じゃなくてアキラス布団を被ってるんだよね。

「さむいねぇ」

「寒いな」

俺は鍋でグツグツと煮えているスープを器によそってズルズル飲み始めた。コンブ出汁を利かせたイノシシの干物戻しスープである。うむ、まろやかでおいしい。やはり出汁が利いているか否かは料理の美味しさを大きく左右するな。とりあえずコンブ入れるだけでおいしくなる。

「あの海から流れてくる草を干して煮るだけでこんなに味に深みが出

るなんて……」
　アキラスも同じようにスープを啜りながら感想を述べる。海藻という概念がないので海から流れてくる草という扱いらしい。
　コンブ（仮）はいいよ。なんたって、何もしてないのにどんどん流れ着いてくるからね！
「さーて今日はどうすっかなぁ。草食うのも飽きてきたよ……」
　俺は毎日のように草を食っては薬効を調べて薬を作るという作業をしていた。熱さましやら下痢止めやら、基本的な薬は作れたつもりだ。蜂蜜酒も出来てきたので、そろそろ蒸留することを考えている。
　俺が外に出るのはいやだなぁと思っているところで、群れの男が駆け込んできた。
「神様ぁ！　大変だ！　外から人が来たぞ!!」
「なんだって！　いだっ」
「痛い！」
　俺が思わず急に立ち上がると、ものの見事アキラスの顎を打ちつけてしまった。
「いでで……人ってなんだよ、人ってよぉ！」
「だから、外から人が来たんだ！　みんな疲れきっているみたいだ！　どうすればいい!?」
「いくぞアキラス！」
　俺は駆け足で男の案内する先に向かった。
　ついてみると、村人達が既に集まっていて、外からやってきたという人たちを不安そうに見ていた。
　人数にして１２人。家族がどうという感じではなく、色々な群れからの寄せ集めが偶然一緒になったという感じに見えた。服装は皮をまとっているだけであった。
「お、おぉぉ……ここが約束の土地なのか……！」
　先頭にいた痩せこけた男が呟くなり倒れ掛かってきたので、俺は胸で受け止めた。こういうとき大きい胸は助かります。じゃなくて。男を地面に寝かせて様子を見る。怪我はしていないようだ。空腹と疲労と寒さのせいか。

これは……これは好機じゃないか？　村の面々では労働力に限りがあったところだ。
「ソーマ。これだけの人数を養うことができるとは思えないが……追い出したほうがいいように思える」
アキラスが俺の肩に手を置いてそんなことを言う。
確かにな。今は足りている食料であるが、消費者が増えれば足りなくなるかもしれない。群れの外に追い出してしまったほうが賢明であるという考え方もあるわけだ。
養えない人間を捨てる。仕事のできない人間を追放する。これは、実は俺のいた現代でもつい最近まで行われていたことなのだ。それが原始時代で人権のじの字もない時代であればなおさらだろう。
アキラスに対し、俺は首を振った。
「これだけの人数が増えれば色々なことができるようになる。もっと暮らしが楽になっていく。俺は迎え入れるべきだと思う」
「はぁー……わかった。ソーマが言うなら、俺は何も言わない」
「ありがとう。よし、みんな！　怪我人、病人は俺の家まで連れてきてくれ！　体の汚れを取って、温かいスープを飲ませるんだ！」
違う好機でもある。俺の作った薬を、試すいい機会である。人体実験なんかじゃないよ。ほんとだよ。というか俺が自分で草を食って試してるんだから実験済みだよ。
すると、異邦人の群れの中から男と女が一人ずつ進み出てきた。一人は腕を押さえていて、一人は青い顔をしている。
「あ、ありがとう、ありがとう……！」
「ありがたい、感謝します……」
俺は二人を自分の家に招いた。
男のほうは腕がぽっきりいっているみたいだ。骨折か、骨折なら……俺は工作用に取っておいた枝と蔓を持ってきた。
「あの、この囲いみたいなものは一体……」
「これ？　これは家っていうんだ。あたたかいでしょ」
男が家をぼんやり眺めて質問してきた。はじめてみたんだろうな。
「まあ座ってよ。これお茶」

「ちゃ……？　これは岩を削って作ったのですか!?」
お茶を注いで渡すと仰天された。
「いや土を焼いたんだ。まあ飲んでてよ」
俺は女を床に座らせると、男の治療に取り掛かった。
枝と枝を腕に沿わせて、蔓で結びつける。これでよし。壁際から獣の胃袋で作った袋を取り出すと、渡す。中身は貝殻を粉にしたもので、ようはカルシウム剤である。
「中に白い粉が入ってるから、毎日欠かさず一つまみ食べること。一ヶ月……一日が三十個くらい経ったら治ってるから、外さないようにね。ちなみになんで骨を折ったの？」
「実はここに辿り着く途中マンモスに襲われまして、それで……」
……あの畜生め。森にまだいるのか。やっかいだなぁ。
「そういや約束の土地がどうとか言ってたけどあれは？」
「私に限った話ではないのですが、狩りができなかったり木登りができないものは、約束の土地があるなどと言って追い出されるのです……ああ、でも本当だったのだと、今あなたに出会えて感動しています」
なるほどね。まあ、嘘でもなんでも甘い話を吹き込んで追い出すのが普通か。
「疲れてるんだろ？　少し寝てろよ」
「ありがとうございます」
男は頷くと、その場で横になった。
俺は次に青い顔をしている女の状態を見た。
「どの辺が悪いの？」
「落ちている木の実を食べたら腐っていたみたいで、腹痛が……」
ふむ。下痢止めは出さないほうがいいな。出すものは出しちゃったほうがいい。
壷から塩を取って、鍋で沸いているお湯に入れる。次にベリーを指で潰しながら入れていく。ようは経口補水液である。
「座って。そうそう。腸の働きを助ける薬を出すから、しばらく安静にしてて」

「薬というのは……？」
「体の悪いところを治してくれるものだよ」
鍋から経口補水液を器によそって、粉状にしておいた整腸剤を入れてかき混ぜる。
「最初に言っておくけど死ぬほど苦いぞ。ゆっくり飲んでくれ。全部飲み終えたら、この中に入ってるのを汲んで飲んでくれ。全部だぞ」
脱水を起こしている可能性も高かったしな。
ふう。緊急性を要する怪我人がいなくてよかった。
俺は二人を家に残して、家の外に出た。

１２．この時代では合法だよなって話

人数にして１２人は、一名の骨折と一名の食あたりを除けば、寒さと疲労と飢えで疲弊しているだけだった。

だけだったと言っても、それだけでも人は十分死んでしまう。幸い寒さ対策の家と焚き火、保存食、寝床はあるので、数日食べて休んでいるうちにだんだんと元気になっていった。

「しばらく農地とか、土器作りとか、そういうことはやめるしかないと考えている」

「だろうねぇ」

俺はアキラスと相談していた。

家に関してはぎゅうぎゅう詰めになればなんとかカバーできるし、焚き火はみんなで当たればいいが、食料だけは切り詰めても限界がある。

使える人員が限られている以上、研究開発は一時的に止めて食糧確保を優先するべきだった。俺も含めてね。

俺は病人二人が寝ている家の隅っこに目をやると、エノコログサ茶をズルズル啜った。

「漁をするか……」

「ああ、魚を槍で突くんだろ」

「いんや、罠を仕掛ける」

今までの狩猟では魚を直接捕まえていたが、罠を使ってみようと思う。

俺は言うと、地面の上にさらさらと図を描き始めた。丁度花瓶みたいな形状である。口のところに細い線を付け加える。

「蔓を編んで、器を作る。口の外側は、魚が入りやすい形状にして、内側は狭く作る。中に虫を入れる。すると魚は一度入ったら出られなくなる。なんで罠かっていうと、置いてるだけでいいからだよ。槍を構えて待たなくてもいいから、その間別の狩りが出来るだろ」

罠最大の利点は狩猟者が待ち伏せたり追いかけたりしなくてもいいところだ。その間に別のことが出来る。

「できれば網を作って大規模にやりたいところだけどな」
「網」
「糸を編んで作った大きいもので、海にいる魚を一気に捕まえられるんだ」
「編む、というのはわかる。糸というのは……？」
「んー、木とかの皮を捲ればわかると思うんだけど細かい細かい線みたいのがあるから、それをこうすると太くなる。わかるな？」
俺は自分の髪の毛を数本まとめてより合わせて見せ、編みこんでみせる。
「んで、それをこうして……」
「……なるほど。網の糸と糸の間が狭いから魚は逃げられないのか……」
「問題が一つあってね。地引網って言うやり方だと海に入るか、船がないと無理だ。船は現状作ってる暇がないからだめだし、寒くて海には入れないし……」
「船」
「そ、葉っぱとかって水に浮くよね。それをたくさん集めたら……」
「人が乗れる!?」
「そういうこと」
やはりアキラスくんは最高でおじゃるな。頭の回転が早くて、俺の言っていることは嘘ではないと信じてくれているので、ぱっと理解してくれる。
地引網をやるには入水するか船がないとダメだが、凍えるような寒さのなかやるのは厳しすぎる。春にならないと無理だろう。
「わかった。この罠をみんなで作って、魚を取ろう」
「おう。じゃ、一緒に作ってみようか」
見本もないのにみんなに作れと命じるのは無茶振りもいいところだ。
こんなこともあろうかと用意しておいた蔓を使って、罠を作成していく。程なくして二つ出来上がった。
アキラスが罠を二つ抱えて立ち上がると、家の外に出て行った。

「行ってくる」
「行ってらっしゃい。さてと」
俺は病人の様子を見ることにした。
腕の折れた男は――――すやすやと寝息を立てている。ギプスの調子を見てみるが、特にずれたりはしていない様子だった。
食あたりを起こした女は、顔色が随分とよくなっていた。
「おはようございます……だいぶよくなりました……」
「おはよう。薬とお湯飲んでもらおうね」
「その、お鍋の中のしょっぱい水を全部飲まないといけないんですか……？」
「うん♪」
「はい……」
がっくり肩を落とす女を前に、俺はにっこりと笑ったのだった。
で、その日のうちに合計十個の罠が作られて、仕掛けられた。結果が楽しみだな。
「あとは落とし穴かなぁ」
俺は考えていた。
そう、この時代。罠で動物を捕獲するという考えがない。もっとも効果的で、もっとも確実な罠と言えば、やはり落とし穴だろう。深い穴を掘り、一見すると地面があるようにカモフラージュを被せる。獲物が上を通りかかると落っこちるという寸法である。余裕があれば罠なんて使わなくてもいいんだが、今はとにかく食べ物が欲しい。
「そしてあとは――――」
俺はうーんと唸った。もう、アレしかない。アレとは。
「食用キノコを探すか……！」
キノコである。この時代の人間でも、キノコを食うとやばいことになるというのは知られているらしく、触れようとさえしない。なぜかと言うと、毒があるからだ。解毒剤なんてものがないので、毒キノコを食べようものなら死まっしぐらだからだ。
動物実験を考えてみたんだが、肝心の動物がいない。ネズミがいいんだけどね。石投げて捕獲すると大抵死んでるので、無傷でネズミを

捕まえる罠も研究してみるか……。
やってみるしかないな……なんたって不老不死だからな！　食えるキノコが見つかれば栽培もできる！　というか鑑定ミスが怖いから栽培しないとだめだ!!
俺は早速森に繰り出した。あるわあるわ、意識して探せばザックザクキノコが出てくる。なんてたくましいんだ。赤いやつ。青っぽいやつ。白いやつ。茶色いやつ。とにかくなんでもいい。死なないなら食ってやればいいじゃないか。
家に戻ってきた。病人二人組みは地面で丸まって眠っていた。
俺は適当に、三角の傘にひょろひょろとした茎?を持つキノコを手に取ると、おもむろに食べてみた。
もにゅもにゅもにゅ……マイタケみたいな味がするな……。コリコリとした歯ごたえだ。少しだけ喉に異物感がある。
しばらく待ってみたが何も起きな……？
「ふにゃぁ……？」
世界が歪んできた。目がきりきりと痛んできたかと思えば、世界が輝き始めた。色の輪郭が崩れて虹色に染まっていく。
「はにゃあ……？」
焚き火がやばい。何がやばいかと言うととてつもなくでかい。太陽か？
全身が暑くて暑くて仕方がないので外に出る。朝か？　と思うくらいに眩しい。ものの輪郭が飛んでしまっている。
よくはわからないが幸福感で一杯になっている。石が突然大きく見えたかと思えば、自分の体が空に届くようになってくる。
「お、おぉぉぉぉぉ……息するたびに、高まってくる!!!」
息をすると世界がぐわんぐわんと揺れて心地がよい。目を閉じても風景が見える!!
「寒い……ソーマ？」
罠を仕掛けてきたらしいアキラスと出くわした。
ああ、イケメンじゃないかよ。超絶ですよ超絶。だきついて胸板ぐりぐりーあーいーにおい。においにも色ってあるんだなぁ。もう匂

いに色を感じる。こんなこと、はじめてだ！
　世界がこんなにも美しいなんて
「おいよせ、どうしたんだ……!?　とりあえず寝かせるしかないか……」
「ああーもっていかれる～～～～」
　アキラスに抱えられて自宅にイン。そーまたんいんしたお！
「あっついあっつい！　あついよ～～～ぴ～～～」
　あつくてしかたがないので服をぽいぽいぽーいと脱いで、アキラスをひっくり返す。あれ？　こんなに力出たっけ？
「これを食ったのか……キノコは危険だとあれほど……」
「ちゅー！　ちゅー!!」
「むぐぅぅぅっ!?」
　キノコなんてほっといてさぁ、らぶをしようずぇ！
　らーぶらーぶ！　らーぶらーぶ！
　そーれ！　勃起！　勃起！　勃起!!（手拍子）
「しがみ付くな手を叩くなそれともなにか、子供作ってくれるのか？」
「へぇぇぇ～～～???　へぇぇ～～～????」
　あはは。うふふ。
「前■なしで挿入とかエロゲかよてめーはよ!!　入れろや！　入れろって！　せっくす教えてやろうかぁ!?　この世界に布教したろうかよぉオラ!!　性の電動マッサージ師になろうかぁ??　無知シチュですかコノヤロー！」
「ば、やめろ!!　たつか!!??　舐めるつもりか!?　よせ!!」
「ふぎぎぎぎ抵抗するなよーがんばれーアキラスくん♥　がんばれがんばれ♥」
「作るなら入れるだけでいいだろ!!」
「せっくすってのは奥が深いんだよ!?　ＤＶＤ！　ＤＶＤ！　凹と凸をくっつけてくれよ!!」
「くそっ、完全に正気を失っている！　だれか、だれかーっ！」
「コケティッシュだルルォォォン!?　でかい乳だろ!?　吸えよタコ！
　ざーこざーこ♥」

「うわぁぁっ!?」
「う」
「吐くなぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

「起きたほうがいいのかしら……」
「いや起きないほうがいいような気がする」
「そうね」

そして。
「あだまいだいよ、おぉぉぉぉ!!」
激しい頭痛に悩ませられ、俺は行動不能に陥ったとさ。
「……その、■戯ってなんだ?」
「教えないよぉぉぉぉぉ!!」

13．最初に畜産を考えたやつは奇才

酷い目にあった。だが一つわかったことがある。幻覚作用を持つキノコもあるということだ。

トリップしてアキラスにしがみついて、それからのことは思い出したくない。ちょっとしょっぱかったです。

どうしよう。確か幻覚キノコは鬱病の治療に使えるとか聞いたことあるけど、現状鬱をわずらっているようなメンバーはいないわけで。毒矢にできるかな。でも毒矢を食らった動物を食った本人が幻覚見ちゃうよな……肉を抉ればいいのかな……古代のシャーマンはこうした幻覚物質を使って神と交信していたそうだけど、神と交信は結局できなかった。夢のような感覚は味わえたけどさぁ。

とりあえずこの『幻覚キノコ』は壷に封印しておくとして、他のキノコを試そう。今度は丸々食わないで微量を口にしてだな……。

「あむ」

……ステータス開いて……あ、消化器障害……。

不老不死のお陰なのかほんの少し食べてるだけなお陰か、一時間もあれば全回復する。このキノコは駄目だ。

「これは？」

一口。

ステータス『循環器系障害』

……。

「これなら……」

『皮膚炎』

「こっちは……」

『副交感神経麻痺』

「毒キノコばっかじゃねぇかよ！」

俺は苛立ちで床を叩いた。

食うキノコ食うキノコどれも毒キノコばかりである。いやあるいは加熱すればいけるのかもしれない。シイタケだって生で食うと皮膚炎になる。しかし物によっては、過熱してもダメな場合も十分考え

られる。中には触れただけで手がかゆくなり始めたのもあった。
だめだ。食えそうなキノコが見つからん。しかし、どんな毒でも薄めて使えば薬にもなりうる。いずれにしても、実験が必要だ。
ううむ、食えるものを探してキノコを食ってみたわけだが、食えるキノコを栽培するなど夢のまた夢であったなあ。人類が食べるものを探すにあたって、毒だったために死んでしまったというケースは山のように転がっているというのが実感できた。その辺にシイタケとかシメジとかエリンギ生えてないかなぁ。
というかカロリーベースで考えるなら、キノコはカロリーが低すぎて投じる労力に対するコストパフォーマンスが低すぎる気がしてきた。余裕が出来てきたら食用を考える、程度の優先度の低さでいいだろう。
「……畜産」
そのとき俺に電流走る。
考えてみるものだ。現代では当たり前過ぎて発想として浮かんでこなかったことだ。動物を飼い、食べ物を得るというのはどうだ？
ぱっと思い浮かぶのが牛、鶏、豚、蜂である。
「牛……」
牛は、この世界で見たことがある。やたら長い角の生えた茶色の毛をした種で、俺の知ってる白い牛なんかとは見た目が異なる。角で突かれたら死ぬんじゃないかな？　どうやって懐かせるんだ？
鶏。これは未発見だが、どこかには鶏になりうる鳥がいるはずだ。卵をパクって来て孵化させて刷り込みで懐かせれば卵を産ませられるのではないかと思う。
豚。これはイノシシが近いと言えるだろう。性格は神経質にして凶暴で、家畜化できる気がしない。馬力がすごいので、大人でも跳ね飛ばされることもしばしばだ。
蜂。これが現状家畜化できそうな生き物ではないかと思う。しかし、今は冬。積極的に巣作りする季節ではないので却下だ。
結局、どの案もすぐには実現できないものばかりだった。第一に、動物を見つけないといけない。第二に、慣らさないといけない。第三

はいらないのかもしれないが、家畜を囲うためのフェンスと家畜舎を作らないといけない。ないない尽くしだな。一歩一歩やっていくしかないんだけどね、千里の道も一歩からだ。
　この冬はとにかく、倹約に励むほかになさそうだ。異邦人たちが回復してきたら木の実拾いとか、貝拾いを教えて、自分の食べる分は稼げるようになってもらわないとな。この時代にタダ飯が食える人間はいないのだ。俺も含めて。
「ということで――――君たちにも働いて貰う」
「しかし、私たちは狩りも木登りも出来ないから追い出されたのだが……」
　俺は異邦人組を全員集めて、岩の上に立っていた。朝礼台みたいな扱いになってきたな。
「言っておくけど私だって狩りはヘタクソだし木登りも上手にはできないよ。君たちにはおもに木の実拾いと、貝拾いと、薪拾いをしてもらうからね」
　どれだけ狩りがへたくそでも、木登りができなくても、木の実と貝と薪を拾うことくらいは出来るはずだ。
「と言っても冬だから、あまり長い時間外で働くことは出来ないけどね。雪なんか降ってきたら、絶対に外にはいかせないし」
　まだギリギリ降ってないが、そのうち降りだすだろうなと思っている。
「どうしてそこまでしてくれるんだ……？」
「俺のためだよ、そりゃね。でも、俺の指示に従ってくれれば、今までよりももっといい暮らしができるようになるよ！」
　俺は胸を張ってそう宣言した。たとえ自信がなくても、たとえ計画がなくても、言い切らないといけないんだ。指導者ってのはね。
「わかった。あんたに従ってみるよ」
　先頭の一人がそういうと、みんなが一斉に跪く。
　俺はふふんと胸を張って見せたのだった。
「じゃあ早速だけど、家を作ってもらうから」
「家っていうのは、あの大きい木の覆いのことか!?　どうやって作っ

たんだ!?」
その前に、やることがあった。今は異邦人たちを四つの家に分散して住まわしているけど、これからは異邦人用の家が必要になってくるだろう。
俺が言うと、一人が素っ頓狂な声をあげた。移動しながら採取と狩猟が基本のこの時代において、定住することを目的とした木製の家なんてオーパーツにも程があるからな。
「大丈夫。しかるべき道具と、材料さえあれば君たちにも作れるよ!」
ということで俺たちは、異邦人たちにあれこれと教えながら、家を作り上げたのだった。
「し、知らない技術だ……!」
石器を見たことすらなかったのか、見せただけで感動されたり、「木と木を組み合わせて囲いを作るのか……同じような形のものは作ったことがあるがこのオノという道具があれば、こんなにも大きくできるなんて」
とやはり感動されたり。最近は慣れてきたけど、未知のものに触れる人間の反応ってこそばゆいよな。
後日、魚を取るための罠を調べたところ、魚は余りとれていなかったが、エビがわんさかととれたとか。

１４．酒！　飲まずにはいられないッ！

春がやってきたぞ。
現状を確認しよう。三家族合計１５人と、俺とアキラスで１７人。異邦人組が１２人の合計２９人だ。
食料の備蓄だが、冬の寒さのせいでほとんど食べつくしてしまった。も、もう、ドングリの塩クッキーとエビは十分です……。いや毎日ドングリクッキーで頭がおかしくなるかと思ったよ。まずくはないんだがパサパサでな。
幸いというか、気温の上昇とともに一気に自然の恵みが出てきているので、ドングリクッキーからは卒業できそうである。
さて、この冬の間、運がいいことに雪は降らなかった。焼畑の木々を取り除いて、整地するだけの余力はあった。冬を越えて土がカチカチに凍っているので、土起こしをしないといかん。
「ふーむ、農業に半分、残り半分は食料集めが妥当なところかな」
異邦人組も一通り生きる為に必要な技術は教えて込んでいる。狩りはともかく、採取ならば十分出来ることだろう。
「おーできたよ……これで医療は飛躍的に進歩したな」
そして俺がなにをやっているかと言うと、蜂蜜酒からアルコールを蒸留していたところである。セイカ一家の長男アキセイカ君に作らせた蒸留器だが、上手く出来ている。もっとも、割れないように、かつ確実に蒸留できるように、など土では条件が厳しく、失敗の山が作られたことになったけどな。
俺は、シャーレに似せた器にアルコールを注ぐと、くんくんと匂いをかいだ。確かにアルコールの匂いがする。
久々に嗅ぐ文明の香りに俺は一瞬意識を奪われた。
「……問題は保存だよなぁ」
できたはいいが最大の問題は保存である。なにもしないとどんどん蒸発してしまうのだ。
「土器で密閉容器……」
もし出来たらもっと便利になるが……。

「うむむむむ……」
思いつかない！　木の実の中に封じるのはどうかと思ったけど気密性が高いとは言えないわけで。獣の内臓の中にしまうと不衛生だし。やはり土器がいいと思うんだが、そんなことが可能なのか？
まったく考えが思い浮かんでこないので俺は家から出た。
ぽかぽかと日差しが暖かい。くそったれな冬が去り、豊穣の季節である。絶好の農業日和だな。
農業は主に三つのプロジェクトを抱えている。一つがエノコログサ（仮称）の栽培。二つ目がベリーの栽培。三つ目がドングリの木の保護・育成である。
エノコログサ（仮称）の栽培がメインだが、上手くいく自信がある。生命力が半端じゃないからだ。撒き方も丁寧に植えつける日本のやり方はそぐわないというか、労力に見合わないと思っている。ただ何もしないで適当に撒くと鳥に食われるので、溝をつけて一定間隔で植えることくらいはしたい。
「ソーマ」
「アキラス。順調かい？」
とはいえ生えるだけ生えて実をつけない固体は排除せねばならない。
俺は、土器の中を覗き込んでいるアキラスの隣にしゃがみ込んだ。
「この、浮かんできた実は撒かないんだな？」
「そうそう。浮かんできた実は中身が入ってなかったり、悪い種だったりするからね。浮いてきた実はあとでパンにしてあげる」
塩水選というやつだ。食塩水に種籾を入れると、実の詰まっている固体は沈むが、悪い個体は浮く。この浮いているものを排除すれば、いい個体が残る。という理屈だ。
もちろん、浮いた個体はそのまま食べるつもりである。エノコログサは実がとても小さいので、胚芽をとらなくてもいいだろう。動物油を使ったパン（クッキーに近い）を焼いてみよう。
せっせと作業を進めるアキラスをよそに、俺は畑に向かった。
村人たち――異邦人組も含む――が、せっせと土を掘り返して

いるところだった。スコップなぁ……スコップは結局作れなかったよ。曲面を作るというのができなくて、鋤になってしまった。改良してスコップにしたいなあと思う。

土起こしが済んだら次は種まきである。溝の頂上に指で穴をほじって種籾を植えつける。

「ほんとうにこれで食い物が出来るのか……？」

疑いの視線を向けてくるものもいたが、俺はうんと頷いて見せた。

「もっちろん。やってることは自然の植物と変わらないよ、手助けをしているだけ」

植物というのは勝手に生えてくるもの。一度信じた常識はなかなか拭い去れないものだな。

俺は村人に指示しながらも、自分でも種籾を撒いた。

あとはどうするのかって？　雑草が生えてきたら抜く。以上だ!!

いやほんと他にすることがない。例えば質を追い求めるんだ！

とか、量をとるんだ！　とか、水の量が！　とか、肥料が！　とか色々あるんだけどね、農業というのは奥深いから追求すればするほどきりがない。なんでもいいから取ることが重要なんだ。おそらく人類史上初めての農業なんだから。

そういえば、肥料はどうするか。肥溜めでも作るか。うーむ。排泄物を集めて撒くんだよなんて言ったら頭がおかしくなったと思われそうだな。

「よーし次はベリーの木を植えるぞー」

次である。

同じように、ベリーも植えていく。こっちは更に分からない。どれくらいで成木になるのかもわからない。

更に次と言いたい所だが、日が翳ってきてしまった。日が翳っているのに森に入るのは危険なので、みんなで家に帰る。なんて健康的なんだ!!

「あ、そうだ。例の酒なんだけどさ」

「ん？」

俺は取れたての木の実をボリボリと貪り食っているアキラスに話

を持ちかけた。
「とりあえず保存していく容器が思いつかないから飲んじゃっていいやと思って」
「あるこーるがどうとか言っていた件か」
「密閉してないと蒸発……空気に溶けて消えちゃうんだよねぇ……」
「……ミッペイ、ジョウハツ、またわからない単語だ」
俺はそういうと、蜂蜜酒を瓶から注いだ。
怪我人が出る度に蒸留してもいいが、手間がかかりすぎるよな。純度の高いアルコールはやめて、純度の低いアルコールで我慢するか？
それならば蒸発にピリピリしなくてもいい。
考えてみれば、この手の中にあるものはおそらく人類史上初の人工酒である。まあ細かいことは気にするな。また作ればいいのだ。
「これが例の蜂蜜酒。蜂蜜を発酵させて作ったお酒だよ。飲んでみて。あっと、最初は少しね」
一気飲みし始めようとしたアキラスを慌てて止める。下戸だったら困るのでな。
「……!?」
一口飲むと、アキラスが目をむいた。俺と器を交互に見比べている。
「毒……？　口の中が、こう、熱いというか、痺れるというか……」
「ふふっ」
わかる。超わかる。毒という見識も誤りではない。アルコールは毒なのだ。
「はー……おいしいなぁ」
俺も一口煽る。労働でほてった体に蜂蜜酒が染み渡るッ……！
「……体が熱くなってきたんだが、これは……？」
「んー、酒を飲むと体が熱くなってきて、心臓も早く、人によっては性格が変わったように振舞ったりする」
「いや、とくには変わらないが……」
平然と酒を飲んでいるので、大丈夫っぽいな。
「酒もたくさん作ってみんなに振舞いたいな……」

「酒ってのは、どうしたらできるんだ」
「ああ、それはね……」
こうして夜が更けていくのだった。ちゃんちゃん。

１５．雑草という草は無い

「よいしょっ！　よいしょっ！」

翌日。村の男衆を集めて俺はドングリの木が集まっている場所へとやってきていた。やっていることと言えば、ドングリの木の周囲に生えている別の木を切り倒すことだ。理屈から言えば競争相手がいなくなれば栄養が行き渡るようになってたくさん実をつけるようになるはずだ。

俺も木を切り倒すの参加したいところだったけど、この体、馬力があるわけじゃないので役立たずである。男に任せておいたほうがいい。

「よーし雑草取りをしよう」

俺は早速雑草を毟り始めたが、それに気がついた。

「これは……ツクシか？」

ツクシとしかおもえない独特な形状の草がわさわさと群生している。

「ということは、そこまで緯度が高くない場所にいるのかな？」

ツクシは繁殖の為に『土筆』とも漢字で表現される独特な形状の茎を生やす。緯度が高過ぎる北国には生えない。ということは、俺たちのいる場所は、一年中寒い場所ではないということになる。なんてことは体感で分かると言えば分かるがな。

「食いすぎると毒なんだっけ。スープに入れてみるか。ビタミンは豊富だろうな」

当然といえば当然だが、この世界、この時代、『栄養』なんて概念はない。腹を満たせればそれでいいという考えが主流なので、なんとか欠乏症という概念が理解できないらしい。

なので俺は、予防の観点から栄養が偏らないように肉ばかり食べることは禁止して、ベリーを食べさせたり、食事に貝殻の粉を混ぜたりをしている。各種薬剤はあるとは言え、風邪薬レベルだ。病気をさせない予防を重視するしかないだろう。

「またお前か……」

俺はキノコを見つけた。食って酷い目にあったキノコとよく似ていた。もう二度とごめんなので、触らないでおく。
幻覚キノコの使い道としては、例えば、戦いに使える可能性はある。幻覚作用を伴った煙幕を貼れたら強かろう。
「戦いたくねぇなぁ……」
古代は平和な時代であったというのは誤りで、人を殺めた痕跡が発掘されていることからも、明らかだ。槍と弓を発明できているので優位性はあるが、やはりもっといい武器が欲しくもある。戦いがあるならば、という仮定の話だが。
「おっタンポポだ」
雑草という草はない。どれも名前があって、使いようがあるものだ。
俺はタンポポが群生しているのを見つけた。タンポポがあれば、タンポポコーヒーが作れる。味わいはコーヒーに近く、利尿作用があるのも一緒。カフェインが入っていないのが大きく異なる。
「こんなもんかねぇ」
ということで、つくしやらたんぽぽやらを取りまくったので、家に帰ることにする。
「かみさまーべりーたくさんとってきたよー」
「おーありがと」
帰って早々に、俺はベリーをたんまりと毟ってきた子供たちの歓迎を受けた。
蜂蜜酒はアキラスとほとんど飲んでしまったので、次はベリー酒を作ろうと思ったのだ。例の如く水を入れて潰して放置である。
壷一杯に入ったベリーを、家の隅っこに置いておく。それから、エノコログサの実の入った壷を手元に引き寄せる。
「さてと、やってみるかね」
塩水選ではじいた実を、すり鉢――――凹型の岩――――に入れて、石ですりつぶして粉にしていく。
とにかくゴリゴリと潰しては粉にする。粉にする。粉にする。
「……」

疲れる。
全部終わるのに二時間はかかったと思う。
次に水を入れてこねてと言いたいところだが、次のステップに進むためには例のベリー酒がある程度発酵してくれるのを待とうと思う。イースト菌がないので天然酵母でやるしかなく、現状ベリーの天然酵母が活性化するのを待つしかないのだった。
暇になったので次はタンポポの根っこを石器ナイフで刻んでいく。すっかり刻み終わったら、石板の上に並べて、外に出して天日干しにする。乾燥したら炒ってエキスを取るだけである。
タンポポは葉っぱも食えるので、こちらは塩を入れた鍋の中に入れる。しんなりしてきたら鍋から出して、器によそう。ほうれんそうみたいだ。
つくしは、ジビエ肉の干物と昆布と一緒に煮込んでみる。村人達が作ってくれた塩が役に立つ。小皿で味を見てみると、まろやかな昆布だしと、お肉の旨みが塩味で引き立てられていて、つくしがいいアクセントになっている。
あとは、取れたてのエビである。こちらは生で頂く。
圧倒的な炭水化物不足を感じるが、エノコログサの粉を練り物にしちゃうのは味気なさ過ぎるから却下だ。
「帰ったぞ」
「おかえり。ご飯できてるぞ～」
俺はくたびれて帰ってきたアキラスを笑顔で迎えた。
……いやさ、うん。わかってるんだよ。結婚とかしたつもりとかないんだけどいつの間にか奥さんみたいになってるなんてことは。
「これで農業は一通り済んだ。あとは、確か……雑草を抜いたり、水が足りなければ水を撒いたりするんだったか……次はどうするつもりなんだ？」
「周辺の探索に乗り出すべきだと思ってる」
俺はずるずるとスープを啜りながら言った。
欲しい資源はいくらでもあるからな。

「今植えてるエノコログサ以外にも、麦とか……ブドウ欲しいよなぁ……根菜類のできればテンサイがあれば砂糖作れるし豆も欲しいし米もあれば欲しいし麻も欲しいしハーブも欲しいな虫除けになるし……鉄も作りたいよな、まずは銅からかなと思うけど」
「わかったわかった、ワッと一気に言わないで欲しい」
「すまんすまん。とにかく探索をしてみたいね。人数も増えたし、いくつかの班に分けて四方を調べてみたいね」
「フムン」
　アキラスも料理を口にし始める。自信作だぞ、自信作。
「気になっていたんだが、あの山はどうする？」
「ああ……」
　周辺と言えば、山である。俺はアキラスが顎でしゃくった方角に鎮座している山のことを考えた。中腹が抉れた独特な形状をした山が村の近くにあるのだ。あの抉れたところ、俺の予想が正しければ……。
「もちろん調べたいところだ……はぐれものも集めたいし……」
　俺はたんぽぽの葉っぱを口に運んだ。少し苦いが、なかなかいける。
　人口が多ければ多いほどやれることが増えていく。消費される資源の量も増えていくけどな。だからこそ農業を始めたというのもある。
「受け入れるのか……とことんお人よしだな」
「んー、人が増えれば増えるほど豊かな生活ができるようになるぞ。豊かな生活がしたいんだよ、俺は」
　導いてくれと言われたから導いているわけなんだが、結局はそこに尽きる。元の世界でも豊かな生活がしたくて仕事をしていたわけで。こっちにきても豊かな生活がしたいと思うのはそんなにおかしいことじゃないだろう？　まあ、豊かどころかゼロからのスタートだったわけだが。
　ゼロから始める原始時代ゲフンゲフン。それ以上いけない。
「で、俺は豊かな生活がしたいんだけど、アキラスはどうなの」

「俺も同じだが強いていうなら子供が欲しい」
……。
「ふんっ」
俺はそっぽを向いてやったのだった。

１６．隕石ノシワザダタノカ

「ひぃっひぃっひーっ」
息があがってしまった。
俺は男を連れて山に登っていた。例の山だ。名前はまだない。山道もない。とにかく登るのみである。
「大丈夫なのか休むか？」
「やすまない!!」
アキラスが俺の様子を見て声をかけてきたが、俺は首を振った。くそう運動が得意な設定でもつけておけばよかった。不老不死だけど疲れるし息だってあがっちゃうのだ。
俺とアキラスと異邦人何名かは、山の中腹にある抉れたところに向かっていた。なんでかって？
「だって隕石あるかもしれないだろ!!」
ということだ。抉れ方が不自然だったのだ。山腹噴火かもしれないけどな！
隕石にも色々あるが、構成素材が鉄であることがある。青銅器すら作れてないのに鉄の製造できたら素敵だろ!?
ロマンはさておいて、鉄器が作れたらとんでもないことだ。何が凄いって、例えばノコギリを作れたら今の竪穴式住居から俺たちの想像する普通の家も作ろうと思えば作れるようになる。まあ溶かすなんてこと不可能だろうがな!!　せいぜいが熱して叩いて伸ばすくらいか。
「木炭とふいごとぶべぇっ!?」
こけた。頭の中に浮かんできた製鉄炉について話そうとしたらこれである。
いけるかもしれない。
隕石があってもなくても、山は探索する価値がある。洞窟とかあるかもしれないしな。使えそうな資源があればいいんだけど。
「楽しみだなぁ!!」
「鼻血が出てるぞ」

指摘されるまで気がつかなかったよ。
で、やっと例のクレーターらしき場所に到達したわけだが。
「神様、インセキってなんのことなんですかね？」
異邦人――――俺が腕を治療してやった男が声をかけてくる。名前はオキとか言ったか。
ナチュラルに神様呼びされてるけど、もう慣れたよ。
「空の上にも世界があって、そこにはたくさんの石があるんだけど、たまに落ちてくることがあるんだよね。凄い速度で落ちてくるから、地面に凹みを作ることがあると」
宇宙があるんだよとか言っても想像できないだろうから、噛み砕いて言う。
「インセキってのは、なにかに使えるんで？」
「インセキに入ってるかもしれない鉄、銅、金属っていう物質が欲しいんだよね」
正確にはニッケルとかレアメタルも入ってるけど説明してもわからないので省略だ。
砂鉄が見つかればそれでもいいけど、現状だと見つかっていないのでね。
「ほー、見事なクレーターだぁ」
岩を登ると見えてきた。中央から外周に向かって坂になっていて、中央から蒸気が立ち上っている……ということもなかった。あるいは大昔にマグマが引いた火口なのかもしれないが。
水がたんまりと溜まっているということはなかった。クレーターの一部に穴が開いていて、そこから小さい川が出来ている。
「！」
俺は全力でダッシュし始めた。道中手に入れた杖を放り出しながら。
「こ、これは！」
黒っぽい石が地面から突き出しているのが見えた。駆け寄ってみると、黒のほかにも赤が混じっているようだった。試しに石で表面を叩いてみる。

「かった……」
硬い。欠けたのは石のほうだった。根気強くごりごりと表面を削っていくとかすかだが光沢が出てきた。相当の金属を含んでいるらしい。間違いない。
「隕石だ……」
「ソーマ。この岩を持って帰るつもりなのか……？」
追いついてきたアキラスが絶望を滲ませながら言葉を発した。隕石に手を置いて首を振っている。
大きさは、大人の胸元と同じくらいの直径はあろうか。何トンあるのかわからないが、象でもいないと持ち運びは不可能だろう。山の上ということもあり、丸太を噛ませて運ぶやり方も無理だ。転がしていくのも、クレーターの淵を登れないので却下だ。
だが本体（？）がだめなら、欠片でもいい。というか欠片のほうが本命である。こんなでかい岩を溶かせる炉とか頭がおかしくなるだろ。
「これはでかすぎて無理だから、欠片がないか探そう。みんなー聞いてくれ。この岩の破片が転がってるかもしれないから、それっぽい色のを見つけたら石で擦ってみてくれ。光を反射するようなやつがあったら集めて欲しい！」
そして俺たちは、持てるだけの隕石の欠片を持ち帰ることに成功したのだった。
数日後。
俺は各方面に探索に行かせたメンバーの収穫を待っていた。ちなみに山は、他のメンバーにも調べて貰っている。山と言っても範囲が広大だからな。
「戻ったぜ」
俺が『火打石』を試していると、探索隊が戻ってきた。
火打石――――ようは隕石だな。加工しないでも、硬い石と打ち合わせることで火花くらいは作れる。いままで必死こいて火熾ししていたのが馬鹿みたいだ。各家に一つ配分しよう。
最初に戻ってきたのは大工のザンソスさんグループである。何や

ら果物を抱えて……ふわぁぁぁっ!?　ブドウだ。ブドウを持っておられる。
「近場の森を探してみたら生えていたから持ってきたぞ」
「おおおおおっ!!　ワインが作れるッ!!」
　ワイン、ワインはいいぞ。ベリーのお酒もいいかもしれないが、やはりワインは格別である。青銅器時代、紀元前３０００年くらいにはもう生産が始まっていたそうだ。石器すらなかった時代に作れたらこれもオーパーツだ。
「場所、覚えてるよな？　その場所はどの辺りだった？」
「ああ、それはこのあたりだったか……」
　俺は早速、俺の家の床にある地図に場所を記して貰った。
「とりあえず、全部取ってきて！」
「全部か!?」
「そう！　畑に植える分と、お酒にする分必要だから！」
「わかった。お前ら行くぞ」
　俺は早速ザンソスさんのグループを送り返してある分全部取ってきて貰うことにした。
「かえったよ」
　次は子供たちのグループだ。子供たちと言っても母親のおっぱいが必要な子は一人もいないので、小さい大人として扱っている。
　その葉っぱを見せてくれたのは、木工が得意なアスレイ君だ。子供たちには辺りを探して、使えそうな草を持ち帰るようにとお願いしてあったのだ。
　俺はその葉っぱを見て、おお、と声を漏らしていた。独特な複数に分岐した葉の形状。俺が一生懸命イメージを絵に描いて伝えていたのが功を奏したらしい。
　『麻』である。麻は、その繊維は衣服として、実は食用にも、医療大麻として使うこともできるし、油を絞ることもできる極めて便利な植物である。大麻のイメージが悪いのは、麻薬としての作用を持っているからだろうな。
　俺はアスレイ君の頭を撫でると、ザンソスさんと同じように、地図

に場所を記して貰った。
「戻って、この葉っぱの植物の実があったら持って帰ってきて欲しい」
「はーい」
　次は、山探索組である。俺たちが隕石を調査したのに対し、彼らは山の麓を調べたのだ。
「とくに何もなかったよ。洞窟はあったけど、松明がなかったし、中には入れなかった。黒い鳥が出入りしていたよ」
「ううむ」
　そういうこともある。収穫としては少ないが蝙蝠がいたというのは、いい結果かもしれない。蝙蝠の糞は、肥料に使えるからだ。とはいえ洞窟に準備なく突っ込めば遭難必至なので、準備をさせなくてはな。
　次回の探索の時には、もっと範囲を広げる必要があるかもしれないね。
　最後の組は子供組に負けず劣らず良好な結果を持ち帰ってきてくれた。
「……卵？」
　大層大事そうに卵を十個ほど持って帰ってきたのだ。男がほくほく顔で卵を渡してくる。
「茶色の鳥が水辺で守っていたのを盗んできた。これは食べられるから、神様に精をつけてもらおうと思って」
「……いや、孵そう」
「カエス？」
　これは……チャンスだ。茶色い水辺にいる鳥と言えばカモだ。アヒルの原種とも言われている。鶏が欲しかったんだが、カモでも結構である！　鳥は、一番家畜化しやすい生き物だ。はじめて見たものを親と思い込む性質があるので、上手く孵化させられたら、家畜化できるようになる。
　俺は卵を火熾し用の藁に包んで地面に置いた。
「孵化させて、飼おう。卵を産ませて食べようぜ」
「そんなことが!?」

仰天する男に対し俺はウィンクしてみせた。

17．ぴよぴよぴよ

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁかーわいいいいいぃぃよぉぉぉぉ……！」

一週間後。十個の卵のうち、半分が孵った。半分は孵らなかったので、だめなんだろうなと思う。

弱火にした焚き火の傍に卵を置いて、一日三四回程ひっくり返し、卵の表面に水気を……という地道な作業が実を結んだようだ。俺が一晩中張り付いているわけにもいかないので、子供を何人か連れてきて交代で面倒を見たのだ。もう半分だが、子供たちに任せてもう一週間様子を見ようと思う。ダメなら茹でて食べちゃおう。

『ぴよぴよぴよぴよ』

俺特性の木の囲いの中で、五羽の雛たちが身を寄せて鳴いている。ふわふわで、小さくて、まるで綿毛に足が生えているみたいだ。無邪気に光る黒い目は、俺のことを見つめている。孵化したときにばっちり俺の姿を見せているので、俺のことを親と思っているはずである。

「ほ、ほんとうに卵から鳥を……ソーマは鳥だった？」

アキラスが愕然としている。鳥は、鳥でしか孵せない。という常識があったのだろう。

言うまでもないが俺は鳥じゃない。

「ねー、言ったろー孵せるって。半分はだめっぽかったけどな！」

「温かいところにおいて、一日何回か転がして、水気を与える……これだけでいいのか……」

「俺も専門家じゃないからわからないけど実際孵ったし、条件としては合ってるはずだ。さて、餌を作るか」

餌か。餌ね。柔らかい新芽とか、虫とか、穀物とか、貝も食べた筈だ。

いまだパンにはしていないエノコログサ粉を取り、採取してきた新芽を器の中で潰して混ぜてみる。それから水を入れておく。穀物の粉と新芽なら、離乳食（？）には丁度いいだろう。

確か鴨は、雛でも自力で餌を食べていた気がする。まあ最初なん

で、草の茎を使ったスポイトを使ってみようと思う。ポンプ部分は俺の口だがな！
「すー……ふー……」
『ぴよぴよ！』
上げてみると、元気よく食べる。みんな頭を上げて、くれくれと催促してくる。
『……』
一通りあげると眠くなってきたのか、五匹固まったまま眠りについてしまった。
ふふ。かわいい。
「餌は自分で取れるから、その辺散歩させてもいいかもしれないな……うーん悩ましい。何もしなくても俺の傍に来ちゃうわけで……というか飛ぶよなこの子ら」
慣らして餌付けすれば、逃げることはないだろう。多分。羽を切っちゃうか？　鳥というのは風切羽と呼ばれる部位を切ると、飛行能力が著しく低下して長く飛べなくなる。しかし、いざというとき逃げられなくなる。
「いいや、しばらく俺が付きっ切りで面倒見るよ。アキラス、他の仕事お願いできないかな？」
「わかった。ブドウと、あのへんな草の種を撒けばいいんだな？」
「そうそう。溝を作って、一定間隔空けて植え付けて欲しい」
「なんかあったら呼んでくれ」
アキラスは俺の傍で農業のやり方を見て学んでいるから、任せても大丈夫だろう。というか任せるしかないのだ。
俺はアキラスが外に出て行ったのを見つつ、雛たちの傍に腰掛けた。
「そろそろいいかねぇ」
ベリー酒の塩梅を確認しようと、壷に指を突っ込んで、舐めてみる。アルコールの風味がする。発酵しているということは、酵母があるということだ。加熱処理はしていないので、酵母は死んでいないということだ。

「ふふふ……今日はパンを食べるぞ！」
今日こそは、カチカチのパンもどきではなくふわふわのパンを食べるんだ。その為に、竈というには小さいが、それっぽいものも粘土で作ってあるのだ。
エノコログサの粉末を器に移して、水を加えて練り上げる。石版の上で伸ばして叩いて、ベリー酒を入れる。
「……形、形か……」
パン生地をこねつつ、どんな形にしようかと思いを巡らす。
パンで思い浮かぶ形状はやはり――――コッペパンだろう。形を整えて、しばらく寝かせることにする。保温が必要なので焚き火に近づける。
あとは膨らむのを待つだけだ。とりあえず今晩は無理だろう。明日食べられればいいな。膨らめばの話だが。
「さーて次は……」
次は、炭を作ろう。と言いたいところだがパスである。
今日一日仕事で疲れたので、まったりとするか。乾燥タンポポを取り、草の繊維のフィルターに包んで土器コップにお湯を汲んで、抽出する。
地面に寝そべって、コーヒーを啜る。
「ううん、コーヒーの味だなぁ……カフェインぽさがないのが残念だけど……アキラスも飲めばいいのに苦いから嫌いだなんてもったいないぞぉ」
原始時代にいるのにコーヒーを飲んでくつろげるとは思っていなかった。パンも作れそうだし、なんならソーセージも作れそうだし、卵も手に入りそうだ。イギリス流の朝食も夢じゃないんじゃないか？　あ、豆がないや。
後は、ミルクと砂糖が欲しいところだ。サトウキビか、テンサイの仲間でも見つかればいいな。大人しい牛がいればいいな。想像は膨らむばかりだ。
「……いや、いやいやいや」
俺は身を寄せ合って眠っている雛を見て首を振った。

大きくなれば食べられるよなという考えが脳裏を過ぎったからである。かの有名な合鴨農法も鴨は食べられてしまうらしい。鴨肉はとてもおいしいので選択肢としてはアリである。

食べてもいいんだけど……食べてもいいんだけど……！　手間暇かけて孵したこの子達を食うのはしのびないというか……!!

いまさらになって思い出したが、カモはニワトリのように頻繁に卵を産んでくれるわけではなくて、産卵期が決まっている。卵をコンスタントに食べられるというわけではないので、つまり、その……。

畜産業の人たちって神か？　神なのか？　出荷することを考えると気が狂いそうだ。もう足を向けて眠れないだろ常識的に考えて。この世界にいないけど。

「今日のご飯作るか」

アキラスが帰ってくるからね。嫁のように作りますよっと。

「誰が嫁じゃい！」

一人で突っ込みを入れつつ、食材を考える。

料理も案外楽しいもんだ。一人飯じゃつまらないけど、誰かが食べてくれるならなおさらだ。

ということで俺は早速、今日取れたばかりの魚に手を伸ばすのだった。

１８．男女男男女男女

夏が来た。というのは俺が独自につけている暦で季節がやってきたというだけで、ぜんぜん暑くない。体感だが２５度もいってない。日が落ちると２０度を余裕で下回る。真に残念ながら、米作りには適していないのではないかと思う。

現状を報告しておくと、今のところ死人は出ていない。死に掛けたのは何人もいるけどな。たかが風邪と侮るなかれだ。風邪人が出たときは俺の家で隔離して、俺が治療をすることにしている。死なないし。その間アキラスには迷惑をかけるが止むを得ない。

つまり人口は増えていないんだが、ぼちぼちと各家庭、異邦人組にも妊婦が出てきていて、今年の終わりか来年の始まりくらいには新しい命が生まれることだろうと思う。農業の成果はまだ出ていないが、生活が安定してきたことで子供を作ろうという気になったのだと思う。

さて農業だが、種を撒いた、エノコログサ、ベリー、ブドウ、麻、どれも芽が出た。

一番早かったのはエノコログサだ。成長が馬鹿みたいに早いので、秋には収穫できるだろう。というか本当にエノコログサなのか？俺の知ってる草と比べると、房が大きいというか……。

次に早かったのは麻だ。こちらも成長速度が驚異的で、半端ではない。一月で俺の背丈を追い越すくらいに成長している。秋を迎える前に収穫できそうな勢いである。雑草を抜いたくらいしか世話をしていないんだが、いや、たくましいな。

他の種は、まだ未成熟だ。当然だがベリーの木、ブドウの木は実をつけるまで時間がかかる。気長にいこう。

畜産だが――まあ説明するより見てもらったほうがいいな。

『グアグアグア！』

俺が川にザブザブと入っていくと五羽のカモ達がついてくる。たった数ヶ月で成鳥と見間違える程にでかくなった。

これなら卵も産んでくれるなと言いたいところだが問題があってな。
『……？？？？　どこをどう見ればいいんだ？？？』
オスとメスの区別がつかない!!
哺乳類は分かりやすい。股間を見ればいいからだ。一方鳥類は股間を見ても突起物がなかったりする。突起以前に、性器と排泄口が一緒だったりする。捕まえてひっくり返して調べたけど正直分からない。セキセイインコみたいに鼻の色を見れば分かるとかにして欲しいです。
ま、まあ、全部オスでしたとかメスでしたということはない。はず。信じたい。確率的に半分半分だろ。
俺が水に入ると、カモたちもついてくる。俺が行く場所行く場所どこまでもついてくるし、一緒に寝る。大人になったら離れるかもしれないけど、慣らしてれば犬みたいに懐いてくれるはずだ。
「そら、魚おるよ。捕まえてごらん」
『グアグアグアグア!!』
カモたちは俺が言わないでも餌を取ってくれる。こうして一緒に水に入って、小魚も取れるように訓練したみたりもするのだ。
「この辺貝とかいそうだよねぇ」
『グア』
「そ、土抉って抉って。よしよし」
『グァッ！』
一羽が俺の肩に登って機嫌よさそうに鳴く。おお可愛いやつめ。他の子は、くちばしをスコップのように使って泥を掻き分けて貝を食べている。
俺がカモと遊んでいると、人影がやってきた。毛皮を腰に巻いている。
「ソーマ。ここにいたのか。手が足りない。手伝ってくれ」
「いくいく」
俺は手早く水から上がって毛皮の服を着込むと、サンダルを履いてカモを伴って歩き始めた。

全裸でも恥ずかしくない習慣の人たちなので、多少胸が見えようが構いはしないんだが、アキラス相手だと何故か恥ずかしいんだよな。
ちなみに毛皮だが、一ヶ月あれこれ試した結果、なめせるようになった。植物の灰汁――――タンニンにつけてみると上手くいくことがわかった。いやクロムとかミョウバンを使うのは知ってたんだけど、そんなもん手に入るわけねぇだろ。ということで伝統的な方法を探して、やっと見つけたのだ。
「はー、しかし皮なめしがこんなに大変だとはなあ」
問題があるとすればクソがつくほど手間がかかることだ。まず動物を仕留めたら解体する。骨と肉を取る。皮の裏についてる肉や組織をそぎ取る。タンニンで一週間程つけこむ。乾かす。燻す。油を塗る。と、一着作るのに気が遠くなる作業が必要なのだ。
やはりダウンだな。ダウンを作ろう。住民全員に毛皮はやりすぎだ。麻が出来たら羽を編みこもう。子供たちには先行して葉っぱの服に羽をつけているけど、大人用も作ろう。
ダウンか……。
『グワ』
つぶらな瞳が俺を見上げている。
だめだ！　殺せない！　無理無理！　無理ですって!!
「まさか植物の汁につけこむだけで腐らなくなるとは……」
「手間はかかるけどな」
村が見えてきた。村人たちが今日も元気に作業をしている。あるものは土器を作っているし、あるものは畑でせっせと雑草を抜いている。あるものは切り倒してきた木を石斧で薪にしている。あるものは採取してきた木の実を検分している。
「人手がたらんなぁ」
「更に遠くに探索隊を送るべきだと思う」
俺が言うと、アキラスが返してきた。
無から人を生やすことはできないので妊娠出産を待つしかないんだが、人手として使えるようになるまでには時間がかかってしまう。外の人を連れてくるのが一番だろうな。

俺がそんなことを考えていると、なにやら騒がしい。
「神様ー！　大変だ！　また外から人が来たぞ！」
ばたばたと男がかけてくると、俺の前で止まった。またか。いい兆候だ。
俺が村人に案内されて行ってみると、髭もじゃの男五人が地面に座り込んでいた。老人のようだ。
「おお、あんたは……夢で見たお方……」
「ソーマだ。この〝村〟の長で神様やってる。あんたらはどうしてここに？」
老人たちは俺のことを拝み始めた。
また夢か。夢で俺の事を見るとでも言うのか。
「夢で……あなたさまの姿を見たんじゃ……こっちに行けば会えると……」
言葉を紡ぐのも辛そうに俯いてしまった。
見れば体は傷だらけだし、痩せ細って血色も悪い。詳しい事情はあとから聞きだすとして、治療しないといけない。
俺はかがみこむと、おじさんの手を握った。
「わかった。俺たちはあんたたちを歓迎する。みんな！　俺の家まで運び込むから、手を貸してくれ！」
「また、受け入れるんだな」
アキラスがぼそりと言いながら老人を抱き上げる。痩せているせいか、軽々と持ち上がる。
「慈善事業でやってるわけじゃないぞ。年寄りってのは長生きしてる分、色々な知識を持ってる。助ける価値はある」
子供を作るのにはちと遅いかもしれんがね。その抱える知識量はあなどれないものがある。
「絶対に死なせないぞ！　絶対にだ！」
俺は言うと、老人たちを家に運び込んだのだった。

１９．鉄器への道

「……つまり年を食いすぎたから追い出されたと」
「ええ、そうなりますのう」
老人のうち四人は食事を取るとすぐにぐったり眠ってしまったが一人は話を聞くことが出来た。
要するに姨捨山である。この時代に福祉などあるはずもなく、働けなくなれば群れから追い出すのが常なのだ。かわいそうかもしれないが明日の食い物も分からない生活では、群れで養うなどとは考えられないのだ。
『グア！』
老人は周囲をうろちょろするカモを不思議そうに眺めている。野生動物を懐かせるなんて発想ない時代なので、なぜ逃げないのかと考えてるんだろうな。
「神様、この鳥は……」
「飼ってるんだ」
「飼う!?　は、はぁ、神様はワシの知らない術をご存知のようで……」
術じゃないんだけど、ここは説明もめんどくさいので省略する。
「とりあえず追い出すようなことはしないから安心して欲しい。ちなみに名前は？」
「ゾイ。ただのゾイです、神様」
「ゾイさん。いままでの旅について教えて欲しい」
いいつつ俺は、エノコログサのお茶を差し出した。
最初は家を見て驚き土器見て驚きで話が出来なかったのだが、徐々に慣れてきたのかお茶をありがたそうに啜っている。伊達に年齢重ねているわけじゃないな。
ゾイ老人の見た目は、山男といったようだ。ボサボサの白い髪の毛。ボサボサの長い髭。目は細く、肌は焼けている。
ゾイさんが、群れを追い出されるまでの経緯を語り始めた。ここから離れた痩せた土地で、少数ながら幸せに暮らしていたこと。人数が

増えるにしたがって食べるものがなくなってきたこと。娘が死んでしまったこと。年老いて群れから追放されるまでのこと。大きな山。大きな川。美しい女が手招きをしている夢。不思議な黒っぽい砂のある海岸。

「ちょっと待って。黒っぽい砂のある海岸……？」

「ここから遠くないところですかいねぇ、黒い砂の溜まった海岸があるんですわい」

……黒い砂の溜まった海岸？　気になるな。というのも砂鉄の可能性があるのだ。鉄にも色々あるが、砂のような細かい鉄が水によって運ばれ堆積するものもあるのだ。そして砂鉄は、粒子が細かいので加熱しやすく、加工しやすい。青銅器から始めようと思っていたけど、いきなり鉄器が作れるかもしれないな。

とんだ拾い物をしたものだ。ゾイ老人が話す砂鉄らしい砂の溜まる海岸の情報だけでも、おつりが来る。

「その場所、案内できるかな？」

俺が言うと、ゾイ老人は頭をガシガシと掻いた。

「ううむ、申し訳ないが疲れてしまいましてなぁ」

「わかってるよ。何日かゆっくり過ごしてくれ」

それから俺は、他の老人たちの様子を見た。栄養失調に脱水症状と外傷と酷い有様だった。うち三名は高熱を発しており、感染症であるならば隔離が必要だった。

着ていた粗末な毛皮は、汚染されている可能性もあったので焼却してしまう。お湯で全身を拭いて、傷口は、ベリー酒の蒸留で得られたアルコールで消毒だな。

「ありがとう、ありがとう……」

「その、それはいったいなにを……？」

「んー……説明してもわかんないだろうけどとにかく体をよくするものだよ」

密閉容器がありゃあなぁ……何かいいアイディアはないものか。いちいち沸かさないといけないのめんどくさいの極みだ。

俺はベリー酒で蒸留して得られたアルコールで、病人の傷口を消毒

した。止血効果のある葉っぱを宛がい、蔓で巻いて応急処置をする。
「じゃ、これ飲んで」
それから塩とベリーを混ぜたお手製のドリンクを飲ませる。
熱さましとか飲ませると返って悪化するケースもあるので、自然治癒力に頼るしかない。抗生物質でもありゃあなあ。ペニシリンねぇ、とある漫画で作っていたのを覚えているけど、そこに行き着くまでにどれだけの時間がかかるやら。
「ソーマ。調子はどうだ？」
「アキラス。三人が熱を出してる。ちょっと気になる情報もあるしな。まあ、後で話すよ。今日は看病で終わりかなぁ」
「わかった。他の仕事はやっておく」
おうおう、頼んだぞ。
俺が手を振ると、アキラスもひらりと手を振り返してくる。
「旦那さんですかね？」
「ちちちちちがわい！　誰が妻やねん!!」
ゾイ老人がにこにこ笑いながら言うもんだから、俺は首をブンブンと振ったのだった。

「おっ」
急に、密閉容器のアイディアを思いついた。
早速俺は、アキセイカ君のいる家に向かった。
「ちょっと作って欲しいものがあるんだけど」
アキセイカ君は、こねこねと人形を作っていた。どうみても俺が連れているカモである。上手いもので、写実的な形状をしている。アキセイカ君は土器作りがうまい。俺のへなちょこ器と比べて天と地ほどの差がある。
「こういう入れ物で」
「ふむふむ」
「蓋をつけたい。こういう、口の形にぴったり合うような」
俺は地面にさらさらとラフを描き始めた。とっくりみたいな形状

の器で、口の形状に合うコルクのようなものも描いていく。木のコルクでいいじゃんと思うかもしれないがコルクがないんだよ。普通の木だと蒸発が抑えられなさそうだしな。
俺が考案したのは瓶の蓋をコルクのようにはめ込む形式にして、隙間を蜜蝋でシーリングすることだ。どんなに頑張っても出来てしまう隙間を蜜蝋で埋めれば、密閉できる！　……試してないけど。
「お酒？　でもいれるの？」
「察しがいいねぇ。お酒はお酒なんだけど、ジョウハツを防ぎたいんだ」
「わかった。何日かしたら持っていく」
アキセイカ君は、作業を再開した。カモの土偶の。こういうおおらかなのが原始時代である。神様にやれと言われても、すぐにはやらない。現代人からするとじれったいだろうが、現代人がせっかちすぎるんじゃないかなと思う。のんびりと物事を進めることは、悪いことじゃない。
「なー、そう思うよなー」
『グア』
俺の後からついてきた五羽がアキセイカ君の周りをぐるぐる歩き回っている。人間を親と思って育ってきたせいなのか人間に恐怖心がなく、はばかることなく好奇心をむき出しにしている。
「よーしいくかー。みんなが待ってる」
『グァグァグァ！』
俺はカモたちを連れて、自宅に戻ったのだった。

２０．収穫の秋

秋が来た！

恵みの秋である。秋こそ俺が待ち望んでいた季節であり、村の食糧事情が劇的に改善するであろう時期である。待ちに待ったエノコログサと麻、ドングリの収穫である。ベリーは、実をつけてもおかしくない大きさまで成長したんだが、ほとんど実はつけなかった。来年を待つかね。ブドウだが、木と呼べる大きさではない。あと何年か時間を要するだろう。

「こ、これが全部食べ物なのか……」

今日は収穫の日である。ふさふさに実った黄金(？)の畑を前に、村人達が顔を綻ばせている。流石雑草(という草はないが)、生命力が段違いだぜ。俺の想定していた通りに成長してくれた。来年の種まき分を確保して、残りはどうしてくれるか。エノコログサのパンだが、ベリー酒酵母を使って一晩寝かせれば『まあまあ』な柔らかさのパンになることがわかっている。ふわふわにはならない。

『……!?　こんなものは食べたことがない……！　ふわふわとしていて、柔らかくて……ほのかに甘みを感じて……！』

アキラスに食わせたら迫真の表情で驚いてくれたけどな。研究を重ねて、ふわふわのパンを作りたいもんだ。

「よーしみんなで収穫するぞー！　石包丁は持ったなー？」

『おおー！』

俺が石包丁を掲げると、みんな一斉に石包丁を掲げた。効率を考えるならば鎌があるべきだろうが、金属器はまだ未導入だ。各家に配布した隕石の火打ち石を金属器といえるなら話は別だが。まずは食糧事情を改良しないことにはな。ゾイ老人の言う『黒い砂』が気になるけど、あれもこれも手を伸ばせるほど人的資源に余裕がない。

俺は一番槍をとった。茎に手をかけて、石包丁で擦りつつ引き抜く。エノコログサを背中にしょった籠に放り込む。そして次である。

わいわいと、和気藹々と作業開始である。ちなみにカモ達はお留守番させてある。穂を食べてしまうので。食欲旺盛すぎるのも困った

もんだ。
「やりにくいね」
　レイ家の長男、ひょろひょろとした体つきの長髪のアスレイ君が穂を刈り取りながら呟いた。手先が器用だけあって、サクサクとやっているように見える。
「金属が作れるようになれば鎌っていう道具が作れるんだけどねぇ」
「キンゾク？　鎌？」
「火打ち石ってあるでしょ。あの石を火で熱していくと、金属っていうものが水みたいに溶けてくるんだけど、それを型に流し込んで固めると、鋭くて頑丈な道具が作れるんだよね。例えば石包丁じゃなくて、もっと鋭い金属の刃とか」
「……すごい!!　そんなことができるの？　神様？」
　アスレイ君が目を輝かせる。好奇心旺盛でいいことだね。
　俺はサクサクと刈り取りを続けながら答えた。
「できるよ。いずれはやってみたいねぇ。今はできないけど、やるときは、アスレイ君も頑張らなきゃ」
「どうして？」
「金属だけで道具を作るってことはなくて、金属と木を組み合わせて作ることが多いんだよね。だから金属の道具を作るとなったら、アスレイ君の木も使うことになるんだ」
　金属製品というものは、金属単体で形状を形作ることは稀だ。日本人なら誰でも知ってるであろう日本刀だって柄の部分まで金属で作ったりしてないだろ？　鎌を作るなら、持ち手は木になるはずなのだ。
「そうなんだ！」
「そ。頑張って、木の加工に慣れていて欲しい」
　俺はアスレイ君の頭を撫で撫でしてやった。
　慣れて欲しいとは言ったが道具がね、石器しかなくてね……石器しかないのに、やれお玉やらスプーンやらフォークやらを作ってくれているアスレイ君は、よくやっていると言える。早いところ鉄か銅の道具を作ってあげたいな。

村人総出でやっているので、刈り取りは意外と早く終わった。昼にすらなっていない。もっとかかると思ったんだけどな。人手がもっといれば畑も大きくできるんだけど。
「じゃー次は乾燥させようかー」
俺たちは、協力してエノコログサを倉庫として作ってあった竪穴式住居前へと運び込んだ。エノコログサは米のように茎が長くないので、稲架掛けが難しい。そこで稲木（稲じゃないが）から、茎を結んでぶら下げてみることにした。
これも大勢がわいわいと群がってやるので、中盤くらいから俺は見ているだけだった。
「よし！」
昼過ぎくらいには、作業が完了していた。あとは様子を見つつ、乾燥させる。米と同じやり方でいいんかね？　まあ麦も乾燥させるわけなので、やり方として間違ってはいないはずだ。
俺は次に、麻の収穫を見に行くことにした。収穫といっても、３ｍはあろうかという麻を、大雑把に切り倒すだけである。切り倒す係りと、種を取る係で人手を分けて作業する。種は、来年に備えての種籾の分と、食べる分に分別させる。
麻の実はナッツのような味がしておいしいらしい。油も絞れるらしいんだが、どう絞るか。圧縮すればいいの？
「んー、こんなに人はいらないかなぁ」
見ていて思ったが、村人総出でやるほどの作業には感じられない。切り倒すだけやしな。
「アキラス。何人か残して、あとは他の作業をしてもらってよ」
「わかった」
あとの作業とは、ドングリ拾いである。
ドングリの木は、周囲の木を切り倒して雑草を取って世話したお陰なのか、前年を遥かに上回る収穫が得られた。放っておくと動物に食われてしまうので、片っ端から回収する。
「ふふふふ……」
帰って来た村人の抱える籠には、これでもかとドングリが詰め込ま

れていた。これで冬の間、食べるものに困らなくて済む。
さて収穫はこのぐらいだろうか。農業というのは収穫して終わりではない。特に、俺たちのような自給自足生活のものにとっては、ある意味ではまだ終わりではない。
エノコログサは、乾燥、脱穀という作業が。麻は、乾燥させて、繊維をほぐして糸にして、服にするという作業が。麻の実を分離する作業もある。ドングリは……とくにないか。
一番時間がかかるであろう作業は、麻の繊維をほぐして糸にして服にする一連の流れである。気の遠くなるような時間が必要だろうな。
ああ！　人手が欲しい!!　大人が突然ボンと増えたりしないかな！　探索隊を送って、周囲に人がいないか調べないといけないよな！
あ、でもこれから冬になるじゃないかよ。どうすればええんや。
「うむむむむむむ」
だめだね。考えがまとまらない。こういうときは、家に帰るに限る。
「ほほほ。かわいいもんじゃの」
ゾイ老人が、俺の家でカモの世話をしてくれていた。カモたちは人間慣れしていて、村人たちにもよく懐いている。
立派な成鳥だ。羽毛を取るにはうってつけだが。だが……！
『グアグアグア！』
透き通った瞳で見つめられてしまうと、殺すというビジョンが思い浮かばなくなる。野生のイノシシとかシカは殺せるんだけど、情が移ると、殺せなくなる。
「神様、ほんとうにありがたいわい。ワシのような老人を追い出さないなんて、女神様と呼ぶべきかの……」
「ああ、けど」
「言わないでおくれ。あの三人は手遅れだったんじゃ……」
村にやってきた老人五人のうち、三人は到着後数日で亡くなってしまった。二人は高熱で痙攣を起こして死亡。一人は胸を押さえてなくなってしまった。死体は、この時代の主流である土葬ではなく、火葬にした。感染症の観点からは、火葬が一番だ。

こういうとき、医学に関する能力が欲しいと思う。神様がいるならチート能力を与えて欲しかった。いや不老不死はチートなんだけどさ、他人を救うという観点から見ると使えそうで使えないぞ。
「神様。あんたはどこでその知恵を学んだんじゃ」
ゾイ老人が訊ねてくる。説明しても理解してくれないだろうな。
俺はカモが頭の上によじ登ってくるので、好きにさせてやりつつ胡坐をかいた。
「勝手に知恵が降ってくるというか、思いつく感じかな」
「ワシは年寄りだが、神様、あんたの知恵は思いつきもせなんだ。胸が高鳴って仕方がない。この老体がどこまで持つかはわからんが使ってやってくれ」
「うんにゃ、ゾイさんの鑑識眼は凄いからな。子供たちに色々と教えてやって欲しい」
長く生きてきただけあって、ゾイさんのものを見極める能力は底知れない。野草や果物のどれが有毒で、どれが食べられるのかを知っている。食糧事情の改善に一役買ってくれることだろう。
「頼りにしてるよ」
俺は笑った。

21．ぬいぬい

あらかた収穫が終わった。加工作業はまだだ。

「そうそう、剥いて、可能な限り、細く剥いてね」

俺は麻の繊維を解す作業を子供に指導していた。こういう細かい作業は子供の小さい手が似合うね。

繊維を解して、繊維同士を寄り合わせると糸になる。糸を編むと、布になる。この寄り合わせる作業が途方もなくめんどくさい。

「これ、楽しいね」

「えーめんどくさいよ」

意見が大きく分かれるのをやむをえないな。いつまで経っても終わりが見えないからな。

とにかく時間がかかる。現代の紡績機（糸を作る機械だぞ）が偉大な発明品であると言われるのがよくわかる。

冬に間に合えばいいんだが。まあ毛皮をなめす方法が判明しているので、頑張れば全員に毛皮が支給できそうな……狩りが上手くいけばな!!　なめしが間に合えばな!!

が、それよりも前に、作らないといけないものがある。石鹸である。

なんで石鹸かと言うと妊婦のためである。現在の人口は大体３０人くらいであるが、妊婦が出てきているのだ。外から人を連れてこられる確証がない以上、自然増加を高めたいところだ。

この時代の妊娠出産は過酷である。詳細なデータは記憶にないが、死産の可能性がだいたい１５％くらいだったと思う。この時代を現代に近づけるためには、やれることはやらないといけない。すなわち栄養状態の改善と、衛生の徹底だ。栄養状態は、農業が成功したので改善傾向にあるだろう。アルコールは蜜蝋でシーリングした壺に保管できるようになったので、あとは石鹸であろう。

俺はその場を離れ、自宅に戻った。角丸四角形の型を覗き込んでみる。液体のままの石鹸があった。

「やっぱりかたまらねぇ……」

動物の油に木炭の灰を混ぜてみた試作品の石鹸だが――――いつまで経っても固まらないのだ。石鹸としては出来ているようで、試しに手を洗ってみたが綺麗に汚れが落ちた。だが俺が欲しいのは固体の石鹸なのだ。

油と、アルカリ性のソーダだとか灰の上澄みを混ぜればできるはず。原理として間違っていないのは、石鹸が出来ていることから明らかなんだが、液体石鹸はこの時代じゃどうにも使いにくくてな。壺に入れて持ち運んでこぼしちゃいましたじゃ労力に合わない。

「むむむむ……なんで固まらないんだろうなぁ。間違ってないんだけどなぁ」

俺は出来上がった液体石鹸を眺めて呟いた。これはこれで使わせて貰うけどな。

「んー……どう思うよ？」

『グァ？』

俺は、カモを両手で包むように抱っこすると、膝の上に乗せた。ふわふわとして気持ちがいい。

「灰の種類が違うのかな？」

俺が使った灰は、木の燃えカスである。

灰は灰でも、違う灰があるのか？

『グァ』

「ん、だめだぞ。それは出汁をとる用だぞ」

カモの一羽が天井から吊るしてあるコンブを突こうとしたので、手で阻止する。

「……コンブ、海藻……」

海藻は、あるいは灰の成分が違うかもしれない。

食用にとっておいたそれを、器の上で燃やして灰を作る。続いて、水を混ぜて、上澄み液を取り、をくりかえすべきだろうが試作なので簡単に、獣の油とかき回して、石鹸型の土器に流し込んでみる。

「一晩待ってみるかね」

結果が楽しみだ。

「薪を燃やすんで？」
俺は村の中心、岩の傍まで来ていた。燃料が岩の傍に積まれている。狼煙を維持するのに、異邦人組の男を一人呼んできた。
周辺に人を送らず、人を集める方法について以前から考えていたのだが、狼煙をあげてみようと思う。現在、各家庭の焚き火では家屋に煙が遮られてしまって、狼煙にはならない。煙を上げることができれば、周辺にいる人間が存在に気がついて寄ってくるかもしれない。
「薪も燃やすけど、生木と葉っぱも燃やす。狼の糞があればよかったんだけど。煙をあげて周辺の人を呼び込もうと思うんだ。そうそう、薪はした。生木と葉っぱは上に被せるようにしてもらって」
忍者曰く狼の糞を使うと狼煙がまっすぐ上がるとか。狼がいないけどな！　犬もいないしな！　ようは燻らせればいいので、油分と水分が多そうな木を選んできて貰った。
男が俺の指示で燃料を組みつつ言ってきた。
「神様、人を集める必要はあるんですかね。寄ってくる人が善人とは限りませんぜ」
「そうね。ありうるね」
所有の概念の薄いこの時代に盗賊はいないだろうけど、好き放題してやろうとする輩もいるはずだ。
もしそうなったとき、俺は人を裁かなくてはいけないかもしれない。
「それでも人を集めておきたい。もっと、生活が楽になるから」
俺はそういうと、男が狼煙に火を灯すのを見ていた。パチパチという音。薪が爆ぜる音。ゆっくりとだが熱量があがっていき、白煙が昇りはじめた。
目的ね。俺が不老不死なんだとすると、永遠に豊かさを追求することになるのかね。幸せってなんだよ？
「神様ぁぁぁぁっ!!」
「早い、早いよ!!」
つけて数分経ってないのに村人が走ってきた。ちょっと早すぎなんじゃないかね？

男は息を整えんと深呼吸をしてから声をあげた。
「うちの嫁が転んで足をざっくり……切ってしまってぇッ!!」
「ＯＫ、家に連れてきて」
怪我人が出たらしい。しかも足を切ったと。この時代の治療法としては、放置しておくことだが俺は違う。たかが傷と侮るなかれ。破傷風でも起こそうものなら死まっしぐらだ。医者ほど知識があるわけじゃないが、感染症を防ぐ方法ならわかっている。
自宅に走っていくと、早速治療の準備に取り掛かる。アルコールよし。骨を削って作った縫い針――曲がった針だ――を、お湯の中に入れて煮沸消毒する。次に糸だが、髪の毛を使おうと思っていたけど、ここは最新技術である麻の糸を使う。これもお湯に投じる。
「神様、連れてきました！」
「おし、そこに寝かせろ」
「何事だ？」
「アキラスか。これから傷口を縫うから見てて」
「傷口を……!?　縫う!?」
アキラスが騒ぎを聞きつけてやってきた。
俺は寝転んでいる怪我人の様子を見た。足の怪我以外は特に損傷がなさそうだった。脛がざっくりと縦に切り裂かれてしまっている。
「みんな彼女をおさえてくれ。暴れるかもしれない」
集まってきた面々が怪我人の手足を押さえた。
俺はまず水をかけて傷口を洗った。異物を洗い流すためだ。次にアルコールを葉っぱにつけると傷口を拭った。
「～～～～～～～ッ!!」
激痛が走ったらしく暴れる。耐えてくれ。
傷口の様子を観察する。比較的鋭い石で切ったらしく、刃物で切りつけたような傷だ。皮下組織まで深く切っているわけではない。
麻の糸を針に通して、傷口の縫合を始める。ピンセットでもあれば楽だったんだが。本業の医者と比べれば笑いたくなるほどの拙さだが、ようは傷口を閉じて病原菌やウィルスが侵入できなくすればいいのだ。

「痛い……！」
「耐えてくれ！」
苦痛に怪我人の女が泣き始めた。手早く終わらせないと。
傷口の対岸に針を通して、対岸の淵にかけて……。
「人を……人を縫っている……！」
「なんという……」
女を押さえている男たちが唖然としている。縫うという概念は、毛皮の加工の時にみんな知っているがまさか人間を縫い始めるとは思ってなかったのだろうな。
「難しいな……」
手先が震える。人間を縫っているなんて、俺だって信じられないよ。
空洞を作らないように、慎重に。針の大きさが気になるね。金属製品が作れるようになったら、もっと繊細にできるんだが。
「みんな見ておいて欲しい。俺よりも手先が器用な人がいたら、今後はその人にやってもらうことになるから」
『……』
誰一人返事をしてこなかったが、俺の作業を見守ってくれているのはわかった。
俺よりも器用な人がいるはずなのだ。その人を医者にしたい。もっとも、外科手術は俺の専門外のことなので、動物を使って実験することになるだろうが。
傷口を締め上げて、最後は焼けた木炭を近づけて麻を焼き切る。それから止血効果のある葉っぱを宛がって糸を巻く。完成だ。
「できた」
「ありがとうございます……」
「毎日必ず水で洗ってね。それから痛み止め出しておくから」
俺は壷の中から丸薬を取り出した。鎮痛作用のある薬草を丸めて干したものだ。
経過観察して化膿しないかを見ないといけないな。うまく処置できたならよかったんだけど。

２２．最強嫁計画

「お前、俺の嫁になれ！」
「えっやだ」
どうしてこうなった？
俺は村から離れた位置にあるキャンプにいた。
ある日のことである。俺が薬草を取りに出かけたところ、大勢の男たちに囲まれて力ずくで連れてこられたのだ。で、長らしい黒髪のガキに開幕一番で嫁になれ宣言をされている。きらきら光る青い瞳が憎たらしい。
人数は大体２０人弱くらいだろうか。粗末な毛皮の服を着込んだ男と女の集団である。
そうだった。というのもこの時代、気に入った女がいたら誘拐してきて結婚するというのも珍しくなかったのだ。俺が狼煙をあげたことで村が目に留まり、たまたま俺のことを気に入ったこのガキが指示に、取り巻きが事に及んだということだろう。
参ったな。俺はその日たまたま採取に出かけていた。夕方にまでは戻ると言ってあるけど、逆を返せば夕方まで誘拐に気がつかないわけで。幸い方角はわかっている。狼煙が上がっているからだ。
こんなことやってる場合じゃないぞ。念願の新米（米じゃないが）の脱穀が待ってるんだ！
「なんで俺なのん……？」
見た目か。見た目なのか。超絶美人にしてもらったけどさあ、この時代でも美人とは限らないぞ。というにも美人というのは文化が決めることであって、いついかなる時代場所においても美人という人間は存在しないのだ。美人の基準のうち、もっとも古いと思われる基準は『健康』である。健康であれば、子供をたくさん産めるからだ。
その黒髪のガキは堂々と胸を張っていった。
「お前よりでかい胸に肉付きのいい健康的な体の女を見たことがないからだ！」

「あっ、そういう」
肉付きがいいほうが健康的で豊かな印であるという考えは、実は珍しくなかったりする。だけど本人を前にしてでかい胸の女扱いはねーだろ。尻もでかいぞ。
「嫁になれ！」
「やだ」
「なんでならないのだ！　このエアセナ様が求婚しているのだぞ！」
「ちなみにエアが名前？」
「エアだ！　セナ族の長である！」
あっ、この部族もファミリーネームという概念はあるのね。
じゃなくて。
いきなりの嫁になれ宣言は俺も流石にねぇ。アキラスも待ってるし……いやアキラスの嫁になるのは確定じゃねぇよ!?
「エアセナ君よお、ちとお訊ねしたいんですがね、俺を誘拐しておいて嫁になれってどうなのよ」
「不満か？」
溢れ出るお坊ちゃま臭。群れの連中がまた始まったよみたいな顔をしているので察するね。ボンボンなのかな。
「ならば弟と結婚しろ！」
言われてとことこ歩いてきた弟の、幼いこと。十歳もいってない。この世界基準だと結婚できるのかもしれんが、俺の基準だと学校に通ってる子供である。
「えぇぇぇ……エアセナ君さぁ、提案があるんだけどさあ、うちの集落に来ない？」
「シュウラク？　ふふん。シュウラクが何かは知らないが、どうせ火も使えない連中の集まりなのだろう！　俺はなんと、火を生み出す術を編み出した一族の長なのだ!!」
「へー、木に木を押し付けてこすり付ける方法でしょ」
「な、なぜ知っている！」
仰天するエアセナ君。表情がころころと変わって面白い。
というか、アキラスたちの群れも知ってたんだよなぁ。方法はまっ

たく同じだったけどな。今は隕石の火打ち石でつけてるけど。
木に木をこすり付ける往復摩擦法は体力のあるものじゃないとつかない。俺が今からやろうとしている方法は比較的簡単に火が付く。回転させる棒に穴の空いた円盤状の石をつけると、もっと簡単だ。慣性力を使えるからな。
「もっと簡単につける方法があるよ」
「ふん。どうせ、力強くやるとかだろう！」
俺が言うとエアセナ君が拗ねてしまった。自力で発火法を編み出した一族出身というのは凄いと思うけど、だからと言ってエアセナ君が凄いわけじゃない。
俺はまず、弓なりになっている枝を探した。程なくして見つかったそれの両端に蔓を巻き付けていく。
「お、サンキュー」
「オイ！　俺の家来だぞ！」
「あ、家来って概念があるのか……」
群れの一人にお願いして凹みのある石と、真っ直ぐで頑丈な棒を持ってきて貰ったのだ。エアセナ君が涙目になっておられる。
弦に棒を一回絡ませて、棒の上は石で、下は木で。木の板はツルツルしているものではなくて、ざらざらしていて柔らかい方がいい。
「んで、この弓の――――棒から伸ばした蔓に棒を絡ませて、棒の上を石で押さえる！　そして動かしていくと」
さて、上手くいくといいんだが。失敗しちゃうと俺が痛い女になるのでな。
擦る！　擦る！　擦る！　擦る！
「も、もう煙が出ているだと……！」
早速煙が出てきた。
「火口よろしく」
「ぐぬぬうううううう！」
エアセナ君が悔しそうに両足を交互に地面に打ち付けていたが、俺が急かすと肩を落として走っていった。数分後、鳥の巣を持ってきた。わかってるじゃないか。

「こうして、こうして、手で風を送って」
火種が出来たので、慎重に鳥の巣を被せて、風を送る。空を仰ぐように持つと、息を吐きかける。
「できた!!」
急に手が熱くなった。鳥の巣がメラメラと燃えている。
俺は火を群れの連中が用意してくれた枯れ枝の間に差し込むと、後は任せることにした。
「……こんな道具、俺は知らないぞ！」
「ということだ」
めちゃくちゃ悔しそうなエアセナ君。面白いなぁ、からかいたくなるなあ。
「ようは摩擦で熱を発生させられればいいので、あっ、断熱圧縮を使ってもいいか。ファイアピストンも作りたいよねぇ」
ファイアピストンとは、空気が圧縮されると熱を発生させる原理を利用した発火装置だ。火打ち石よりお手軽に火口に着火できるので、作ってみたいところだね。問題はシリンダーとシリンダーの空気漏れを埋めるものを見つけないといけないことだ。
「??????」
「ふふふ……とまぁ、こんな感じだね」
「お、おもしれぇ女なのだ！　嫁になれ！」
「やだ」
「と゛う゛し゛て゛な゛の゛た゛!!」
地団駄を踏むエアセナ君。これがあれか、セナ足ってやつか（違います）。
面白い女認定を受けたところで、なんとかエアセナ君を村に引き込めないかを考えてみる。本人の技術や能力は知らないが、２０人くらいの人数を纏め上げる胆力があるならば、是非欲しい。本人がうんとは言わなさそうなところが問題なのだが。
「アライさんうちの村こない？」
「アライさんじゃないのだ！　エアセナだぁぁぁぁっ！」
「エアセナぁぁぁぁぁっ！　大変だ!!」

俺がエアセナ君をからかっていると、どたばたと男が走ってきた。
肩で息をしている辺り、相当急いでいたと見える。
「メルセナが川で溺れて息をしてないんだ!!」
「なんだって!?」
エアセナが全力で走り始めた。俺も後から続く。
川辺につい今しがた弟と紹介されたメルセナ君が寝そべっており、
傍らの男が頬を叩いていた。
「そんな！　そんなことがあってたまるか!!」
エアセナ君がメルセナにしがみ付くとわんわんと泣き始めた。
「こんなところで死ぬなんて!!　起きろよぉおおおっ!!」
俺は傍らで黙っている男に声をかけた。
「ついさっき、助け出したんだな？　まだ時間が経ってないんだな？」
「そうだが……」
やってみますか。やってみる価値はある。
俺はエアセナ君の肩に手をかけた。
「俺に任せてくれ」

２３．ファーストキスとしてはノーカウントだ！

心停止している人を助けたことはない。だがやらないと、どんどんと生存可能性は下がっていく。５分を過ぎると生存確率ががくっと下がる。すぐに取り掛かろう。

意識があるかどうかを確認する手順は飛ばす。口に耳を近づけて呼吸の有無を確認。なし。胸とお腹を観察する。動いていない。呼吸していないということは、ほぼ確定で心停止状態だろう。

「何をしているのだ!?」

「黙っておいてくれ。弟を助けたいんだろ？」

エアセナ君が戸惑いながらも疑問を投げかけてくるが詳しく説明している暇はない。体験はやったことがあるが、本番はこれが初めてなんだ。

胸骨の下辺りに重ねた手を置いて、胸が５ｃｍ沈む強さで押し込む。間隔は脳裏で再生されている歌に合わせて……三十回!!

「ふぅぅぅぅ～～～～」

顎を上げさせて気道確保。鼻を摘み口をつけて息を吹き込む。これはキスにはカウントしないとする。

次。また胸を押して押して、息を吹き込む。

「戻ってこい！　戻って来い！　戻って来い！」

いつの間にか群れの連中が集まってきて、固唾を呑んで見守ってくれている。俺がやっていることの原理はわからなくても、助けようとしているのはわかっているらしい。

「戻れ！　はぁっ、はぁっ、はぁっ！」

息が切れてきた。しかしやめると今度こそ本当に死んでしまうので、続けるしかない。

「戻れ、戻って来い！」

「げほっ、げほっ……!!」

メルセナ君が咳き込んだ。泡交じりの水を吐き出す。息を吹き返した。起き上がろうとするので、手で寝かせる。背中を擦りながら、

俺は昔に受けた体験のことを思い出そうとしていた。
「回復体位……回復体位ってどんなだっけ？」
次にやることは回復体位を取らせることだったと思うんだが、思い出せない。なんとなく、横に寝かせて、本人の手を頭と地面の間に差し込んでおく。
「嘘だろ……死人を生き返らせるなんて……！」
「なんなんだこの人……」
驚いているというより畏怖されてる気がするけど、人命救助できたのでその旨を良しとする。
「俺の名前はソーマ。村で神様をやってる」
俺はここぞとばかりにドヤ顔をすると、ピースしてみせたのだった。

俺は合計２０名を引き連れて村に戻った。戻って早々、怒り心頭のアキラスが腕を組んで待っていたけどな！
怒りの理由も分かるよ。ちょっと木の実取ってくるからの丸々一晩帰ってきませんだからな。事故にあったのではないかと思って捜索に人を放っているだろうし。
「ソーマ。何があった？」
だがアキラスは冷静だった。俺に対し腕を組んだまま説明を求めてくる。
誘拐されましたとか言うとキレさせそうだが、嘘をつくのもよろしくないな。俺は、俺の横でふんぞり返っているエアセナ君を紹介することにした。
「こちらアイルトンセナ君」
「エアセナだ!!!」
「エアセナ君。この群れの長をやってるんだ。いやーなんか誘拐されてさー」
「誘拐だと？」
アキラスの頬がぴくりと引き攣る。キレておられる。

「エアセナ君の弟を助けたら俺の村に来てもいいって言ってくれたから連れてきた」
「はー……ソーマ、ちょっといいか」
　アキラスが手招きをしてきたのでついていく。少し離れたところで話すことになった。
「誘拐されたとかその辺りに関しては何も言うことはないが、信用できるのか？」
「命を救った借りがあるからな。大丈夫だろ」
「命を救うというのは」
「心肺蘇生法を試してみただけだよ。あ、心肺蘇生法ってのは、心臓が止まった人を生き返らせる方法だよ」
「……」
　アキラスが一生懸命理解しようと腕を組んだまま天を仰ぎ始めた。数十秒程経ってから視線を俺に戻す。
「内容は聞かない。聞いてもわからないだろうから……死人を生き返らせるなんて、やはり神なんだな……恐れ入った。死んだらそれっきりだと思ってた」
「神ねぇ、まぁ、神というなら神なんだろうけどね。正確に言うと死ってのは曖昧で、死んですぐなら蘇生できることもあるってだけの話で、やろうと思えばアキラスにもできるはずだよ」
「ふーむ……わかった、わかったよ。受け入れよう。人手はいくらでも欲しいところだったからな……」
　アキラスはやれやれと首を振ると、倉庫に目をやった。収穫した麻とエノコログサがあるところだ。麻を繊維にする作業と、エノコログサの脱穀作業が待っているのだ。２０人も人手が増えれば予定よりも早く冬前までには麻の服の生産と、エノコログサのパンを村人全員で食べられるようになるかもしれない。
「おい！」
「おう、エアセナ君なんだ？」
　俺たちが話し込んでいるとエアセナ君が好奇心を隠せない様子で辺りを見回しながら寄ってきた。

「お前、名前なんていうんだ？」
「俺か。アキラス。ソーマの夫だ」
　エアセナ君が問いかけると、アキラスが堂々と名乗った。
　名前か、自己紹介は大切だからねっておおおおおぉぉぃ!!
「妻になった覚えはないぞ！」
「よし、じゃあこのエアセナの妻になれ！」
「は？　ソーマは俺の妻なんだが？　子供を産んでくれる約束もしてるんだが？」
　……そうでしたぁぁぁぁ！
　俺が頭を抱えていると、エアセナ君が指を二本立てた。
「よし間を取って二人の妻にしよう。俺の弟も夫にしろ。まだ子供は作れないがそのうちできるようになるぞ」
　さらっと精通がまだですとバラされた弟君が哀れでならない。
　自然な流れで多夫一妻制が語られているけど、俺が妻になること前提にするのはＮＧだ。
　狩猟採取の時代は多夫多妻制であった可能性が高いと言われている。自分の血筋を残すのが大切というより、群れの存続が重要だったので、誰が誰の子供を産んでも構わない。みんなで育てようという時代だったらしい。
「ちょっと待てや勝手に妻にするな」
『なってくれないのか!?』
「声を被らせるな。ハイ！　やめやめ。とにかく、エアセナ君たちには仕事を覚えて貰うぞ。新しい家も必要だしな」
　現在の家に分散して住まわしたところで全員は収納できない。今日中にエアセナ一族（便宜上）の住む家を作らねば。無理なら差し掛け式でもいいから作らないとな。
「家！　あの大きい木と草の塊のことか!?　中に入れるんだな！」
　言うが早いがエアセナ君が走り始め、一族もぞろぞろと続く。
　好奇心旺盛だなぁ。お坊ちゃまなところがある一方で、素直な面もあるのね。
「ほわぁぁぁぁぁぁ！　暖かい！　これ、作れるのか!?」

「人手がいるけどなー。新しく作らないといけないから、エアセナ君、全員で手伝って貰うぞ」

ということで、２０名が収容可能な家の建設が始まったのだった。

この時代の家のいいところは作るのに労力が余りかからないところにある。これが石造りとかになると数ヶ月とか掛かるんだろうが、竪穴式住居はそこまで掛からない。もっとも流石に家具やらは無いし、ベッドも作れないので藁を敷いて雑魚寝してもらうしかないが、雨ざらしよりかは遥かにマシである。

かくして俺の村は人口５０人を抱えるこの時代からすれば大都市へと躍進を遂げたのである。

２４．収穫よりもめんどくさいこと

数日後。俺はレイ家を訪れていた。

「おおー扱き箸だ……」

長男のアスレイ君にお願いして、前々から作ってもらっていた道具を見に来たのだ。脱穀、すなわちエノコログサの穂先から実を落とすための道具である。千歯扱きが欲しかったんだが、ろくな工作具もないのに作れるかと言うと謎なので、まずは初歩的な道具から始めさせたんだ。

それが扱き箸だ。仕組みは簡単で二つの棒の箸を蔓でつなぎ合わせ、穂を挟み込んで扱くことで実を落とすというものだ。一粒一粒もぎ取るなんてことはしないぞ。気が狂うだろ。

扱き箸が十個。少ないと思うかもしれないが人口が５０人であることを考えると、多いと思う。大量に作ったところで従事できる人間がいなけりゃ意味が無い。

俺が道具を確かめていると、アスレイ君が不安そうに見てきた。

「どうかな神様……言われたとおり作ってみたんだけど」

「うん！　いいよこれ。よく出来てると思う！　偉い偉い！」

俺はアスレイ君の頭を撫でた。

「やっぱりアスレイ君は木の道具を作るのがうまいねぇ。これからも頑張ってね」

「うん！」

ということで俺は十人の人手を村を回って確保すると、倉庫までやってきた。エノコログサはすっかり乾いたので中にしまってあるぞ。

「じゃあこれから脱穀という作業をやってもらうから。これが扱き箸という道具ね。これを、こうして……」

集まった十人の前で俺は胡坐をかくと、エノコログサを何本か纏めて手に取り、大きい受け皿の上で扱き箸を使い実を落として見せた。米であれば筵（むしろ）の上でやるんだろうが、何しろエノコログサは実が小さいので受け皿に落とすべきと考えたんだ。後でいちいち拾わないで

いいしね。
俺の作業を見ていた面々が感嘆の声を上げた。
『おおーっ』
「一粒残さずとは言わないけど、とれるだけ取りたいから頑張って実を取ってほしい」
正直、全ての粒が回収できるとは思えないんだよなぁ。粒が小さすぎるからな。回収できなかった分はお茶にでもするかね。それか我が愛しいカモ達に食べてもらうか。
次に俺は同じ倉庫内部で麻を裂いているメンバーの様子を見に行った。とにかく麻の茎を裂いて繊維を取り出さないことには話にならない。使わせている道具は海岸で拾ってきた貝殻（研いである）である。貝殻を使い、茎から引き剥がした皮から繊維を分離させるのだ。
「あっ。切っちゃった……」
「そう、強くやりすぎると千切れるから気をつけて」
力加減にも熟練が必要だ。強くやりすぎると繊維が切れてしまう。
俺は作業している面々の間を歩きながら様子を見た。思ったよりも繊維は細く、いちいち手で細かくしなくても糸として使えそうだ。
裂いたあとは繊維と繊維をより合わせて糸にして、糸を編んで布にして、布を仕立てて服にして、あーもう作業量が多すぎるだろ。冬に間に合うのか？
「紡錘（スピンドル）の製作は間に合いそうだけどな……服がな……」
アキセイカ君に土器の紡錘を作るように依頼している。紡錘は簡単に言えば糸を縒（よ）る道具で、繊維を手でつなぎ合わせるのではなく、棒と円盤を回転させることによって（比較的）簡単に糸にできるものだ。
麻にしろ、毛皮にしろ、服というものはとにかく時間が掛かる。冬までに洋服というのは難しいかもしれない。
わいわいと外が賑やかになってきたので出てみると、狩りに出ていたエアセナ達が戻ってきていた。
農業が成功したとは言っても、まだ狩猟に頼っている部分は大き

い。タンパク質の補給源としても肉は効率的な食料だ。骨は強固なので縫い針にうってつけだし、皮は服にすることができる。油も使いどころがある。まだ試してないがゼラチン質を加工すれば接着剤にもできる。

「ソーマァァァァ！」

このうるさい声はエアセナだな。槍を担いで手を振りつつニコニコ顔で駆け寄ってくる。エアセナ一族は大きいシカを木の枝にぶら下げていた。

「でかいシカが取れたぞ！　嫁になれ！」

「ぶふっ！　求愛給餌か？」

典型的というか原始的過ぎる求愛の仕方に噴出してしまった。

俺はエアセナの頭を撫でた。

「俺を嫁にしたいならもっといい男になってからな」

「俺はもういい男だぞ！」

「その割には槍に血がついてないみたいだけど」

「ぐぬぅぅぅ!!」

地団駄を踏むエアセナくん。

エアセナの槍は、綺麗なもんだ。絶対お前が獲った獲物じゃないだろ。せめて血くらい付けてこい。

「流石というか、エアセナの一族は狩りが得意なのか」

「その通りだ。父は石投げの名手だった！　どうだ！　恐れ入ったか！」

「ちなみにお父さんは……」

「死んでるぞ？」

「そっかぁお母さんは」

「死んでるぞ？」

「ううむ」

命が軽い原始時代。エアセナ君は気にした様子無くあっさりした口調で答えてくる。

この世界というか、この時代というべきなのか、死でくよくよする人がいないんだよね。もちろん悲しむことには悲しむんだけど、後に

引きずらないんだよね。泣いて、お墓を作って、すぐに持ち直す。四十九日だ何回忌だ年単位で引っ張る現代人とは違うんだなと思う。
「狩りまくって欲しいと言いたいところなんだけど、獲りすぎ注意だね」
俺が言うとエアセナ君はぽかんとした顔をした。
動物は無限に沸いてくると思っていても、不思議ではない。
「？　なんでだ？」
「獲りすぎると、いなくなっちゃうでしょ。もし若くて、お腹が大きいのとか、小さい子供を連れていたら見逃してやって欲しい」
定住して狩りをしていくことで、その土地の動物がいなくなってしまう懸念がある。これが移動しながらの狩猟なら別にいくらとってもいいんだけど、定住生活なのでその土地の動物には限りがある。とりすぎると人間恐るべしの認識が広がって村から離れていってしまうかもしれないし。
「そうなのか……わかった。そうするように皆には伝える」
そういうとエアセナ君は一族の元に戻っていった。

25．きたぜ、ぬるりと

「それ食えるのか？」
「食えないよ！」
俺は、石鹸を手にしていた。そう、固形石鹸である。旧石器時代前に石鹸とか、これもオーパーツだよな。木炭の代わりに海藻の灰を使ってみたところ、なんと固まったのだ。よかったよ、いくらでも海岸に流れ着いてくる海藻が使えて。
この世界の人間に、衛生という概念は無い。もう少し時代が行けばケガレの概念が出てくるので、ある面では衛生の概念といえるだろうけど、その概念すらないので食事の前に手を洗うなどということはしないし、出産に携わる人間も同じである。
そう、汚い手で子供を取り上げて体を綺麗にしたりすらしないのである！　雑にへその緒を千切って終わりである。医療の医の字もないからね、仕方ないね。
「これはね、手を綺麗にするものだぞ。ちょっとやってみるか」
せっかくなので、アキラスに手を洗わせてみようと思う。川まで行くと、実践してみせる。
石鹸に水を含ませて、液を手に付けて擦り合わせる。
「水をつけるとぬるぬるが出てくるから、ごしごし擦ると……」
「よくわからないが……」
首を傾げるアキラス。そうね。手だけじゃわからんかもしれんな。とにかくやらせてみるか。
俺は石鹸を渡すと洗わせる事にした。
「こうして、こうか……ぬるぬるしていておかしな気持ちだ」
「そうそう。で、水で流してご覧。どう、手がさっぱりしてない？」
アキラスは手を石鹸で洗うと、川につけて成分を取り払った。手を水面から上げると、皮膚を触ったりしている。
「おお……確かにさっぱりとするな。このセッケンとかいうものは体を洗うこともできるのか？」

「もちろん。量産できるようになったら、毎日とは言わないが定期的に体を洗うようにしていきたいと思ってる。体を清潔に保つことは大切なことだからな」
　石鹸の量産には、油と灰の量産が必要だ。油は現状獣の肉に頼っているので量産には程遠い。油を絞れる植物を見つけなくてはな。
「で、臨月の妊婦さんとかがいるわけだけど、お願いしたいことがあるのよね」
　俺はアキラスを伴って自宅に戻っていた。取り出したのは石鹸、なめした毛皮である。
「出産の手順を変えたいんだ」
「というと？」
　俺は石鹸を指差した。
「まず、子供を取り上げる人とか、赤ん坊に触る人は全員石鹸で手を洗ってもらう」
「どうして？」
「手についている汚れのせいで病気になったりするから。赤ん坊は特に汚れに弱いんだ」
「なるほど」
「赤ん坊は毛皮で包んでおきたいね。せっかく毛皮の数が揃ってきているから。赤ん坊は体温を一定で保つようにするべきだ」
　これくらいしか出来ないのが歯痒いね。出産の時に内出血で死亡するケースも多いわけだが、俺にはどうすることもできない。医学の知識は基本的なことしか知らないからな。
　出産の際に大量出血でもしたら死ぬしかない。帝王切開をしてでも赤ん坊を救うか？　母体の死を厭わないなら、帝王切開は楽だからな。
「その石鹸というのはたくさん作れないのか？」
「詳細は省くけど油と灰があれば作れる」
「灰はいくらでもあるが油はな……」
　そこなんだよなぁ。そこがボトルネックなんだ。灰はいくらでもあるんだが、油は無い。現在の主流は獣の肉だが、取れる油の量は一

定ではない上に、臭い。長時間煮込んでからじゃないといけないのがつらい。
「ほかに油というのは取れたりはしないのか？」
「ある。麻の実がたくさん取れたでしょ。あれを絞ると油が出てくる」
麻は素晴らしい植物だ。繊維は糸に出来るし、葉っぱも使いようによっては医薬品になるし、実は食べることもできて、油も取れるのだ。
「さっそく絞ろう」
「アスレイ君にお願いせにゃならんなぁ……」
油絞りの原理は簡単だ。圧力をかけるのである。日本では板と板の間に対象を挟み、楔を打ち込むことで締め上げる形式のものが主流な時代があった。現代では、ハンドメイドの油を作る際にはネジを締め上げることで圧力をかけるものが主流だ。
「木製ネジとか無理ゲーすぎない？」
金属自体作れてないのにネジ作成は無茶苦茶過ぎる気がする。ろくな工作具もない（石器のナイフとハンマーくらいしかないぞ）のに精密さが要求されるネジを木で作れは流石に……。
梃子を使うか。楔を打ち込む方式でもいいが……。
俺は腕を組み考え結論を出した。
「いや、今年はやめよう。なにより、麻の実の量が少なすぎる」
「あんなにたくさんとれたのにか!?」
アキラスがびっくりしたのか音量を上げた。
確かに村中にいきわたるくらいには麻の実がとれたけど、油を絞ったら何リットルか作って終わりになっちゃいそうなのだ。石鹸を量産するならば、もっともっとたくさん取らねば。
「来年蒔く分以外は、食べちゃおうか。もったいないし」
「わかった。それでこの石鹸はどうする？」
「臨月の妊婦さんいたでしょ。使い方を説明しておいてもらってもいい？」
「わかった、行ってくる」
俺はアキラスを見送ると、家に戻った。

程なくして村人の一人がやってきた。手には毛皮の服がある。
「神様。頼まれていた服出来上がったよ」
「アンセイカさん！　どれどれ……」
俺はアンセイカさんから服を受け取ると、確かめてみた。貫頭衣（ポンチョみたいなもんだ）タイプの服ではなくて、長袖長ズボンの服をお願いしていたんだ。ちゃんと寸法を取っているので、作り方さえ間違わなければぴったりのはずだ。
早速今着込んでいる服もとい葉っぱを脱ぐと、革の服を着てみる。アクでなめしているせいなのか微かに植物の香りがする。ボタンを留めて、腕を広げたり足をあげたりしてみる。
――上等な服じゃないか！
「素敵ね！　暖かそうだし、みんなの分も作ってあげたいわね」
「どんどん作ってあげて欲しい。麻で布を作れるようになったしね。冬が来る前までには、大人にも服を着せたいなって」
衣食住の充実こそが、この村に必要なことなんだと思う。何はともあれ、生き残らないといけない。
俺が言うとアンセイカさんはにこにこと笑った。
「感謝してるわ。毎日食べ物に困らなくなったし、温かい飲み物も飲めるし、雨が降ってきても濡れなくなったから」
「俺一人じゃなにもできなかったよ」
本音だ。俺一人でも生きていくことはできただろうが、毎日生きているだけの寂しく侘しい生活になっていたことだろう。みんなが慕ってくれて協力してくれるから、楽しく生きていけるんだ。
「この縫い物って楽しいわね。針と糸でものを作るなんて、以前じゃ考えもしなかったわ」
「裁縫っていうんだけどね。裁縫は偉大だよ。服を作る仕事って地味だけど、とても大変で、偉いことなんだよ」
俺はその場でくるりんと回転してポーズを決めて見せたのだった。

２６．一年後

「そろそろかな」

俺はタンポポコーヒーを嗜みつつ、村人達が働いている様子を見ていた。

今年は豊作だ。地面を埋め尽くすエノコログサの海。風に波打ち揺れる様。草の絨毯の合間には、ところどころ空白がある。そこには、森を探索中に発見した『イモ』が植えられている。サトイモの仲間なんだと思うけど粘り気が無く、淡白な味なんだ。他にも、勝手に生えてきたアブラナもある。来年の春には花をつけてくれることだろう。

主食の畑の横にはようやく実をつけるようになったベリー畑と、いまだ成長途中のブドウの木。ブドウはもう数年かかりそうだ。

「おっ帰ってきたか」

村人達が帰ってきた。籠一杯のドングリやらブドウやらを抱えて。ウサギやらリスを矢で仕留めたものもいる。ドングリの実がとれるように周辺を整備したことのいい点は、小動物が寄ってくるようになったことだろう。入れ食いとまではいかないがドングリの木の周囲に罠を張るとポロポロと掛かってくれるようになった。

あれから一年――――俺の村は急成長した。俺がこの世界にきてから二年と少しということになるな。人口にして１００人ちょい。もう病から逃れてきた民なんて言わせない。

要因として、一つ目は狼煙だ。人がいるということを知った流浪の民が流れ着いてきたのだ。もう一つはベビーブームである。生活が安定してきたことで、子供をたくさん作ろうという人が増えたのだ。新しいカップルも誕生して、子供をどんどんと作り始めた。

原始時代に人口１００人を超え、かつ、そのいずれもが服を着ている。ふふふ。苦労した甲斐があったというものだなぁ。まあ全員が麻の服を着てるかというと、そんなことはないけどな！　半分半分くらいかな。

あれから一年。俺は、食料の安定供給に心血を注いだ。とにかく食べるものが無ければ人は生きていけないからな。食べるものさえあれば、あとはなんとかなるもんだ。焼畑も積極的に推し進めて、農地の拡張もしたさ。木をくり貫いて作った船で、漁ができるようにもなった。

エノコログサ様様だな。今年の収穫量があれば、一年は毎日パンが食える。あとはイモ様か。味が淡白過ぎて正直まずいので調理方法を考えねば。

機は熟した。今こそ、温めていたプロジェクトを実行に移すべき時だ。

俺は村で、『職』についているメンバーを呼び集めた。

職とは、例えば土器作りとか、木工とか、大工とか、裁縫とか、そういった専業についている状態を指している。アキラスは俺の補佐みたいなもんなので、会議をするときは絶対にいるぞ。

「鉄器を作る」

俺は結論から述べた。

『鉄器……？』

いるメンバー全員の頭にクエスチョンマークが浮かんでいる。石器すらなかった時代生まれからしたらテッキとか急に言われてもわからんよな。

なんでいきなり鉄器なんだって？　銅と錫が見つかってないからだよ！　あれば先にやってるとも！　割と簡単に溶かせるからな！

俺は自宅で使っている隕石をみんなの前に置いた。

「これね。ツルツルしていて、ピカピカしていて、重い。これが鉄。これを使って、道具を作ろうと思う」

「ソーマ、ちょっと待てよ。そんな硬いものを加工できるわけがないだろう」

エアセナ君が突っ込みを入れてくる。力自慢が揃っているエアセナ一族には、鉄つくりをやってもらいたいものだと思ってたりする。

「もちろん、このままじゃ無理だ。しかし高温で熱すると柔らかくなって、形を変えることができるようになる。更に熱すると、水のよ

うになる」
「水のように!?」
「最終的にはね。でも、今の俺たちじゃそこまではいけないよ」
鉄の融点は１５００度程だ。現在どれだけ頑張っても、１５００度にはいかないだろう。だが、柔らかくすることはできる。柔らかくなれば、あとは叩いて形を整えればいいのだ。
俺は説明をしつつ、あらかじめ作っておいた粘土の模型を地面に置いた。塔型の炉と、それに接続する鞴（ふいご）である。極めて簡単な作りながら、鉄を柔らかくするのに必要な温度を稼ぐことができる。本格的に鉄を溶かしたいなら蹈鞴（たたら）を作らねばならんが、ノコギリハンマー一つないのに作れるわけないだろ！　段階を踏むんだよ！
「叩きまくって刃を作る。鉄製の道具があれば、木を自在に加工することもできる。鉄の鏃なら、獣の肉を一撃で破れるし、槍なら言うまでもないな」
『おおーっ！』
イメージが沸いてきたのか一同が声を上げた。
木を自在に加工できるってのが重要だ。綺麗な木材を作れるって偉大なことなんだぞ。
「でも、手順を踏まないといけない。材料はこの隕石でいい。高温を保つためには、木炭が欲しい」
材料に関しては隕石以外にも砂鉄があるが、それはおいておく。
俺は次に炭を地面に置いた。プロトタイプとして作っておいたものだ。
「これ、作ってみたやつ。作り方としては空気を遮断する必要があって、木をこんな感じに組んで……」
模型を作るか。小枝をキャンプファイアーでもやるような山形に組んでいく。
「土を被せていって……」
枝の周りに土を被せてこんもりとした山にする。頂上と下部に穴を開けてある。
「この状態で内部に着火する。下から入った空気が上に向かってい

く。火が回ってきたら穴を塞ぐ」
「火が消えちゃうんじゃない？」
　アンセイカさんのツッコミが入った。普段家で火を守ってるだけあって、火の性質を理解してくれてるみたいだ。
「消えてもいいんだ。熱を加え続けるとどうなるかというと、木の炭素――――ようは木の燃えるところと言ったらいいのかな、そこだけが残る。だからほら」
　俺は言いつつ長い木炭を持つと、囲炉裏に突っ込んで着火した。火から離すと、赤く光り輝きながら燃えているのがわかる。煙は微かである。
「煙がほとんど出てないでしょ。すごく便利なんだよ。煙くないし、長時間持つしね。この木炭が、鉄を作るときの火の温度を上げる為に必要になってくる。次に、その火をどこで燃やすかと言うと、こんな感じ」
　炉の模型の中に小枝を突っ込む。そして、鞴を指差す。
「火をつけたらこの鞴という道具で炉の中の温度をどんどんと上げていく。鞴の作成に関してはアスレイ君にお願いすると思う」
「どんな道具なの？」
　アスレイ君が手を上げた。
「詳しくは後で説明するけど、空気を送り込むための道具。どんどん温度を上げていって、隕石を入れる」
　本当なら鉄鉱石とか砂鉄を鉄にする作業なんだけど、隕石が対象でも理屈として同じはずだ。何度も何度も加熱しては叩いてを繰り返すことになるだろうから、炉から出し入れできる仕組みを考えないといけないな。
「そして隕石が柔らかくなってきたら取り出して、叩く！　叩いて、形を整えていって、冷やす。冷えてきたら柄をつけて、ハンマーのできあがりだ！」
『おおおおおおおおっ!!』
　喝采。拍手をする文化はないけどな！
「鉄作りはこの村にとっての挑戦になると思う。みんなの力が必要に

なる。協力して欲しい」
俺が言うとみんなはうんうんと頷いてくれたのだった。

27．　ねんがんの　アイアンハンマーをてにいれたぞ！

木炭や炉や柄に使う木は準備が出来た。天気のいいある日、俺は人員を集めて隕石の加工に取り掛かることにした。

粘土を固めて作った子供の身長程の高さの粘土の塔から煙が上がっていた。

俺が最初に考えたのは粘土を使った原始的な炉だった。千里の道も一歩からだ。次としては、岩作りの竈で鉄を作れるようにすることだろうか。

「いい調子いい調子！」

俺が何をしているかと言うと鞴（ふいご）で空気を送り出しているところだ。この鞴、丸太の中身をくり貫いて、両端に穴の空いた蓋をつけたものだ。気密性を高める為に土で封印をしているぞ。穴からは棒を出して、その棒は中の丸い板に接続されている。丸太の横からは管が伸びていて、塔に繋がっていた。棒を出し入れすると管から空気が出る仕組みだ。

「交代だな！」

嬉々としてエアセナ君が風送りを代わってくれる。この時代の最新技術に触れられるわけだからな。嬉しいんだろう。

「火の色が青い……！」

炉の中を覗き込んでいたアキラスが目を丸くしている。真っ青とは呼べないまでも、火が青っぽくなってるんだよな。

炉の下のところには石器製の蓋がついていて、そこから隕石を取り出せるようにこれまた石器製の棒がついている。蹈鞴（たたら）式の炉はその度に壊さないといけないんだけど、加工には不向きなので取り出せるようにした。ピザピールみたいなもんだ。木炭を投入していくと隕石が埋まってしまう点はもう構造上しょうがない。

「木炭入れちゃってー」

「はーい」

エアセナ一族の男が木炭を炉に放り込んでいく。空気を送る度に炉の上から高温の空気が立ち上り、ゆらゆらと空気を揺らめかせる。
「これはくたびれるぜ……」
「手を止めると火が消えちゃうから頑張ってくれ」
鞴を動かすエアセナ君が言う。単調な動きなんだが、ずっとやり続けるのは確かに疲れるんだなこれが。
炉の中を覗き込んでみるものの、木炭と火が邪魔である。
「そろそろかな？」
何しろ炉の中がよく見えないので、感覚でやるしかない。
俺は炉の蓋を木の棒に引っ掛けて引っ張ると、続いて石器のピールを使い隕石を取り出した。ほんのりと赤いが、白熱とまではいかない。これでは叩いたところで骨折り損だろう。
「だめだ。引き続きよろしく」
「うぐぅ……」
ひいひい言いながら鞴を使うエアセナ君。頑張れ。未来の鍛冶師。
「そろそろかな……？」
体感だが更に十分後くらい。もう一度炉から取り出してみる。すると――？
「赤い！　隕石が赤くなっている！」
白熱した隕石が出てきたではないか。作業を見守っていたギャラリーがおおと声を上げた。
俺は隕石を棒と棒で挟んで平たい石の上に置くと、石器のハンマーで思い切り叩いた。
カーンという音と共に手に強烈な跳ね返りが伝わってくる。硬いものを叩いている証拠である。力いっぱいハンマーを叩きつけて、三角錐に近い形の頂点の部分を潰していく。
「鉄は！　熱い内に！　叩け！　おらっ！」
叩く！　叩く！　叩く！
徐々にだが、隕石の形が変わってきている。徐々にだ。もりもりと変わるわけではない。加熱が足りないのだろうか。
「代わってくれ！」

「よしきた！」
俺はエアセナ一族の男にハンマーを手渡した。男は早速俺の見よう見まねでハンマーで叩き始める。
「ひっくり返すぞ。ここここの出っ張りを潰して、ハンマーの形にしよう」
最初に作成するのは、ハンマーである。なぜかと言うと、鉄のハンマーがあれば他の鉄器も作りやすくなるからだ。石のハンマーと鉄のハンマー。どっちがいいかと言えばそりゃあ鉄のハンマーの方がいいに決まっている。
ハンマーの形状――――ようは円柱型にするべく、男はとにかく力いっぱい叩きまくる。頂点を潰して、横倒しにして、叩く叩く。
「冷えてきちゃったか……よーしエアセナ君よろしくー」
冷えてきたのか、隕石が赤みを失ってきている。これではだめだ。棒に挟んでピールに乗せると、炉の中に再投入して加熱する。
「ぐぬぅぅ……代わってくれ！」
「いいぞ！」
エアセナ君が別の人にバトンタッチした。何もかもが人力なので、体力勝負だ。
加熱が完了したのを見計らい、また取り出して叩きまくる。叩いていくうちに不純物が取り除かれ、純粋な金属だけになっていくらしい。
「よーし……叩いて！」
また出す。叩く。だんだんとハンマーの形状に近くなってきた。円柱の中央は細くしたいので、石を宛がって、その石を叩かせて圧力をかけていく。
「このくらいかな。冷やそう」
俺の理想とするハンマーの形状になった。円柱で、中央が若干細くなっている。
用意しておいた水入り容器に放り込むと、ほぼ一瞬で沸騰した。ぶくぶくと激しく飛沫を上げている。想定済みなので棒で掴んで次の容器にぶち込む。水から上げて石の上に置き触ってみると、ほのかに

温かい程度になっていた。
「と言った感じが、鉄の加工だ。エアセナ君、温度を維持しつつ次の隕石を加熱して貰っていいかな？　アスレイ君。持ち手をつけようか」
もう触れる温度なので、持ち手をつけようと思う。作業したくてソワソワしていたアスレイ君を呼ぶと、持ち手の作成に取り掛かる。と言っても事前に準備はさせていたので、取り付けるだけだ。
用意させたのは、木の棒だ。中央部分を薄く削らせてある。ハンマーの頭の加工は難易度が高いので、シンプルに行く。木の棒を折り曲げて頭を挟み込んで、根元を扱いて慣らした蔓を巻きつけて結びつける。
「出来た!!」
俺は出来上がった鉄製のハンマーを高く掲げて見せた。人類初の本格的な金属の道具である!!　俺の村は晴れて青銅器を飛び越して鉄器を手に入れたのだ！
これあれじゃない？　後世で神の武器とか呼ばれるようになるやつじゃない？　ミョニエルとか。あ、でも俺、女じゃないか。精神は男だけど。
『おおおおおおっ!!』
盛り上がる村人たち。いちいち反応がいいからやってて楽しいぞ。
ということで俺はそのハンマーをエアセナ君の前にどんと置いた。
「じゃあこれ今後君の一族が管理して欲しい。もう何本かハンマーを作ろう。そしたら次は、打ち合わせ通りに鑿（のみ）とナイフを作って欲しい」
「お、おおおお……これは……!!　わかったぞ、これは家宝にするっ!!　鑿とハンマー作りだな、よーし!!」
ハンマーを渡されたエアセナ君は心底嬉しそうな顔をしてくれた。ハンマーをぺたぺた触って、石を叩いてみたりしている。やはり鍛冶屋にはハンマーが似合うな！
鑿は主にアスレイ君のためのものだ。ノコギリが作れたらいいんだけどね、鉄を溶かせる温度の炉を作れるようになるまでか、銅と錫を見つけるまではお預けかなあ。

鉄作りは知識としてあっても、やるのは初めてだ。俺は、次の隕石の加熱に入ったエアセナ君達の作業をしっかりと見ておくことにしたのだった。

２８．春待ち

秋も過ぎ、冬が近づくと焼畑の季節である。今年も農地を拡張して、人口増加に備えていくのだ。作物の種類も段々増えてきて、食事のレパートリーも豊かになってきた。肉、魚、エビ、カエル、山菜、ドングリ、エノコログサ、ベリー、イモ、麻の実等々。最初この場所に来たときと比べると雲泥の差である。

『グアグアグアグアー！』

カモも増えた。５羽だったのが２０羽にまで増えた。清潔さを保つため、カモ専用の竪穴住居を作った。世話をするのは俺だ。毎日中を掃除している。畑のほうに行かないように、出すときは誰か見張りをつけるようにしている。

そろそろ屠殺を考えないといけないけど……。

「うーん温かい」

俺の足とか、股座とか、肩とかに身を寄せ合ってグアグア鳴いているカモ達。もふもふとしていて、顔を埋めたくなる。大人になったら俺についてこなくなるかと思ったけどそんなことなかったぜ。ついてくるんだなこれが。

いつかは殺さないといけないんだろうけどなぁ……卵を食べて終わりにしたいという気持ちも強い。数が増えすぎると管理が出来なくなるし、不衛生になってしまうし。何より懐きまくっているので愛玩動物という感じがしてしまって殺しにくい。

「さてと……こ、これは！」

俺は、パンの様子を見ていた。今使っているベリー酵母のパンは膨らみ方が悪く、ふかふかのパンにはならない。なのでこの世界のブドウの酵母を使ってみたのだが……ぷっくりと膨れたパンになっているではないか。

「今度からブドウ酵母で焼いてみよう」

カモがパンを食いそうになったので手で払うと土製の窯の中にねじ込んでおく。ふかふかのパンを作れるようになったらアキラスも喜んでくれることだろう。

さて、冬である。冬は寒いので必要なこと以外では村の外に出ないように指示している。俺も不老不死とは言え寒いものは寒いので、外には出歩かないようにしている。村の中で完結できて出来る仕事と言うと次世代の建材作りである。そう、煉瓦の開発に着手したのだ。

煉瓦とは、簡単に言ってしまえばブロック型の土器である。泥や砂を乾燥させたものを焼いて固めたもので、メソポタミア文明から使われ始めたらしい。まずは日干し煉瓦を作る。日干し煉瓦で窯を作って、焼成煉瓦を作る。今の竪穴式住居は作るのが比較的簡単で、半分地下に埋まっているので気温の変化に強い。とはいえ煉瓦の家と比べると風通しが良すぎるので、徐々に煉瓦の家に移行していきたいところだ。

俺は早速、煉瓦を作っているアキセイカ君の所に行った。アキセイカ君は土器の作り方も巧みなので、煉瓦も任してみたのだ。

「首尾はどう？」

アキセイカ君と数人の子供達は木の型に泥をねじ込んでいる真っ最中だった。地面には無数に煉瓦が置かれている。

「土器と比べたらずっと簡単だよ。泥入れて置くだけだし」

「おお、綺麗にできてるね。煉瓦が出来たらもっと土器を薄く強くできるようになるから頑張ってね」

現在の野焼きではどうしても温度に限界があるが、煉瓦の窯を作ることが出来たら、もっと高温で処理することができる。土器をもっと薄く強くすることも夢ではないだろう。縄文式土器から弥生式土器にランクアップだ。

次に俺はエアセナ一族の家が並ぶ地域に行くことにした。カンカンとやかましい音が鳴っている。持ってきた隕石は片っ端道具に加工するようにお願いしてある。各家庭に配っていた火打ち石がなくなってしまうのは必要な犠牲として我慢して貰うことにした。

「おう、ソーマ！　仕事は順調だぞ！」

汗をかきながら鉄を打っていたエアセナ君が振り返った。手には鉄製のハンマーが握られている。

「ソーマ、渡しておくぞ。エアセナ様特性のナイフだ！」

エアセナ君が言いつつナイフを渡してきた。そう、一本ナイフが欲しくて作成を依頼しておいたのだ。ナイフは外科手術をするなら必須とも言えるしね。

受け取ってみると、ほとんど経験が無いはずなのに、ちゃんとナイフの形状をしていた。片刃のサバイバルナイフといったところか。刃は若干歪んでいるし、持ち手は皮を蔓でグルグル巻きにしただけだけど、原始時代のものであることを考慮するとエクスカリバーですよこれは。

俺はナイフを傾けたりして品質を確かめると、腰に仕舞った。

「いいね。この調子で隕石はある分全部道具にしちゃって欲しい。指定した道具以外にも思いついたものがあったら作って構わないよ」

依頼しているのは、鏃、穂先、ハンマー、ナイフ、鑿などである。贅沢を言うならノコギリが欲しいが、それはまだ技術的に不可能だ。どれだけ頑張っても炉の温度が１５００度にはならないので、溶かして型に流し込むなんて夢のまた夢なのだ。せめて銅と錫があればいいんだが。

技術力を上げるためにも、創意工夫を凝らすのは大切なことだ。俺が思いつきもしない道具を思いつくかもしれないと考え、そのようにお願いをしたのだ。

「ししし……俺様に任せるがいい！　野郎共、鞴を力いっぱい動かせ！」

生き生きとしているな。いいことだ。鍛冶を任せて正解だったな。

俺は自宅へと帰ることにした。

自宅に帰ると、俺が作った地図をアキラスが眺めて腕を組んでいた。俺が家に入ると振り返る。

「帰ったぞ～。どしたの？」

「ああ、隕石を使い切ったあとは、どうするつもりなのかと思ってな」

「それな」

そうなのだ。持って帰ってこられた隕石の個数は決して多いとは言えず、この調子で行くと本格的な冬を前に加工し終わってしまいそうなのだ。そもそも本当に隕石があるかわからなかったので、少人数

で登山をした。持ち帰れた個数もそれに準じているのだ。
俺は隣に腰掛けると、地図の上に置かれた粘土細工を指で突いた。
「二箇所ある。一箇所は、俺の登った隕石の落ちてる場所。まだ回収仕切れてない隕石が探せば見つかるはずだ。もう一つはゾイじいさんが言っていた黒い砂の溜まった海岸かな。砂鉄って言う、鉄が砂みたいになったものがある、はずなんだよねぇ……」
山は比較的近く、半日以内に行って帰ってこられる位置にあるが――。
砂鉄はゾイじいさんが数日歩き続けたところにある川と海が交わる地点にある。遠いのだ。
「遠いんだよね。行きに一日帰りに一日でも二日かかるわけで。相応の準備を整えないといかんでしょ」
「ううん……」
「この近辺をうろついているらしいマンモスも気がかりなんだよなぁ。遭遇しないとも限らないでしょうし……あとはサーベルタイガーとか、狼とかいそうじゃん」
「さーべるたいがー？」
今が氷河期かどうかは知らないが、いてもおかしくないということで言ってみた。案の定首を傾げられたが。
俺は地面に雑な猫を描いた。
「でかい猫みたいな」
「猫？」
「犬みたいなやつ。凶暴なやつね」
「犬？」
「狼みたいな」
そうかイエネコもイヌもいないのか、と妙な納得をしたりして。
俺がマンモスに遭遇したところは、俺が思っている北の方角にある。そしてゾイ老人がやってきたのも同じ方角である。マンモスがうろついているかもしれないエリアを横切ることになっているはずなのだ。何故かは知らないがあのマンモス、人間を敵と思っているらしく殺しにくるのでエンカウントしようものなら悲惨だ。俺は運が

良かっただけだ。
「鉄製の武器を揃えて護衛を付けて砂鉄を運ばせるしかないんじゃないか」
「それか向こうで製鉄するか……だけど向こうに燃料とか粘土があるとも限らないしねぇ」
鉄を作るにはたくさんの燃料が必要なのだ。砂鉄の海岸に燃料があるかは不明だし、あっても都合よく炉を作るための粘土を確保できるかも謎だ。
「春だな。春に決行しよう。隕石拾いは明日にでもやろう」
「そうだねぇ」
冬に決行して雪が降りましたなんてことを避けるためには、春を待つしかない。
俺は頷いたのだった。

２９．宿敵

草原にて。

「クソッ！　やっぱりここいらはアイツの縄張りなのか！」

俺は１０人ほどを連れて黒い砂の海岸を目指していた。みんな蔓で編んだ籠を抱えている。せっかく見に行くのだから、砂鉄があれば砂鉄を、無くとも資源を回収してこようという寸法である。

それで初日にいきなり遭遇してしまったのだ。俺がこの世界にやってきた早々に遭遇した、巨大なマンモスに。

改めてみると絶望的な大きさである。地上最強の動物とも言われる象を二回り大きくしたような体躯の威圧感は凄まじく、連れてきた面々は表情を引き攣らせている。

「でかすぎる……迂回するか？」

「うーん」

アキラスが俺の肩を叩いてくる。

戦ったところで勝てるかと言うと、いくら鉄製の武器があるからといってもマンモスが相手では勝率は限りなく少ないと言えよう。あるいは犠牲を省みず立ち向かえば勝てるかもしれないが……。

マンモスを相手にするならば、落とし穴を掘ったあとで追い込むなり誘導して罠に嵌めたいところだ。罠もないのに戦いを挑むのは無謀にも程がある。

「迂回しよう。戦うなんて……うおっ!?」

急にマンモスが鼻を高く掲げたかと思えば、俺たちの方を睨み、一目散に掛け始めた。目測になるが時速３０ｋｍは出ているだろう。遅いと思うかもしれないがオリンピック選手の平均速度が３５ｋｍなので、素人の俺たちからすれば途方も無く速い。

「森に逃げろ！　逃げ切れなくなったら木の上に登れ!!」

正面から戦って勝てるはずもない。草原で走ったところで逃げられるはずもない。

森に逃げるしかない。障害物が多いし、いざとなれば木に登れるか

らだ。
「!!!」
!!!マンモスが鳴いた。マンモスもパオーンって鳴くんだなと変な感心をしてしまう。
「何で人間に襲い掛かってくるんだ!?」
「ええっ!?」
俺と一緒に逃げているアキラスがごもっともなことを言い始めた。
確かにマンモスからすれば人間なんて小さい生き物のはずで、積極的に襲う理由が分からない。
「子供がいるんじゃないのか!?」
「どこに！」
俺が考えていたのが子供が近くにいるからだ。子供が近くにいるので外敵となる人間を攻撃しているのではないかということだ。アキラスの言葉に俺は眼を凝らしたが子供らしき姿は無い。俺がこの世界に来たときにも子供はいなかった。
「森だ!!」
考えている場合ではない。森に逃げ込み、木の間を縫うように走る。人間と巨大マンモスでは体の大きさも違う。俺の目論見通りにマンモスは速度を落とした。
「俺たちが狙われてるみたいだ！　登れ！　そこの木だ！」
速すぎて森の奥に逃げることができず、緊急的に木登りを強いられる。背負っていた籠を放り投げると、えっちらおっちら登り始める。
「早くいけ！」
「ケツ触ンなよ！」
俺が遅いとアキラスが尻を掴んで持ち上げてきた。非難の声を上げ!!たが、そんなことを言ってる場合じゃない。
「!!!」
!!!怒り狂ったマンモスが木の下で大騒ぎしている。木に体当たりをしてみたり。その度に木がギシギシと揺れるが、流石のマンモスも木を折れるわけではないらしく、悔しそうに睨みつけてくるだけである。

「行ったか……なんであのマンモス人間を目の敵にするんだろうなあ……」
「子供がいないとなると、以前に人間に襲われたことがあるんじゃないか」
俺はアキラスの言葉に頷くとえっちらおっちら木を降り始めたのだった。

「行きに一日、帰りに一日かねぇ」
目標地点の川に到着した。今は下っている途中だ。
マンモスを除けば危険な生き物には出会わなかった。それはいいニュースではある。
「木が無いな」
「うーん確かに木がないなぁ。現地で鉄を加工するのはどうかと思っていたんだけど、木が無いんじゃ難しそうだなぁ。土も微妙な感じだ」
俺が考えていたのは現地で加工することだ。重くてかさばる砂鉄を運ぶよりも加工したものを運んだほうが楽だからだ。だが、砂鉄があると思われる地点の海岸は木が殆ど生えておらず、土も粘り気がほとんど無く、練って炉を作るには向いていない。
「おお、ここかぁ」
俺は早速海岸に下りてみた。柔らかい砂の上を歩いていくと、黒い砂が堆積している場所がある。白っぽい砂の堆積物の横から見てみると、長い年月をかけて堆積したであろう黒い砂があるのがわかる。
砂鉄かどうかを確かめるには磁石を使うのがいいのだが、そんなものはない。溶かして確かめるまでだ。
「みんなー、ここにある黒い砂を積めるだけ積んで帰ろう！」
『おお！』
俺は来ている全員に声をかけると、早速自分も籠に詰め込んでいく。砂鉄の運搬のために作った目のほとんど無い専用の籠だ。砂が漏れそうなところは葉っぱなんかを詰め込んである。運んでいるうちに多少の漏れはあるだろうが、誤差だ誤差。

「重いな……」
籠一杯に砂鉄を詰め込んで立ち上がろうとしたアキラスが呟いた。
そりゃあ重いさ。
「長距離歩くことになるから詰めすぎはまずいぞ」
「確かに」
アキラスが砂の分量を減らす。一日は歩くことになるので積みすぎていると途中でばてることになりかねない。
俺も、歩いて帰れる程度の砂鉄を籠に詰め込んでいく。
「この砂があの鉄になるなんて信じられないな。黒い砂にしか見えないんだが」
「多分そうだろうと言うだけで確定じゃないぞ。溶かしてみないことにはわからない。磁石っていう道具があればわかるんだけど……」
「ジシャク？」
「方角を知ることが出来る道具だよ。いずれは作りたいけど、磁石の元になるものがないと作れないから難しいさ」
磁石が作れるようになったら、どこにいても方角がわかるようになる。磁鉄鉱があればいいんだが、探索不足なのか、そもそもないのか、無い以上は太陽を使うしかない。
「どこにいても方角が分かる……まるで魔法だな」
「科学さ」
などと話しながらも俺たちは砂浜から（おそらく）砂鉄と思われる物資の回収に成功したのだった。

３０．デカブツ

「クッソ！　殺意が高すぎるだろ!!」
村への帰路、俺たちはマンモスの襲撃を受けていた。なんてしつこいマンモスなんだ。どうやら俺たちのことを尾行してきたらしく、村すぐのところで襲撃を受けたのだ。
「やはり、こいつ、人間に攻撃されたことがあるんじゃないか!?」
俺と並んで走るアキラスが推理を述べる。
「それか子供を殺されたことがあるとかかもな！」
マンモスがいくらでかいとはいえ子供は小さくか弱い。分断するなり夜襲するなりすれば、子供ならば容易に殺せることだろう。人間を目の敵にしている理由を本人に問いかけても言葉が通じるわけが無いのでわからないが、相当な恨みがあることは明白だった。
このままでは追いつかれる。俺は砂鉄の入った籠を下ろすと、腰のナイフを抜いた。
「俺が時間稼ぎをするからみんなを呼んできてくれ！」
村に直接攻め込ませるわけにはいかない。
「だったら俺も！」
「わかった、俺が引き付けるから攻撃は任せた！」
男の一人――――弓を持っている――――が手を上げる。他のメンバーは大急ぎで村へと逃げていく。子供や老人を避難させないといけないからだ。
「俺もやる！」
アキラスが槍を構えて声を張り上げる。行けと行っても聞かないだろう。俺は頷くと、迫りくる脅威を睨み付けた。
「俺は死なないから！　神様だから！　俺が囮になるからさ!!」
説明している時間も無いので大声を張り上げると、ナイフを握って突撃する。
怖い。トラックのように巨大な生物相手にちんけなナイフ一本で戦うとは正気の沙汰ではない。けれど、逃げれば俺が心血注いできた

村が蹂躙されてしまう。
「うおおおおお!!」
全力でダッシュしながら右方向をすり抜ける！　スライディングですれ違いながら斬りつけた！
が、だめ。マンモスからすれば薄皮を切られたに等しく、疼痛すら感じていないだろう。振り返りながら放たれる鼻によって俺は面白いくらいに宙を舞った。
「いっでぇぇっ……」
痛い。木じゃなくて草むらに落ちたお陰でダメージは比較的少なかったが……。
姿勢を起こすと怒れるマンモスが鼻を伸ばしてきていた。抵抗する間も無く掴まれ、おもちゃのように放り投げられる。木の枝に腹を打ち付けて、地面に落ちる。
「ぐ、ごののおおお!!」
また鼻が伸びてきたので、ナイフを振り回す。鼻の皮を切った手ごたえがあった。
「おぇぇぇぇっ!?」
掴まれて投げられる。胃液が逆流していくのがわかった。
意識が遠のいていく。
「ぐっ」
踏まれるのが分かる。メキメキと骨が砕けていく音を聞いた。
あ、これ死ぬわ。
不老不死といっても、本当にそうかは……。
……。
……。
「しっかりしろ」
……。
「息はしてる……死なないといっていたのは本当だったのか」
……。
「傷が治っていく……ソーマ？」

「ああ……」
覚醒した。俺が意識を取り戻したのは自宅でだった。
知ってる天井。嗅ぎなれた焚き火。ぶら下がったコンブと干し肉。ずらり並んだ薬壷。
「死なないというのは本当だったんだな……」
視界にアキラスが入り込んできた。不安そうな顔をしている。
姿勢を起こそうとしたんだが、起き上がれない。下半身の感覚が無い。これは、あれか。背骨が逝ってるんじゃないか。
「下半身の感覚が無い」
「ああ、何せ踏み潰されて放り投げられた時に体が半分に折れていたからな。背中側に」
想像するだけで面白い光景なんだが笑ってる場合じゃない。不老不死と言えど回復には時間が掛かるらしい。ステータスを開いてみるか。
『脊椎破損』
『内臓破裂』
……うん！　これ以上は見ないでおこう。
感覚が無いだけマシというか、頭がぼーっとするし心臓もバクバクいってるのでアドレナリンが流れすぎて痛さを感じないのだろうと思う。
「ヤツは……？」
「ソーマをボコボコにして俺たちにも襲い掛かってきたんだが、村まで逃げてみんなで囲んで戦ったら逃げ出したよ。怪我人は出たけど死人は出てない」
「よかった……」
ほっとため息をつく。目的は達した。骨折り損にはならなかったわけだ。骨は折ったが。
「あれがうろついている限り、俺たちの村は危険に晒され続けるだろうな」
「……」
悪いことに村の位置を知られてしまったわけだしな。人間に恨み

があるあのマンモスがうろついている限り、砂鉄を取りに行くことも厳しい。
「選択肢は二つある」
俺は言った。指を一本立てる。
「一つが村を放棄すること。マンモスに見つからない場所に逃げて最初からやり直すことだ。積み重ねてきた道具やら経験があるから、一からというわけにはならないけど」
村を移転すると言ってもゼロからのスタートではない。道具もあるし、種もみもある。しかし、また一から資源の位置を調べる作業があるし、移転先が農業に適しているとは限らない。場合によっては土壌を改良することになるかもしれず、その年は食べるものが無くギリギリの戦いを強いられるかもしれない。違う土地に行けば、未知の病があるかもしれない。容易いことではない。
二つ目の選択肢。ここでの生活を続けるということは、あのマンモスとの対峙を強いられる。勝利すれば大量の資源が入手できるが……。
俺は指を立てた。
「二つ目がマンモスと戦うこと。死人が出るかもしれない」
「戦おう」
即決だった。アキラスは俺のことを見つめながら言った。
「せっかくここに慣れてきたのに、また違う土地に行くなんてまっぴらだ。あのマンモスさえいなければいいんだ」
「わかった。みんなに話してみよう。多数決で決めたい」
「タスウケツ？」
「賛成と反対の数で、多いほうを選ぶ」
こればかりは俺一人の判断じゃ決められん。俺は不死身でも、みんなは不死身じゃないからな。全員不死身なら即決してたけど。
翌日。不死身っていいよな。一日寝たら大体治ってしまったよ。オープンワールドゲーの主人公かよ。まだふらつくし、呼吸が苦しいけど、数日寝たら全回復しそうだ。この調子だとミンチになっても治るんだろうなぁ。普通に痛いので死ぬほど苦しいんだろうけど。

で、俺は例のごとく村の中央にある岩に登っていた。ふらふらするので後ろでアキラスが支えてるけどな。
思えば村人全員を集合させて話をするのは初めてかもしれない。およそ１００人が俺のことを見つめている。
「聞いて欲しい。この村が出来てから色々なことがあった。病から逃げてきた一団から全ては始まった」
アキラスとの出会いが思い浮かぶ。何も分からずこの世界？　時代？　で目覚めて、導いてくれと言われてここまできた。
「石器を作って、狩りをして、農業をして……最大限努力したけど、人が死んで……」
俺も頑張ったけど、村人の死は避けられなかった。石鹸を作って出産時の死亡を避けようとしたけど、内出血が酷くて母親が死んでしまうこともあった。
「それでも俺たちは生きている。でも、みんなわかってると思うけど問題が起きた。マンモスだ。あのマンモスは人間に襲われたことがあるみたいで、人間を目の敵にしている！　選択肢は二つ。残って戦うか、逃げるかだ！　残って戦えば、死人が出るかもしれない。最悪、村が壊滅するかもしれない。逃げれば戦わなくていいけど、新しい土地で最初からやり直しになる。食べるものがないかもしれない。違う獣に襲われるかもしれない！」
俺は二つの選択肢の利点と欠点について話した。どちらを選んでもいい。だけど、ここはみんなに話しておきたかったのだ。
俺は岩に腰掛けた。ふらつきが限界だったのだ。
「戦いたいという人は手を挙げて欲しい。戦いたくないという人は、手を挙げないで欲しい。多いほうを、村の方針にする。しばらく話し合ってくれ」
俺が言うと、みんなは顔を見合わせてがやがやとああでもないこうでもないと話し合いを始めた。命がかかってるからな。意見がまとまらないだろうなとは思った。
いつまでも時間をかけていても仕方が無い。俺は手を挙げて、それから手でメガホンを造って声を張り上げた。

「はいはーい！　それまで！　決められない人も、どっちかに決めること。もしどちらも選べない。村を出て行くと決心しても俺は責めない！」
　まさかとは思うが、出て行こうとする人もいるかもしれない。俺はあえてその点を言った。
「挙手してくれ！」
　ぽつり、ぽつりと手が挙がっていく。徐々に挙手は波のように広がっていって、全員が手を挙げていた。
「せっかく神様の作ってくれた村だもんね！」
「あんなデカブツにしてやられたなんて、ご先祖様に顔向けできないよな！」
「やってやろうぜ！　鉄の武器を試すいい機会だ！」
　村人達が口々に声を上げる。村を去ろうと言う人は一人もいない。みんな決意に満ち溢れている。
「ということさ」
　アキラスが俺の肩を叩く。
　俺は大きく頷いたのだった。

31．せふせふ！

「二つの計画がある」
俺は例のごとく『職』を持っているものと、狩りが得意な面々を集めて話し合いをしていた。
相手は巨大なマンモスである。作戦もなしに突っ込んで勝てる相手ではない。
俺は一本指を立てた。
「一つが落とし穴。みんな知ってると思うけど、相手が来たら穴に落とす仕組みね。あのデカブツを落として這い上がらせないようにするには、大人の身長くらいは最低でも欲しい」
落とし穴ほど効果的な罠はないだろう。有蹄類の登坂力は目を見張るものがあるが、長鼻目はとにかく体重が重く一度掛かれば這い上がれないだろう。
「かかってくれれば、それで勝負は決まりだ。落とし穴に追い込むんじゃなくて、追いかけさせて引っ掛けたい」
うんうんとみんなが頷いた。次に俺は二本目の指を立てた。
「次が持久戦だ。罠にかからないということもありうるから」
『ジキュウセン？』
一同の声が重なった。
ここは人間の知恵を徹底的に使うしかない。
「攻撃に出る班を二つに分ける。片方が朝から夕方。片方が夕方から朝まで。一日通してひたすらマンモスに嫌がらせをする。遠くから石を投げたり、毒矢を放ったり、マンモスから離れたところから攻撃をして、夜は絶対に眠らせない。食事もとらせないくらいに攻撃する」
いくら強かろうと、昼夜を問わず嫌がらせ（ハラスメント）をされれば耐えられまい。動物は俺たちのように治療することもままならないので、いつかは倒れるはずだ。
「ソーマ、それは……えげつないことを考えるな……」

まあ、アキラスがドン引きしてるんだけどね。仕方ないね。
「倍返しだよ。あのヤロウにやられっぱなしじゃ神様の名が廃るわ。で、みんなにはいくつか仕事をお願いしたい。狩りが得意なエアセナ一族は、人手を二つに分けて朝夜交代で出撃ね」
「おう」
エアセナがこくんと頷いた。
エアセナ君一族は狩りが特に上手い。流浪の民がことごとく飢えていたのに、エアセナ一族は食事をきちんと取れていたらしく健康なくらいだったからな。
「アスレイ君には、矢と弓の増産をお願いしたい。アキセイカ君も手伝ってあげて欲しい。鏃は、これと同じものにして欲しい。あとは槍かな。完成度は高くなくていいから、とにかく本数が欲しい」
弓は重要な武器だ。遠距離からダメージを与えられるからな。俺は『ギザギザ』のついた鏃を二人の前に置いた。
二人がうんと返事をしてくる。
「ゾイさん。毒って知ってるよね」
「もちろんですじゃ、神様」
そして今まで使ってこなかった手を使おうと思う。そう、毒だ。ゾイさんは長生きしているだけあって、どの植物に毒があるかを熟知している。もちろん俺だって知ってるつもりなんだけど、知識量じゃ及ばない。
「矢に毒を仕込みたい。即効性があって、火にかけると消える毒が最高なんだけど。紫色の花の毒って知ってる？」
一番いい毒というとおかしな表現になるが、トリカブトは毒矢にうってつけだ。よく目立ち、よく効き、加熱すると毒性が極小になるのだ。
「知っておりますとも。じゃが、この辺りじゃ見かけませんですなぁ……他の毒草ならば見つかるかと」
「お願い」
ゾイさんは頷いた。
「それから――――服装も工夫したい。アンセイカさん、狩りに行くみ

んなの服に葉っぱを縫い付けてほしい。全身草まみれになる感じ。草むらに隠れるのに役立つと思う」
俺は次にアンセイカさんにお願いをした。アンセイカさんは裁縫が得意なので、女衆を集めて服を作っているのだ。ようはギリースーツだ。象は視力が余りよくないので、ギリースーツを着てしまえばごまかしが利くだろう。聴覚と嗅覚が鋭いので、完全とまではいかないまでも。
「それから――――」

「ふんふふんふん♪」
俺は川に来ていた。村人たちに仕事の指示をして、自分も武器を作っていた。もちろん俺も出撃するつもりである。死なない特性を生かして矢面に立たねばなと。
で、俺がなぜ鼻歌を歌っているかと言うと、風呂に入れるからだ。今まで風呂に入ってこなかったわけじゃないんだが、風呂って実はものすごく贅沢なんだぜ。大量の水を沸かして人間が入るって、人力でやることを想像してみて欲しい。
まあ、川にいる時点で水の問題は解決されたようなもんだけどな！水を引いてきて岩で囲むだけさ。
どうやって風呂にするかって？　石を焚き火でカンカンに熱してからブチ込むだけだぜ！
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁん〟ん〟……生き返るわぁぁぁぁ！」
最高だね。
で、なんで風呂なのかと言うと、体臭対策だ。これから挑むマンモスは嗅覚がいい。風呂に入って体臭を落としていこう、そういうことだ。
もう気にならないんだけど、この時代の人間の体臭はすごいぞ。獣臭というのかね、濡れた犬みたいな体臭なんだよね。水浴びをたまにする程度だからな。これでも衛生状態は上がってるんだぜ。定期的に水浴びをせよと俺が習慣付けさせたんだから。

マンモス対策といいつつ早速入ってるのは、まあ、役得だよ、役得。これくらいの贅沢は許して欲しい。
俺は当然のことながら全裸だった。胸が浮いてきて若干邪魔である。
「お湯に入るのか……」
後ろから水音を立ててアキラスが入ってくる。当然全裸である。
男同士の裸の付き合いだな！　いや体は女なんだけど。背中を見られたところで問題は無い。何も問題は無い。
「うっ、はぁぁ……なるほど、これは気持ちがいい。汚れもよく落ちそうだな」
「風呂に入る習慣をつけさせたいねぇ。人口が増えてきたら衛生状態も改善せんと」
「汚れは病のもとだったか。しかし、この風呂というものはなかなか準備が大変なんじゃないのか」
「そらそうよ。石を熱して入れてるだけだけど、まず火を熾さないといけないしな。温泉があればよかったんだけど、少なくとも調べた範囲じゃないみたいだしなぁ」
「温泉？」
俺は湯を掬って肩にかけながら説明をする。誰も見てないけど指を立てて。
「お湯が地面から吹き出してるところがあるんだよね。火山活動の活発なところでは良く見られるんだけど」
「お湯が!?　そ、それは大丈夫なのか？」
「大丈夫じゃない温度だったり、毒が入ってるのもあるから、全部が全部大丈夫じゃないけど、大丈夫なヤツも多いから、あれば入ってみたいよねぇ」
日本人並みに毎日入るようにとは言わないが、せめて数日に一回は風呂に入るようにしたいよなぁ。
「ソーマも狩りに行くんだろ。俺も同行する」
「おう、わかった」
アキラスを危険な目には遭わせたくないが、ついてくるなと言って

もついてくるだろう。だから一緒に行くことにしたのだ。
アキラスが背中合わせになるように腰を下ろした。
「準備が整ったらいこうな。狩りによ」
「ああ。狼煙を追っていけばいいんだな」
「そうそう、くれぐれも無茶はせず一発当てたらすぐ逃げるを徹底だぞ。いいところを見せようなんて思うなよ」
「承知してる。ソーマは死なないかもしれないが、俺は死ぬからな」
狩りの手順を話し合う。準備が出来次第開始なわけだが、数日あれば十分だと思う。穴掘りに時間が掛かるかもしれないが、そこは人口１００人の力である。
「死なないように、おまじないをしてあげようか」
「おまじない？」
俺はくるりと振り返ると、たくましい胸板にしなだれかかると、唇を奪った。
「そ。無事に帰ってこられるようにって」
「……これはどんな意味が……」
「教えてあげないよーだ！」
俺はアキラスの顔面にお湯をぶっ掛けてやった。

３２．※

「行くか」
数日後。俺はエアセナ一族の、夜の班の帰りを待っていた。夜の班は他の肉食動物の遭遇も考えハラスメントに終始するようにしている。本格的に攻撃を加えるのは、俺たち朝の班だ。この出撃で二回目になる。一回目は、マンモスに逃げられてしまった。
俺は毛皮ではなく麻の服を着ていた。あちこちに葉っぱと蔓が付けられている。それから顔を隠すために泥を塗りたくっている。これもオーパーツかね。ドーランって言うんだけど。いや白粉じゃなくて泥だから……泥ーランか？
「ふふふ……ソーマよ、後は任せたぞ」
草臥れた表情のエアセナが槍を担いで戻ってきた。群れを引き連れている。
「どうだった？」
俺が問いかけると、エアセナ君はふんと鼻を鳴らした。
「相当お怒りのようなのだ。一睡も出来ずに朝を迎えて頭に来てるはずだ。止めを刺すならば今ではないかと思うぞ」
「行ってくる。みんな行くぞ！」
俺は言うと、エアセナ一族を引き連れて森へと踏み込んだのだった。
手筈では、マンモスを見かけた辺りで狼煙を上げることになっている。狼煙を追いかければ、マンモスがいるであろう近辺に辿り着くことができるのだ。
俺は弓を掲げると、大声を張り上げた。村人達が俺の出撃を見ようと、家から出てきている。
「絶対に勝つぞ！」

数時間後。

狼煙の位置に到着した俺たちは、油断無く武器を構えて草むらに潜伏していた。みんな体臭を隠すために風呂に入り、真新しい麻の服をまとい、偽装を被り、泥を塗りたくっての出撃である。
「まるで特殊部隊だな」
これで銃があれば完璧なんだなと思いつつ、周囲を警戒する。
今日は、あらかじめ掘っておいた落とし穴に誘い込めるかを試すのだ。連日の嫌がらせ攻撃のため、マンモスは相当とさかに来ていることに違いなく、誘導は比較的楽にやれるはずだ。
「一斉に発射してこっちに気がつかせて誘導しよう。気がつかなければ、もう一回だ」
第一目標は落とし穴に嵌めること。第二は、矢をしこたまブチ込んで体力を削ぐことだ。
「いくぞ」
そして俺たちは静かに、マンモスの捜索に入った。捜索に入ってすぐにマンモスのものと思しき大量の排泄物を発見した。
「まだ温かいな」
俺は排泄物を触って確かめた。
布団じゃないんだからさ。いや、でも本当に温かいんだ。草食だけあって臭いがきつくなく、水気の多い腐葉土のようだ。象の排泄物もまた資源になる。紙の原料に向いているし、メタンガスを取ることもできる。
いかんいかん。マンモスの飼育とか寝言は寝て言えってんだ。
「ソーマ、見つけた」
男の一人が遠くを指差している。いた。のしのしと歩き回る巨大な影が。体のところどころに矢が刺さっていている。足取りもフラフラとしていて、落ち着きが無い。
俺は手で合図をすると自分も弓を握り、矢を番えた。
そして無言で一発射掛けた。仲間も一斉に矢を放つ。
「!!!」
!!!
七割が命中と言ったところ。マンモスが鼻を高く掲げて振り返った。

俺たちは一斉に落とし穴の方へと走り始めた。数日間に及ぶ攻撃にも関わらず、マンモスの動きは俊敏だった。毒が効いてない気がする。量が少ないのか、マンモスには効かないのか。

俺たちは落とし穴を迂回しつつ距離を取り、待った。

「……」

あろうことかマンモスは落とし穴前で止まった。そしてこれ見よがしに岩を掴むと、落とし穴を作動させてみせた。俺たちの目論見は外れた。

「……!? 散れ!!」

作戦失敗である。やはりこのマンモス、以前人間相手に相当酷くやられた経験があるのだろう。生きているということは、人間から逃げ延びたのか、逆に狩ったのか……。

俺の言葉に従い、一名を除き全員が四方八方に蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

「ソーマ! 逃げるぞ!」

「ああ!」

まるで騎士様(ナイト)のように槍を持ったアキラスが俺に並んで走る。

なぜかマンモスは俺のことをロックオンしているらしく、逃げた面々には目もくれずに直進してくる。口から唾液を流し、鼻を振り乱しながら突進してくる様は、見ていて腰が抜けそうになる。

「くっそ速いっ!! 木に登ろう!」

落とし穴にかかるものとばかり思っていたので、木に登る事態に発展することは想像していなかった。いやだって落とし穴だよ? どうやって見抜いたんだ?

……そうか、俺たちが不自然に左右に避けて通ったからか! 人間と戦った経験があるらしい固体だ。落とし穴にもかかったことがあるのかもしれない。

木登りと簡単に言うが、登りやすい木と登りにくい木というものがある。見渡してみても針葉樹が生い茂っていて、枝が果てしなく上に生えている。

背に腹は変えられぬ。俺は木にしがみつくと、尺取虫のように全身

を使って登り始めた。
「ちいっ!?」
アキラスが間に合わずに鼻に捕まった。そのまま地面に放り投げられる。
「アキラス!!」
アキラスは不死身じゃない。俺は木から飛び降りると、鉄製の穂先を持つ槍を構え突進した。
「!!!!!」
マンモスが鼻を振り回す。俺のことを捕まえようと言う魂胆らしい。
俺は身をかがめて鼻を掻い潜ると、まずは浅く、足に槍を突き刺した。
「ぐああっ!?」
連続攻撃だと思ったんだけどね。次の瞬間には宙を舞っていたよね。二回転してから木に叩きつけられる。
呼吸が出来ない。槍を地面に突き刺しながら姿勢を起こす。
「食らえ!」
俺目掛けて突進してくるマンモスに対し、アキラスが驚異の動きを見せる。槍を口に咥えたかと思えば、マンモスの体毛をよじ登って脳天に一発くれてやったのだ。
そういえば君も原始人だねって、いや原始人のバイタリティどうかしてるよホント。
「何っ!?」
脳みそに刺さってれば決まったんだろうな。頭蓋骨が分厚すぎて鉄製の槍が刺さらずに横にずるりと流れなければ。
「アキラス!」
アキラスが振り落とされる。俺はここぞとばかりにダッシュすると、足と足の間に滑り込んで腹に槍をブッ刺した。
「おっ、おおおおおっ!?」
鼻で掴まれて地面に打ち付けられる。鼻から血が吹き出るのがわかる。

あ、やばい。意識が……。
打ち付けられる。
打ち付けられる。
打ち付け……。
「!!!!!!」
マンモスが吼える。鬨の声が聞こえた。
ようやく俺が意識を取り戻したとき、散開したはずの仲間たちが戻ってきて矢を射掛けている場面が見えた。とにかく逃げろと言っていたはずなのに。
「神様を置いて逃げられるわけがないでしょうに！」
男の一人が言ってくる。ばかだなぁ。俺不死身なのにな。
俺はアキラスに腕を回しながら立ち上がった。
「……」
マンモスがぐったりと倒れこんでいた。連日に及ぶハラスメントと攻撃。出血もしているだろうし、毒も回っている。
止めを刺すならば今だろう。
俺は槍を受け取ると、ゆっくりと近づいていく。槍をマンモスの眼球目掛けて狙いを定めると、力いっぱい突き刺した。
「……」
マンモスがびくんびくんと痙攣していたが、やがて力が抜けて静かになった。ヘビのようにのたうっていた鼻も脱力して地面に垂れた。
俺は槍を引き抜くと、血でべたべたの鼻を手の甲で拭って拳を突き上げた。
「やったぞーッ!!」
『おおおーっ!!』
俺の声に合わせ皆が声を張り上げて拳を突き上げた。
俺はアキラスの方を見た。
「アキラスさあ」
「ああ」
「子供作ろうか」
「ああ」

３３．宴

宴だ。

俺たちは仕留めたマンモスを全員掛りで解体し、村に運び入れた。骨や皮や内臓を除いても、重量にして3トンはあるんじゃないか。肉と言うのはとにかく腐るのが早い。内臓は更に早い。レバーなんかの調理しやすい部位は調理するが、他の部分は食材ではなく材料にすることにしたのだ。骨は言うまでもなく、腱は弓に使えるし、腸や胃は袋に出来る。

何しろ人口が１００人もいるので全員で分けると、一ヶ月はもたない。それでも一ヶ月肉だけにはなるが、食料に困らないというのは素晴らしいことだ。狩猟に出ている面々が、他の仕事をできるということになるからな。

その日の夜。俺は全員に新鮮な肉を振舞うことを決めた。どうせ明日以降は塩漬けか燻製になるのだ、新鮮な肉を食えるうちに食えるだけ食っておくべきだ。

「あーだる」

だるい。とにかくだるい。体を動かした後と言うのはとにかくだるい。マンモスにぶん投げられたしね。もう二度とごめんである。不死だからゾンビ戦術使えるけど、普通に痛いからね？　痛いのが好きな人もいるけど、俺は嫌いなので。

だるい理由は他にもあるんだけど、この辺はどうでもいいだろ。

俺はぶんどってきたマンモスの牙に腰掛けていた。熱々の肉を今か今かと待ちわびている。

熱々と言ってもレアじゃないぞ。俺が来る前までは肉に加熱する理由が「おいしいから」「柔らかくなるから」「多少腐っていても食べられるようになるから」であって、感染症や寄生虫のことなんて考えもしない状態だった。表の赤いところがなくなるまで熱を通すということをやらせたら劇的に食あたりになる人間が減ったので、つまりそういうことだ。

「神様！　お肉焼けましたよ！」

「ああ、ありがとう！」
一人がマンモスの肉を持ってきてくれた。土器のプレートに乗った骨付き肉である。
「おいしいな」
「一戦交えたあとの肉は格別だろ？」
俺はアキラスとくっつくように座っていた。アキラスもだいぶ疲れているように見える。
こういうときは肉である。
熱々の肉を歯で食いちぎる！　うむ！　うまい！
「ハンバーグにしてもいけそうだなっ！」
「ああ、あの肉をミンチにして固めたあとに焼く料理か」
アキラスがどこか呆れたように言う。料理に関しては、俺が毎日試行錯誤しながら出している。まだ作れない料理とか、作ってみたい料理なんかを話してきたので、ある程度知識があるのだ。
「そこまで手をかけて料理をする意味ってあるのか？　肉は肉で食えるじゃないか」
これである。原始人特有というか、アキラス特有かもしれないが、食えればいいんじゃないのかという精神である。
「いや！　断じて否！　生きることは食べることだ！　どうせならおいしいものを食べるべきなんだよ！」
コレは割りと合ってると思う。おいしいものを食べたいが世界を動かしてきたに違いないのだ。そうじゃなきゃ料理なんて文化が育ってきたはずが無い。
「そ、そうか。まあ、おいしいものが食えるなら文句は無いが」
なんてこと言っちゃって俺の料理をいつもおいしそうに食べてくれるのだった。
肉をとにかく食らう。感覚になるが４００ｇはあると思う。大き目のステーキ一枚分と言ったところか。大食い属性はないのでこの量でも結構こたえる。
「うまいな！」
「ああ！」

などと言いながら俺たちは肉を貪っていた。
「この、ワインが肉に合うな」
「だろー？　作ってよかっただろー？」
ワインを飲みつつである。俺が仕込んだワインだ。まだブドウの収穫が出来ていないので、このワインは天然もののブドウで作ったさしずめプロトタイプみたいなもんだ。ブドウの収穫が出来るようになったら、本格的に製造をスタートしたいね。世界初の酒造所を作ってみたい。
そんなわけで、宴でみんなが飲んでいるのはベリー酒である。甘酸っぱくて、なかなかいけるんだ。ちなみに子供も飲んでるぞ。特に子供だから飲んではならぬというルールもないので。まず、成人とはなんぞやというところから決めないといけないよなぁ。
「ワインときたらチーズが欲しいねぇ」
「ウシとかいう生き物の乳を固めるといってたやつか……可能なのか？」
「子供を浚ってきて懐かせたらいける気がする」
「親ウシに突き殺されなければいいけどな」
「うむ……研究が必要だよな……」
俺とアキラスが話し合っていると、ベリー酒をガブ飲みしつつエアセナ君がやってきた。酒に強いらしく、一気飲みしても顔色一つ変えていない。
「流石だなソーマよ！　俺様の妻になれ！」
「え？　やだ」
「と゛う゛し゛て゛なのだ!!　何が足りないのだ！」
俺が首を振ると、エアセナ君が地団駄を踏む。ははは。多夫多妻が当然とは言っても俺はそういう主義じゃないので諦めてほしい。
「まあ、気が向いたらね」
「むううううう！」
と言ってはぐらかしておく。別に俺じゃなくてもエアセナ君ならいい女の子が見つかることだろう。群れの長であり、最新技術である鉄を作っている年頃の男だ。健康なので子作りにも問題なし。ほっ

といても女の子が寄ってくるだろう。
「明日からは何をしようかなぁ……」
俺は壷から二杯目のワインを汲み取ると、肉にかぶりついてもぐもぐしながら呟いた。
食料はあふれるばかりにある。鉄製造の最大の障害になっていたマンモスは排除できた。やはり鉄作りだな。鉄作りと、あとは……。
「周辺の調査に出かけるのと、山にも登りたいよなぁ」
「山？」
地面に寝そべっているエアセナ君が反応してくる。
「そうそう。周辺の地形を把握しておきたいんだよねぇ。ここが単純に海沿いなのか、半島なのか、島かもしれない」
周囲の状況を知る方法は限られている。一番いい方法は、やはり、俺達の村の傍にある、あの山の頂上まで登って周囲を観察することだろう。
俺達はごくごく狭い領域で生活している。俺達の現在の行動範囲は直径１０ｋｍくらいだろうと思う。行きに二時間仕事に一時間帰ってきて二時間でも、日暮れ前に帰ってこられることを考えると、それが限界と言える。舗装なんてされてる場所が無いので、とにかく移動に時間がかかる。
活動領域を広げれば広げるほどに、様々な資源（人も含む）が見つかって、生活が豊かになっていく。まずは周囲の地形を把握しておきたい。
「ハントウ??」
「大陸から突き出た地形って意味ね」
「島ってことはないと思うのだ。俺様の一族は歩いてきたわけだからな」
「途方も無くでかい島かもしれない」
「ううむ……」
オーストラリアも日本も考えようによってはでかい島だから。まあその理屈から言うとアメリカ大陸もユーラシアもってなるのでこのあたりで勘弁して欲しい。

とにかく、もしかすると島かもしれない、あるいは半島かもしれないという疑問を解消するには、山に登ってみるしかないだろう。前回登ったときは、頂上まで登らなかったからな。

「それから……」

俺が話していると、続々と村人達が集まってくる。俺はみんなに今後やりたいことを次々と上げては酒を飲んで、気がつくと眠ってしまったのだった。

３４．ソーマディア爆誕

〝ソーマディア〟村を発った俺達探索隊は、〝フジ〟山に向かっていた。

名前をつけることにしたのだ。あの山だとか、あそこ、ここ、ではコミュニケーション上の齟齬が発生する可能性がある。山に関してはそうだよ、俺の発案だよ。フジヤママウンテンだよ。そんなに高くないけどな。１０００ｍくらいじゃないか？　周囲に高い山が無いので、それでも十分高いけどな。

『俺のいた一族では、～ディアというのは場所とか土地を示す意味だった』

という発言をした男がおり、その案を聞いた村人達がソーマディアという名を考案してくれたのだ。俺達の村じゃしまりが悪いので、これからはソーマディアと呼ぼう、と決まった。

それからは凄かった。というのも、当然過ぎて見落としていたんだが、地名をつけるという概念がなかったらしい。そらそうだ。移動して生活してるんだから、地名をつける意味が見出せないのだろう。遊牧民みたいにまた同じ場所に戻ってくるならまだしも、同じ場所に戻ることすら稀だったらしいからな。

今回は、アキラスやエアセナはついてこない。アキラスはマンモスの肉を加工して保存食にしたり骨を取り出して素材にする作業があるし、エアセナ一族は砂鉄の運搬と鉄作りをやらねばならんからな。

と思ってたんだけど、俺が男をかき集めている時にメルセナ君がやってきたのだ。

「いく」

「えっ？」

メルセナ君は無口な子で、喋っても一言二言という非常に難しい子である。狩りが得意なセナ一族の中でも罠作りが得意だったと聞いている。今は鉄作りをやっていたはずだ。

そんなメルセナ君が言うのだ。付いていくと。

「なんで？」
「子供」
「????」
だめだ、わからん！　せめてもうちょい説明して欲しいんだけどなぁ！
ま、まぁええやろ。頂上目指す帰りに隕石を持ち帰る予定なので、人ではいくらあってもいい。ついでもついでに、フジ山の洞窟も探索する予定である。二日か、三日の計画だ。
「産んで」
「はい？」
「子供」
「はー……」
精通もまだな子に求婚されてるんですけどぉ……。
俺はため息を吐くと、頭をなでなでしてやった。
「立派な大人になったらね」
「うん」
こくんと頷くメルセナ君。わかってるのかなぁ。
さて、二度目になる登山である。楽なルートは前回木や岩にマーキングをしてきたので、今回は痕跡を辿るだけでいい。
「半島だったのかぁ」
俺は山の頂上に生えている木によじ登って絶景を拝んでいた。俺が暫定的に決めた『南』側は海で、ぐるっと回ってきて『北』側は大陸が続いている。俺達がいるのは半島の隅っこらしい。
大陸の向こう側に目を凝らしてみてみるが、唐突に富士山級の山が聳えていましたというわけでもなく、小高い山がいくつか見える他は森と草原が散らばっていると言ったところだった。
「なるほどね、うーん」
俺は早速粘土板にナイフで地図を削り始めた。粘土板の正しい使い方としては水分を含んで柔らかい時に形を刻むんだが、何せ旅先なのでそうも言ってられない。
「もうちょい霞が晴れてくれたらよかったんだがなあ」

霞がかかってしまっていて、遠くまで見通すことができない。有視界３０ｋｍくらいかな。富士山から伊豆までがそれくらいだったかな。

まあ、優先度はそこまで高くない作業だ。この半島ですら探索し切れてないのに、大陸のことなんて手が回るわけがないのだ。

「よーしみんなー、隕石拾いにいくぞー」

次である。隕石の落下地点に下っていった俺達は、早速隕石拾いを始めたのだった。

「これ」

メルセナ君が隕石（本体）をぺしぺしと叩いている。

「うん？」

「持ち帰る」

「いやぁ、重すぎて無理でしょこれ……」

この、名付けるならばフジ山隕石は鉄の成分が多く、とにかく重い。俺の予想になるので正確な数字ではないが、３トンはあると思う。このブツを村まで持ち帰れるかと言うと……。

「残念」

「欠片を持ち帰ろうね」

鉄を作るものとしては、やはり巨大な隕石はロマンを感じるのだろう。

俺はしょんぼりしてしまったメルセナ君を撫で撫ですると、隕石の捜索に入ったのだった。

次である。三日目のことだ。思ったより隕石捜索に時間をとられてしまった。想像したよりも隕石の破片は少なく、もう殆ど取り尽してしまったらしい。地面を掘ってみたりしてかろうじていくつかを見つけることに成功した。これ以上隕石に頼れないということだな。

俺達は、洞窟へ侵入していた。松明を持ち、口を麻の布で覆ってである。ヘルメットもあればよかったんだけど、そんなものない。

「うわぁぁっ!?　か、神様ァ！　この黒い鳥はなんなんですかい!?」

「これは蝙蝠だね！　こう見えて鳥じゃないんだぜ！」

元気の良い悲鳴を上げる男。洞窟はがっつり蝙蝠の巣窟となって

いた。夜行性なのに飛んでいるのは、俺達が侵入してきて驚いたからだろう。
「うへぇ……」
洞窟内部、蝙蝠が大量に群れているところは、きついアンモニア臭のする糞が文字通り山のように積み重なっている。しかもゴキブリ？が糞の上を這い回っており、ゴキブリに対して嫌悪感のない原始人の感性を持ってしても嫌なものらしく、皆が顔をしかめている。
「臭い」
「そうね。まあ、それはしゃーないね……でもこれがあるのがわかっただけよかったよ」
メルセナ君が正直な感想を述べてくれる。
俺は聳え立つ糞の山（比喩にあらず）から外れた壁面が白くなっているのを発見した。バット・グアノだ。数千年単位で糞が積み重なった結果、成分が化石化したものだ。リンを含むため、肥料にはうってつけと言える。化石化していない糞でも、発酵して肥料化しているものもあるだろうから、農業に使えるだろう。
「ちょおおおおい！　ダメだ！　それはダメ！」
「え？　なんで？」
一人がおもむろに蝙蝠を捕まえ始めたので俺は慌ててやめさせた。まあその辺にたくさんいるので石を投げつければ簡単に捕まえられるけどさあ。
「蝙蝠を食うのは絶対にダメ！　だめったらだめ!!」
「わかった……」
蝙蝠だけはだめだ。吸血蝙蝠だったら、どんな動物のどんな病気を貰ってるかわからん。哺乳類版の蚊みたいなもんだぞこいつら。伝染病を持ち込ませるわけにはいかんのだ。
「神様、この、この……糞をどうするんですかね？」
男が言いにくそうに言う。こんなに大量の糞をみたことがないのだろうね。俺もだよ。
「肥料にするんだ」
「ヒリョウ？」

「そう。植物も人間と同じように、土から栄養分を吸い取って生きてるんだけど、蝙蝠の糞はリンを多く含んでるんだよね。持ち帰れるだけ持ち帰ろう。生の糞じゃなくて、こっちの固まってる方ね」

そういうと俺は早速化石化したグアノを籠に放り込み始めたのだった。

３５．赤ちゃんはどこからくるの

冬だ。今年の冬は幸いなことにそれほど寒くなく、作業に没頭できる。

この冬、また２０人程が村に合流した。話を聞くと、やはり狼煙に引きつけられたとのことだ。上げていて正解だったな。数年前、十数人しかいなかった頃の十倍だ。ベビーラッシュも続いているので、もりもりと人口が増えていっている。子供増えすぎて人口ピラミッドが凄いことになってる気がするけどな。

さて探索である。俺は山の頂上から描いた地図をいくつか作り、四方向に向けて人を放つことにした。人がいれば呼び集め、有用な資源があれば場所を確かめるのだ。まずこの半島を探索して、それから大陸のことについて考えよう。

「あとは島か」

そう、島である。ソーマディア傍の海岸からは、島が見える。これも予想になるが１０ｋｍはあると思う。海流によってはたかが１０ｋｍでも到達不可能なケースも大いに考えられるので、今の手漕ぎボートではなく帆のついた船を作ったら挑戦してみたいね。

さて今日は探索に出る前に、教育の時間である。

何しろこの世界の人は現代的な知識と言うものを全くと言っていいほど知らない。教育しないといけないのだ。そして教師は俺一人である。とはいっても１２０人同時に教育とか無理ゲーなので、一家から代表者を一名選んで来てもらう事にした。

何を教えるか。そう……。

「性教育の時間だぁぁぁぁっ!!」

「そんなに盛り上がることなのか……？」

俺は呼び出した面々の前でテンションをアゲた。

なぜ性教育か。優先度の問題とも言えるな。これまでも、『死体は必ず火葬して埋めろ』とか、『魚や獣の肉は必ず火を通せ』とか『糞尿を触ったら必ず手を洗え』とか、基本中の基本は教えてきた。これか

ら教えるのは、人口増加に伴う上で重要なことである。そう、性教育だ。
「ということで今日はみんなに性教育をしようと思う」
俺は例のごとく岩に登って話をしていた。村人達が俺を取り囲んでいる。
「ちょっと待つのだ。子供の作り方なんて誰でも知ってると思うのだが」
元気よく手を上げたエアセナ君が突っ込みを入れてくる。
「おっ、どうやる？」
「どうって、股間から生えてるものを女の穴に入れて白いのを出せばできるのだ」
そうなのだ。大体の認識はあるようで、だからこそ子供を作れていると言えるが。
「原理はわかる？」
「……ううん？　うううううう……」
誰も答えない。
「実は女性の中には小さい卵があって、それに男性が白い液をかけると子供が出来るようになってるんだよね。この中で魚の交尾を見たことがある人！」
俺が手を上げてみると、ちらほら手を上げる人がいる。
「魚は体の外でやるんだけど、人間は中でやるんだ。その為に人間の性器――子作りに使うための部分は、長くなってる。というか長くなる。これを勃起と言うんだけど」
なるほどと感嘆の声が漏れる。君たちはいいよな。俺なんて立つものがないんだぜ？
「女性は分かってると思うけど、定期的に血が出るでしょ。あれは古くなった卵を捨ててるのね。目で見ても分からないくらい小さいから、卵はわからないと思うけどね。これを生理と呼ぶと」
俺もだが、この体、ばっちり生理がある。不老不死のせいなのか単純な個人差なのかは知らないがそんなに重くないからいいけどな。
「逆に言うと血が出るようになったら子作りをしてもいいという合図

になると。一応ね。だから今後の決まりとしては血が出てない子と結婚して子作り――セックスはしないようにしたい」
「どうしてなのだ？」
「体への負担が大きいんだ。あと、血が出たからと言って、すぐに子作りもよくない。みんな経験的に知ってると思うけど、子供が出てくる穴が小さいと、負担が大きいんだ」
　出来なくはないが、あんまり小さい子がセックスしちゃうとねぇ……初潮がきたからってよっしゃ子作りするわは早計だと思っている。妊娠は出来ても出産が辛いからな。やはり、暦を〝開発〟する必要があるか。
「で、男の子供の元と女性の卵がおなかの中で出会うと、子宮と呼ばれる中で――えーっと、えーっと、三十の……一日が、３００回くらい経ったら出産すると」
　あ、３００回の意味がわかってない人が大勢いるらしい顔だ。ううむ。数字も教えないとダメだな。
「えー、というのが子供が出来るまでだ。で具体的な作り方は先ほどもちらっと言ったんだけど勃起させた男性器を、女性の穴――女性器に入れて白いの――精液を出すと、妊娠――つまり子供が出来るわけなんだけど」
　ここからが本番である。俺は、新世界の性の伝道師になる!!
「この、セックスは、気持ちがいいんだっ!!」
『……』
　反応がわかれた。男性はまぁそうだなという顔をしている一方で女性のなに言ってだこいつ顔が心に沁みる。
　いいんだよ男は射精すれば気持ちいいからな！　だけど！　女は！　準備して！　慣らさないと！　あと雰囲気！　気持ちよくならないんだよ！　というか痛いんだよ!!
「なぁアキラス！」
「なぜ俺に振る」
　俺は腕を組みつつ岩から飛び降りた。
　しかし、いちいち単語を補完しないといかんのは難しいな。やはり

文字を〝発明〟するべきか。
「行為中に女性の穴――膣から出てくる液――愛液が出てくると思う。これは性行為をスムーズにしてくれるものなわけね」
　これは分かる人も多いんじゃないかね。頷いてる人もいるしな。
「で気持ちよくなる方法なんだけど、あぁーなんていうかな。穴の上のところに小さいぽっちがあるんだけど、そこを刺激することで気持ちよくなるわけなんだけど。すぐに射精しないで長時間動かしてると、気持ちよくなってくる人もいたりする」
　あのーすいません。そこの女の人服脱いで確かめ始めるのやめてもらっていいすか。
「気持ちいい感じを継続していくと――オーガズムに達すると。オーガズムって俺も詳しくは知らないんだけど、気持ちよさの絶頂っていうのかな？　に達すると。ここから先は各自やって貰ったほうがいいかな。なんでこんなこと教えたかって言うとどうせやるなら気持ちがいいほうがいいからってことね」
　効率だけ求めるなら、セックスなんて数分で終わるんじゃないか？
　入れて出して終わりだもんな。けどやはり人類を名乗るならセックスには時間をかけてみたいだろ？
「そうだったのか」
　帰り道にアキラスがそんなことを言ってきた。
「痛いなら言えばよかったのに」
「いや！　そこは男としての沽券にかかわる！」
「ソーマは女だろ……ちなみに痛さと言うのはずっとそのままなのか？」
「慣れてくれれば痛くならない！　らしい！」
　不老不死だ不死身だと言え普通に痛いものは痛いからな。何の痛みかって？　うるせぇ。
「聞いている話を総合すると気持ちいいことを継続していると、女性側もものすごく気持ちよくなってくるということか」
「それだと男性側も持たないことも多いから、手で触ったり、口と口合わせたり、おっぱい触ったりとか色々あるけどねぇ」

まあやられる側になるとは思ってもみなかったわけだが？
「実践してみるか。今日、夜」
「や」
「なぜだ……」
「気分」
俺は不満そうな顔をするアキラスに舌を出してやった。